798-167
1200501607575
798
167
O
複写

淺花金集

少之

昭和十二年九月十六日　自宅書齋に於て

（撮影　木村伊兵衛）

798
167

目次

冠彌左衞門（明治二十六年五月）……一
活人形（明治二十六年五月）……一四五
金時計（明治二十六年六月）……二一九
大和心（明治二十七年八月）……二三五
豫備兵（明治二十七年十月）……二五九
海戰の餘波（明治二十七年十一月）……三二七
譬喩談（明治二十七年十一月）……三九一
義血俠血（明治二十七年十一月）……四一五
亂菊（明治二十七年十一月）……四八九

鬼の角（明治二十七年十二月）……五七一
取舵（明治二十八年一月）……六一七
聾の一心（明治二十八年一月）……六三五
祕妾傳（明治二十八年三月）……六五七
夜行巡査（明治二十八年四月）……六九三
泉鏡花年譜……一
泉鏡花作品年表……一

冠彌左衛門

一

星月夜鎌倉長谷の片傍、權五郎景政が社の境内に、小喧しき力聲は、極樂寺近邊の壯佼ども、腕強を擢りて十五六人、いづれ劣らぬ暴くれ男、ぐるりと輪になる眞中には、大小の石二ツ。是や昔景政が、手玉に取りしと言傳ふる、力石を扛むとて、或は肌脫赤條々、繩の腹卷、藤蔓の顱卷なんどに氣競けり。江島參詣の歸途か、五人ばかりの一群あり、客と見ゆる色白男、雪の下の藝者と肩擦並べ、取卷には雛妓、茶屋女、飛んだ荷物は食醉うたる野幇間の亂拍手、哄と噪動いて來りしが、こりや面白しと立寄りて、力試を見物す。

鼻に汗かく血氣盛りは、女の前の見えを飾り、天晴力鼎を扛げて、腕に思ひを懸けさせむ、と先づ一番が登瀧の三九郎、三十五貫の大の方に、諸手を懸けて、うんとこな。遠吠のやうなる聲を揚げて、押せども曳けども埒明かず。代りて出たる猿松は、汗に茹つて眞赤になれど、膝より揚らず引込めば、ちえゝと悔しがりて三番に、目白の胴六同じく駄目なり。

見物の女可笑さに腹を抱へて、行かむとするを、旦那樣もうちつと、と雛妓が留め、まだ中入

前之からが眞打、若い衆頼みます、と幇間が囃せば、若連中やつきとなり、それ覺えのあるのがちやつと出て、二つも一所に扛してくれ、權五郎組の沽券が下る、貴樣やツつけろ、まア〳〵汝が出い、と猶豫ふ處へ、一人が呼んで來た、之は見るから强さうな大の男、向顱卷にてづいと出る。

壯佼ども力身立ち、鐵公來たか難有え、女郎今に見ろ、驚くな。しつかり〳〵、と聲援すれば、件の强者兩の手を丁と拍ち、えいやッと聲の下、苦も無く胸にて支へたり。

幇間扇を颯と開き、喝采〳〵。日本一の强の者……が、おや目を白くした、それ黑くした。舌を吐くぞ、切齒をするわ。と連りに嘲れば、癇癪一時に込み上げて、鐵公は死力を出し、一息入れて腰を捻り、うツといきむ拍子の惡さ！　思はず尾籠を振舞ひければ、さらでも堪らぬ藝妓、雛妓、客も下女も幇間もろとも、腹を抱へて、死ぬる死ぬると笑ひけり。

暫時して四邊を見れば、何時の間にやら、一人行き二人行き、夕日の影は此方等ばかり、機の惡さに遁げたと見える。入らぬ腕立笑止々々と、假聲まじりにさゞめきて、さあ行きましよと退際に、姉樣如何程重量ものだらう、と雛妓が要らぬ穿鑿、力石に手を懸けたるを、社の裏の森蔭に二つ雙ぶ梟の眼、樣子を覗ふ放屁の鐵、十五六人後に立ちて、それ出ろ。とばら〳〵。

あれと遁げる雛妓の小腕、鐵が捻ぢて抱竦むれば、一足先の四人連、これはと驚く間も無く、

大勢にて押取卷き、やい汝、力石に手を懸けたな。誰でも來い、此石に指でもさした奴輩は、赤子でも病人でも、持たさにや置かぬ村の定法。さゝ上げろ、持つて見ろと力任せに小突廻され、雛妓は哭いて詫れども無法者は肯入れず。これさ野暮なことを、よしやれ〳〵。と止むる幇間。汝が一體氣に喰はぬ。と腦天ぽかりと啖はされ、飛出さぬかと目玉を押へてよろめけば、咄嗟と騒ぐ女伴。野郎にも遺恨がある、袋叩きにして了へ。女輩は擔げ　念佛だ。——あれ人殺、助けておくれ。

そりやこそ喧華と人の山。女子供を、あれ非道い奴輩だ、弱い方に加勢をしてはやりたけれど、對手は權五郎組の若い者、之にはあやまると、誰も彼も手を束ねて高見の見物。

表が騒がし。何事、と二階の簾を卷き上げて、欄干に半身を現したるは、嬋娟たる孃子と見紛ふばかりの少年なり。高妙寺是空上人が祕藏の美童、年取つて十八歳、其匂やかなる姿には、花も色なく見えにけり。

落花狼藉の光景を、見るよりふつと内に入りしが、あれお危ない皆さん止めて、と媚めかしき女の金切聲、見れば縋りて止むる女を振切り、格子戸がらり、飛出す少年、足袋跣足のまゝ一文字！　暴れものの群がる中へ、容赦も無く猛然と躍込めば、やあ小癪な二才、小指で彈け、と總がかりで哄と寄する時、一足二足身を退きて、ひらりと飛んで、石燈籠の笠石にすつくと立つ、

不思議の早業。さすが前髪は汗に濡れ、鬢の亂れを搔拂ひ、ほと一息して、働き自由ならぬ兩の袂を結ばむとする足下へ、ふわり、丸げて投げたる藝妓の腰帶、咄嗟に綾取る深紅の襷、眞白き腕に麾きて、さあ來い、靈山の卯之助だ。

二

弱い者虐めの疫病の神ども、憎しと思へる見物は、此立役に手を拍ちて、名ばかり聞きたる高麗屋と、どつと崩るゝばかりなり。

卯之助身輕になつて、さあ來いと突立てば、飛んで火に入る夏の蟲、それ捻れ、合點だ。と棒ちぎり、丸太薪など亂るゝ間に、早瀨を潛る若鮎の、小太刀つかうて働くを、二階から覗き、門口に飛出し、階子に坐りて眼を塞ぎ、南無觀音樣。樣子を見てはあれ〳〵と、くる〳〵舞ひして氣を揉むは、餅屋の娘小萩といふ可愛らしき女子なり。

お若衆しつかり負けまいぞ、と口々に加勢して、石を投げ砂を飛ばして氣競ひ懸れば、しどろに亂るゝ五郎組、素早き見物七八人、隙を見て駈け出し、小さくなりて蹈る藝者の群を取卷きて、手足纏ひは働きの邪魔になる、えゝ、禮どころかい、それ逃げろ。

逃げての後は喧嘩に張無く、一人の若衆に駈惱まされ、又仕返しの折あらむ、皆が一まづ退い

た退いた、と臆病風に誘はれたる五郎組、濱邊をさして總崩れ、見物の中へ紛れ籠めば、石を投げたる彌次馬連中、讐さるゝよと打騒ぎ、傍杖喰ふな、と一同に、猫も杓子もちり〳〵ばら〳〵。

汚なし返せと言ひはせしが、素より好まぬ達引ゆゑ、卯之助好き程に追ひ棄てて、悠然と引返せば、四邊は既に靜になるを、見澄して小萩駈け出で、日本晴業お勇しや。まあお怪我は無きか、おせつなかろ、はや家へ來てお休息なされ。あれまあお召が大層に、と染小袖の後前、塵埃はたいて介抱すれば、好いわ、介意な、何とも無し。ちと手拭を貸してたまはれ。汗になつた、と帶にはさめる手拭借りて、衣紋を寛げ、身體を拭ひ、歸山も急げど喉渴きぬ、お茶一つ雜作に成らむ。さあお出。と連立てば、小萩が母親出迎へ、煽ぎたてて手柄を賞め、ともに無事をぞ祝しける。

沖の暗いに白帆も見えず入相過ぎて宵闇の、時雨模樣の秋の空。往來途絶ゆる海岸通、一際黑きは松並木、仄かに白きは流の水、四邊寂寥とする折しも、長谷の方より二人の跫音、一散に駈附けて、閻魔川の下流なる、海岸橋にて立止まりつ。

這個の歸途は慥に此道、不覺を取つた報讐に、天の與へか、眞の暗夜。いつかな鞍馬の御曹子も黑白が見えねば盲目同然。寢鳥を刺すに譯は無え。跫音合圖に後から、鐵、猿、脫心な、合點だ。と寢刃合せたる大刀の、鯉口ぷつり。忍べ。忍べ！

に立てられて、名主であらうが、庄屋であらうが、糸瓜とも思はぬ身が、鍛冶の伯父樣に心から惚れ、叱られては謝言りました。其人死んで家退轉、仕返しを仕度けれど、何を言ふにも手强い對手、其上傳次が采配ぢや、根から埒が明きやせぬ。遺形見の子は無くとも、志を嗣ぐに足る、好き養子は無いことか、とやう〳〵に探し當てた高妙寺のお若衆樣、此骸骨は、と傳次異體な者を差出して、鋭鎌利平が昔の生首。梟木に懸けられて、由井が濱の鹽風に吹曝されし白髑髏、今いふ通りの履歷なれば、讐へ赤の他人にても、親として恥かしからず。なれども子となるに恥ぢざるものは、此方を置いて外に無し。名家の跡を絶さじ。と思ひ入つたる傳次の赤心、お氣に入つたらなんと此方樣、養子になつては下さるまいか。おゝ、發奮だる言分面白し、傳次、媒賴んだ。と草折敷きて行儀を正せば、傳次手を拍ち、目出たいな。鍛冶の叔父さん。三國一の子が出來た。と生たる人にいふごとく、其白髑髏を伏拜みぬ。

四

村名主の六右衛門、表口にのつさりと差合繰らぬ胴謾聲、婆樣内にか。六右衛門ぢや、御意得ましよ。と音訪へば、親娘取膳の箸を止め、あい、居ります。誰方、お這入りなされませ。そんなら御免。と提灯消し、裳はたきて、づか〳〵通る。

膳押片付け手をつきつゝ、これは名主様、お出。夜に入つて急用か、小萩や、お茶を。あい、あい。と口輕に埃拭うて乘せて出す盆ごと取りてぐつと干し、あちや、あちや、これは好いお茶頂けます。ぢたい煎れ人が別嬪ぢやて、澁かろか知らねども、とんと頬桁がちぎれやす。甘露甘露、と騒々し。見れば麻の上下扮裝、ほ、ほ、名主様本式ぢやの。葬禮の歸りかえ。ぷウ滅相な、鶴龜々々。鶴と龜とが婚禮の媒妁役ぢや、やあ、若い者其品これへ。と差圖の下。

壽留女、來舞布、家内喜多留、末廣に偕白髪、千疋包みに水引掛け、目錄添へて恭しく目出度目出度と、二三人門口より持込めば、小萩も母も興覺顔。

其處へ直せば用濟だ、歸れ〳〵。と歸らせて、六右衞門座を正し、結納の驗迄、目錄お目に懸けまする。幾久敷御受納被下べく候。とのべつに饒舌りてけろりとする。母親は屹となり、襟搔合せて膝押進め、聞けば、行逢橋邊に、末社が轉業するさうな。名主様魅入れてかいな、お笑止や。家内に娘は居りますれど、緣組みした覺ござりませぬ。門違か、と遣込むれば、肩をゆつて打笑ひ、うむはゝゝ、咽喉から手を出すほど嬉しがつて居りながら、いやさて、大層な勿體ぶり、今更めて婿殿をいうて聞かすが、振附くな。雪の下の白銀と名に轟いた石村様、御祕藏の一粒息子、岩永様に奉公なされて、滅法な御氣に入り、祿高は千五百石、石村次郎藏といふ御方、どうした風の吹廻しか、御緣組遊ばさるゝ、媒妁は誰あらう、長谷村名主六右衞門。と扇で膝を叩き

けり。

小萩はハッと胸を打ち、あゝ何時ぞや江の島の歸途とて立寄られたお武家、お茶汲んで出す手を取られた嫌否らしさに、悚氣ふるひし覺えあり。後に聞いて石村の息子と知り、毎夜夢に魘さるゝ、蛇よりも嫌な人。えゝどうせうと、とつ、おいつ。

母親の袂をそつと曳き、目で物云へば飲込んで、なう名主様、其事は先達て、お耳打ござりましたが、あれほどの御大家と、御覽の通りの此方等風情、何しに緣が結ばれませう。唯御座興と存じ、肝心の娘にも、まだ談話さへいたしませねば、いづれ其内申し聞け、斯個の胸も聞いた上、お返事を致しましよ。ともかく今夜はお開きなされて、結納の品物をお引取りくだされまし。

いや待たれぬ、延引されぬテヤ、手ッ取早いが當世ぢや、氏無くて乘る玉の輿、不釣合ひもなんにもない。はて、六右衞門が飲込んだ。と何でも飲込む開いた口、早合點も又癖なりけり。いや小萩は母が嫁りませぬ。はて、何故とや。斯個は家の米櫃娘、人樣に嫁げましては、婆々が途方に困ります。と皆までいはせず。おつと、其も飲込んだて。娘を差上さへしたら、阿主は大事な姑御、隱居料として十五人扶持、相違無く下さるゝ。何というても六右衞門ぢや、脫落は無かろ。と、したり顔。

どうやら根深に巧んだらし、一通では、と胸を据ゑて、御志は難有けれど、扶持も榮耀も要

りませぬ。貧乏しても母と一所に、ナそれ。おつしやるまでもござんせぬ。妾や嫁くのが嫌でござんす。おゝ左様であろ。名主様、本人もあの通り、お斷り申しまする。これさ遠慮は入らぬといふに。遠慮では無い、眞實のこと。ほんなら眞實か、あゝ面妖な、どうでも破談にさつしやるか。破談とは何の事、口約束もせぬものを、一人で極めたお媒妁人、宵の間にお歸りなされ、翌日商の夜延仕事、手が塞がつて居りまする。と極め附けられて智慧を出し、地搖ぎさせて揑と坐り、しやにむに諸膚押脫ぎて、皺腹をそつと撫で廻し、否應はあるまいと、飲込んだが私が過失。あゝ百年目、百年目、石村様へ申譯に、此場を去らず切腹する。止めても肯かぬぞ止めるな。と御亭が好な赤鰯、がさり拔きて逆手に取り、止めるな〳〵、止めるなやつ。さりとは茶番氣のある親仁、古き仕打は田舍なり。

小萩はさすが心弱く、あれどうせう。と立ちつ居つ。樂屋見透して母親落着き、なるほどかうなうては叶はぬ處、何しにとめだていたしましよ。心置なくお腹をめされ、南無阿彌陀佛々々〳〵。

小萩坊〳〵と罪の無いのに打込んで、妹の如く可愛がり、後楯になりて贔屓にする、猿の傳次。通懸りに鳥渡寄り、勝手口より案内無しに、づツと上れば、店の胴謾聲は、弱い者苛めに名代の名主、ワヤ〳〵言募るは仔細あり、と心を奥の間に襖越し、柱に凭り懸りて山水の扁額を見ながら一服吹かし、煙を眺めてつくねんたり。

内兜を見透され、六右衛門業を沸し、豫て石村の下に附上り、目下は蟲とも思はぬ手合、まゝよ、母親をひつぱたき、小萩を攫つて、と圖太き了簡。刀を持つたる儘立上る時、次の間に、えへむと傳次が咳拂ひ、吸殼をとん、と叩けば、ぎよつとして拍子拔け、詮方無しのテレ隱しに、そりや切るぞ。と突きかけて、びく〳〵と腹を凹まし、じりゝ〳〵と後退り、尻を外してずツてん土間へ落ち、わア、、切れた。と踏反り返り、死んだ〳〵。と突立ちて、表へがたぴしや飛出せしが、小戻りして 頤突出し、やい、死損ひのふんばり婆々、好く頬桁を叩いたな。お太守でも頭が上らぬ、石村様に見込まれた汝が娘、遲かれ早かれ泣面かわくわ。奥に居るは色男か、耳かッぽじつて聞いて置け。雜言惡しと猿の傳次、襖引明け飛んで出で、色男私です。と結納取つて投げ附くれば、壽留女も來舞布もばら〳〵〳〵。何處までも惡ッくい奴、覺えて居れ、と顏見て吃驚、傳次か、ほい。

五

後に傳次は爐の緣に胡坐を組み、屈託顏を母娘に覗かして無言なり。脂下りにつまりたる煙管とともに投首するを見て、頼みにも、便りにも唯一人の傳次が此有様に、母娘は愈々心細く、顏見合せて濕氣と、折焚く榾も消えかゝりぬ。

小萩は手持無さに心附き、藁菅を取りて煙管を通し懸れば、母親は小聲になりて、これはもし何としたら好うござりましよ。邪が非も無い先方は長いものゆゑ、卷かれはせぬかと案じられて。と年寄の涙脆きに、傳次も餘るほど推量して、いや、心勞道理、泣く子と地頭には勝たれぬさうな、が、きつう案じなさんな。痞せてもといふ男一疋が、しかも此通り骨組丈夫の傳次、庇うて居れば、むざと嵐にしてやらるゝことではない。したが月に雲、美麗過ぎても困り切らせるの。はッはッは、と何か氣の無き笑ひ顔。此男には今までに無き圖なりし。

母親は心落着かず。何やら濟まぬ氣なれど、さてかうと手を取つて仕て退けらるゝ事柄にあらねば、何分にも親方ばかりが力、幾重にも賴みまするに、我を神佛にして賴まるゝにぞ、傳次は痒からぬ頭を搔き、お袋其樣に力にされては背負つては起てぬほど何や彼や引受けて居る此身體、轉ぶまいものでも無い。と思ふ胸をつい言うて退け、ほい。又泣くか。大事ない、可哀さうにお前が其だから小萩坊が、同じくこれぢや。と眞似方をする風で、ほんとに目を拭き、ちと年甲斐にしつかりさつし。まゝよ、お前方、一人や二人の、杖にならうが柱にならうが、倒れるやうな傳次でもねえ。といひつゝ煙管を手に取りあげ、これはお忝、よい心地に通る〳〵。と吸うてはたきて表をすかし、おゝ通る。ほんに鐵が通るわ。鐵や、待て待て、今其處に行く、いやそんなら又來よう。と心殘して立出しが、鐵吉に意を含め、二三人其とは無く、餅屋の周圍を徘徊させ、

不慮の押込に備へしかば、一夜難なく明けたりけり。

賴まれては後へ退かぬ氣の男は裸身も百貫の價値なるを、三厘にも見切つてする、喧嘩口論の賣買などは、此村中いふに及ばず、遠くは藤澤腰越をかけ、此男一口利けば、さらりと埒の明く通り者。鄙には可惜都に希物、此度小萩の一條も、たか〳〵名主の頭ならば、拳固で凹ますに手間隙入らず、或は次郎藏如き色白のつぺりの好色侍士、張り倒すに雜作は無けれど、戀を强談申込みの表看板は名にし負ふ石村五兵衛、これ其親といふさへあるに、內證に這入つて後詰は岩永、なか〳〵手弛き對手にあらず。不便なれど小萩はものかは、差當り八ケ村數百の人の、生死と釣替の傳次の首私用に費すわけにはゆかねば、はてようごぜえさあ、と一口に受引かざるも道理なり。

何時風が吹かむとも計られず、と母親はおど〳〵して、二三日を過せしが。一日用事ありて外に行き、ふと六右衛門に顏を合せ、母親はぎよつとせしに、先方は何氣なき體にて、いやお婆、先日は。というて苦笑ひしたるのみ。遠淺の干るは海嘯の下地、軈てどつと來はせまいかと、一日送りの姿なり。

さて二三日來ざりし傳次、急がし氣に來りて、お袋、お娘を烏渡借りて賴みたき一儀あり。六ケ敷ことにはあらず。靈山の高妙寺まで文一つ持つて行つて貰へまいか。といふ。お容易きご用、

殊に外ならぬお前様のことぢや、喜んで致させますが、あの件ありて後は何かと物騒ゆゑ、よう外へは出得ませぬ。と困ずるを見て、いや〳〵其事は知りたり。野郎ども附隨てやれば道には氣遣なし。只用がこゝの美麗ので無ければ辨ぜぬ。といふに、其ならば、と承知して、小萩を呼び、傳次自筆に物したる折釘流の一封を渡し、こいつを賴みます。といふを手に取つて小萩、名當を見るよりはッと顏を赧めしも道理や、卯之助様と表書。

傳次片頰に笑みて、何んと使はれ賃が出して欲しいな、有様は夕方から行つてもらひたいが、お化粧に半日と見計らつて早う來ました。お袋見さつし、是から塗る、磨く、着るで、ちやつと埒の明く事では無い。と眞向にやられて雉子の聲、けんとなり、つんとして、知りませぬ〳〵こんな使は妾は嫌否。と手紙を取つて叩きつける。形容ばかりで、それ眞實に打遣れはせまいがの。えゝもどうせうねえ。いくらも投げますわ、放つて見せますか。なに〳〵其には及びませぬ。などと取合へば、はて、早く行かしやらぬか。と母は頃日に見せぬ笑ひ顏、飾粧したいが傳次の口、此儘で、と前垂がけ襷を片外しにしてついと行くを、これ〳〵大分の路ぢやぞえ。其様な姿容で人様に笑はれな。といはるゝを機に引返して、親方さん、一寸着替へます暫時御免遊ばせ。と差へ入口、暖簾に半身包まれば、傳次小聲に、お袋罪がないなう。といふ。なにえ。と振返つて差出す顏。頰に嬉しい、と書いてあるぜ。此人は。と立蒐れば、いやほんの內證事、お介意無くと

お支度々々々。

母親は手傳ひに。傳次一人居殘れば、串戲いふ口うつてかはり、眼を塞ぎて腕組なし默然とする門の戸あけ、鍛の鐵吉、小峰の猿松、目立たぬやうに裝束して、親分、支度が好くば參りやしよ。むゝ、直ぐだ。ちよつと來い、と近づけて、四邊を見廻し、二百十日も追附だ、悠々とはして居られぬ。今日のこと好く運べば、卯之助殿一所に來らるゝあひだ、お目に懸らば先日の無禮お謝罪申し、人目に觸れぬやう戻つて來い。心得て居ります、だが鐵、工合が惡いな。といふ所へ奥より小萩、母さん行つて參じます。親方さん。ごゆるりと。あい〳〵、大きに御苦勞。さて言うて置くことあり、其手紙人に取次賴まれぬ、鐘撞堂より右へ廻り、廊下づたひに行當ると、卯之助の部屋ぢや、直々に渡してくだせえ、坊主どもに見付からぬやうお忍びでやつて欲しい。かう粹だぜ。と高笑。

六

極樂とは什麼の事、能く說破し得む者には、軈て見よ蕎麥喰はせむ。と擂粉木を棒に構へて、法衣の片肱捲き上ぐれば、寢ること〳〵、ところりと横になるは、六十餘の弱法師。餡餅を三つ頰張る卽身成佛。と舌嘗ずりするは、白雲頭の小僧なり。炬燵にあたつて金米糖を嚙り、茶を喫

し、梅花を見して、一首浮ぶ處、と長句を吐きて異に頤を撫づる者は、角屋敷を賣つた喰詰道心。鯉の生造りできうだの、美婦のお酌でぐいの、或は鰻蒲で燒き飯と仕度候の、と坊主頭をごつた交にわや〳〵がや〳〵。箸にさしたら芋頭、下戸に喰はるゝ連中なり。

聞いたか坊進み出で、えへむ、極樂什麼も古し、古し。貧道一難問を試みんに、見事悟道なされむには、明後日招待さるゝ作右衛門が三七日、御讓り申すべし、布施一分に、茄子の鳴燒が極つた御馳走でござる。といふ。滿座いざ聞かむ、と唾を呑めば、佛說に曰、萬綠叢中紅一點、こういれいかに。と節を附けて疊を叩く。滿坊更に解する能はず。少時して一人が、むゝ、わかつた。綠の草ども一面にぽつちり一つ蛇覆盆子、これだらう。いかな、大違ひ。然らば、と又一人、日本晴にお太陽樣、まづこゝだな。といへば、まるで違ふ。川の中に西瓜一切はどうだ。馬鹿にするな。其時、せいたか膝を進め、吾つウらつら惟みるに、綠は、みどりなりか。艶ありて黑き物をみどりに譬へて、佳人佛の髮の毛だ。投島田に八分玉、落が來たらう、なんと聞いたか、前金拂ひで一分くれ。と出す手を聞いたか叩き退けて、もう一足のこと横濱で止まつては東京の用が足りぬ。むゝしからば黑ン坊が、臙脂を附けたのか。もうちつと下へ下りろ。そこは下がかりで差合がござる。と口をつぐみ、鼻を捻つてにやりと笑へば、どいつも分らないな、いうて、聞かさう。外でなし今晩、黃昏の蝙蝠で、ちらと見た緋縮緬のことだ。といふは、耳よりな話しと、

乘り出して、はてな〳〵。

聞いたか坊あたりを見廻し、ちらッと見せて、寺內へ紛れ込んだ赤き奴、出口は二王門一方の當寺、門限過ぐるに出て失せぬは、慥に蓮ッ葉の新世帶と洒落のめして、女犯の坊主あるに極まつた。如何に各自家搜しして、引摺り出す……時、一寸手を握つたり、臀を捻つたりは、どうだ。といへば、色慾の餓鬼等笑傾けて、やつけろ〳〵。お次手に念佛申さばやと存じ候。弱法師が腰を叩きて起てば、妙でげすなこれはおつりき。と角屋敷本音を吹き、納所ども哄と總立ちに、左の肩脫ぎ、鉢卷しめ、せつかい擂粉木得物に取り、八方へ手を分くれば、小僧め赤と聞き、犬と心得、やつちよい、うす〳〵、赤負るな、あゝりや、りやん〳〵。

聞いたか、せいたか二人の法師、心當りは其、と卯之助の部屋を點首合ひ、出し拔けに手證を取れと、拔足して西緣のはづれなる卯之助が寢間の戶がらりと開け、やい目附けた墮落者め、と取つて押ふる筈の女性は居らず、卯之助一人端然と向うむきに机に凭れ、一時佛在王舍城、とも殊勝なる場合なれば、二人の所化大しよげになりけるが、橫に敷設けたる厚綿の夜着の袖、むぐむぐと動くが如くふくらみたるを、屹と心附きて眼注せする時、御坊達用事は何だ？と振返りたる眼冴えて、惡く迷誤つくと、取つて投げむず氣色に、氣が卑怯て荒立て得ず、なにさ、卯之殿、左樣にお夜延は身の毒なり。とろゝが出來たで呼びに來ました、お好なら食べにござれ、御

機嫌宜う。と毒づきて、ぴしやりと閉て切り、ついと行き、然る後潛かに戻りて、ぢきに隣れる廁に忍び、鼻をつまみて鼻息を洩らさず。暫時此處に籠城せり。

賢しき靈山さうと氣取れど、却つて其をつてにして計らふべき術數あり。經の下に卷き隱して今又繰り廣ぐる傳次が舌代、此文持つて參る娘を種に、寺法を犯すの罪を得て、靈山を下らせたまふべし、とさすがは年の巧者な進退。さらば、斯く、と思案を定めつ。さて夜着を見てくすくすと笑ひを忍び、ふいと背向きて書を開き、默讀して音をもさせず。夜着の中より細き聲、媚かしく、まだかえ〳〵。といふは小萩なり。先刻に高妙寺の門前にて見送りくれし傳次が子分二人の者に立別れ、これから人目の無き處で卯之助に逢ふのかと小萩は身體うづきつゝ、薄暗がりに寺内に入り、胸は鐘撞堂より忍びの使者、手洗水に衣紋も繕ひあへず、教へられたる通りに墓原を過ぎて行けば、其と思はるゝ床しき居間あり。そつと卯之助を呼び出して、面を合せたる極りの惡さ。思ひ切つて手より手に、賴まれし封書を渡すや否や、わけなく遁げむとしたりし袖を、卯之助が曳止めて、返事あり待て、といふに、もぢ〳〵と緣側に腰を懸けて俯向けば、さら〳〵と讀みて一物ありげな顏色。遠方の處誠に御大儀であつた、返事すべきに此處へ來て待つて居よ、と勸誘らるゝが嫌惡ならねど、故意と詮方なささうに一間へ這入れば、卯之助後先見廻して、すつと障子を閉めたる後は釣瓶落しの日は暮れつ。

人の不意に來る樣子、小萩ははつと思ふひまなく、さそくに夜着を冠せられて啊呀とばかり驚けば、靜に〳〵と、いはるゝまゝ、恐くて齒の根の合はぬにさへ、音知れはせまいかと、後生大事に潛みしなりけり。

七

小萩は、まだかえまだかえ。と呼べども返事無きは、まだ差合のあるゆゑ、と辛抱すれば、息苦しく、鬱陶しくて、術無くて、もうどうも忍ばれず。身悶えすれば夜着の蠢くを、尻目に見つつ袖を嚙みて、笑ひたさをば堪ふる卯之助。

妾は切なうて。と忍び音にいへば、若衆はぐう〳〵と空鼾。小萩は太く困じ果て、最どうもなりませぬ、出ますぞえまうし〳〵。と泣聲なり。まうしは寢たりこのとほり、それ鼾を聞けぐうぐう。といひながら吹き出せば、白魚夜着の袖をかゝげて、水晶が四邊を覗ひ、外に人無しと見て、ふいと刎起き、はた〳〵と駈け寄りて、えゝ、悔しい！としがみ附くを引外して座を正し、惡い惡い起きて來ては惡いぞ、と眞顏になるを、優しく白眼て、まあ意地の惡い。坊樣は疾く去にたるを、まだだ〳〵と長いこと、妾は蒸されて死にさうな。と茹でられたやうに恍惚し、可愛や命懸けの島田髷、夜具にがツくり横になり、鬢の毛もつれて汗に濡れ、衣紋解け帶弛み、裳長

く引摺りて、これが難問の緋縮緬、膝に押へてベッたり坐り、差向ひになれば面ほてりて、眼瞼ほんのりの横顔妖艶。

さても一間の水入らずに小萩は意外の好遇を蒙り、所詮とあきらめたる胸の情思、叶ひさうになりたるを、嗅付けて、聞いたか坊主、時分は好し、と躍り込み、現場を見附けた卯之助觀念、と大手を廣げて突立てば、せいたか急ぎ此由を、方丈様へ御注進。眼鏡に外れた存外の不埒者容赦ならじ、と是空和尚、杏脱一段下りかけて、用箪笥の二番の曳出小包もて、と差圖に任せ、せいたか取つて參らすれば、小腋に抱へて肅然と、庭下駄引掛け出らるれば、師の寵弟靈山が阿房拂ひの様を見て笑うてこませ、と木の端ども、目高の如く行列して後に續きて騒ぎける。

此方は卯之助慌てて飛び起き、帶しめ直して一腰打込み、眞赤になりて差俯向く小萩の手を取り引立てて、師の坊が見えぬうちちつとも早く、さ、ちつとも早く。顔見られては面目なし、と一處に駈出す戸口を塞ぎ、野郎はちやつと出て失せい、墮落さしたる女郎は重罪、眞裸にして二布も取つて鐘撞堂に括り附けて、三日道俗に面を曝すが掟だぞ。とわめきければ、えゝ、と吃驚蒼くなりて小萩はわな〳〵。卯之助急き立ち、えゝ又しても邪魔するな、其處開いて通すまいか。おゝならねばかうして、と突飛ばしつゝ出で、素足のまゝに卵塔の垣根押分けて出でむとする。卯之助待て。と聲懸けられ、とむねをつきて振向けば、宵の明星赫奕と、是空和尚の立姿。南

無三墓へ這入たし。是空和尚は眼を閉ぢ給ひ、臭骸を抱く田婦野郎が醜態見る目汚らはし、永の暇取らす驗として此品を、と投げ遣はし、汝は更に覺えざらむ、拾ひ取りて育つる時着て參りたる襤褸の袖、其着て浮世に歸れかし、はや去らば、と口を結びて謝罪を聞く耳聾せるに似たり。

納所ども口々に、餘所の見せしめ叩き出せ、と地面叩きて、押し出し〳〵、えゝ燒けるわ、燒けるわ。

身の過失とて卯之助はわびせむすべもあらざれば唯悄然と一禮し、小萩と二人寺を出で、草深き道にさしかゝる時、師の坊より給はりし長き包を開き見るに、血汐の染みて今も腥き、女の膚着か縮緬の片袖、まづ驚きて擴ぐれば、蒔繪したる九寸五分、すらり、と引拔く手の冴に、あたりの白露ばら〳〵と冷たき業物、見るより靈山ものをもいはで駈け出し、とある田舍家の檐に屈みて、板戸より洩る灯影に透し、帽子先より鍔際まで、熟々と見れば、見るほど、水も堪るまじき切味は、一定名作と目貫を外せば、鎌倉長谷之住人鋭鎌利平作之とありたりけり。

はあ、はつ。と押戴き、握り占めて、さてはこれも、と打返す袖の袂に、卷き籠めたる一通あり。取る手遲し、と押開けば、奔龍の走り書、たしかに是空が手跡にて、母の記念を身に鎧うて、父の魂を手に取つて、子たる道に背かじと思ふほどの事は、如何なる破戒も勝手たるべし。是空靈山に護摩を焚きて、汝が生前の冥福を修せむ。もし、又最期を屑くせば、是空直ちに棺を荷う

て、汝が死後の骨を拾はむ、勉めよ喝。と讀み果てて莞爾と笑うて突立ちたる。折から卯之助様、と呼び呼び來て、ほつと大息追附く小萩、猿松鐵吉後に續き、若旦那々々。先日の失禮御免なせえ。首尾よく參つて御本懷、傳次親分待つて居やす。ちつとも早く。

八

高い聲では言はれぬ事ぢやが。と片手を前に支きてぬつと顏を差出せば、低い聲では聞えぬ事ぢやと、古いことを珍しさうに、田舍の兄達畫上りの談義、いや眞實のこと高うは談話されぬが、餅屋の奥に昨日から見えてござる。の、それ、むゝ、あの權八様か、と綺麗で二本ざしの若衆は、此男が田舍芝居で見たる白井權八に極めて置く罪の無さ。この手合は何だべらばあ、坊様で長刀を持つたのは、何でも辨慶と思うて居る、はてさてげいばアわりいわい。聞つし、あれは、と聲を潛め、鋭鎌大明神様の御子だとよ。其は己も知つた。いや己も聞いた。したが何しにござつたのだ。壻養子でがな、と當推量。いやはや呆れた癡呆めが、其様な目出度い事では無い、此度のなあ……皆が一揆の大將に、五郎組の傳次親分が賴んで來たのよ。それはまあ眞實か。何にしに虚言いはうぞい。と煙管の雁首で前齒をこち〳〵。さうなる日には大願成就だ、何というても權八様は敵一倍の力だとよ。ほんにお前達は此間の力持の喧嘩を見たか。見た見た、えらい魂消た

もんだ、己達の三人位片手で投げる强者ばかり擇りすぐつた、五郎組の若い衆が、十四五人で一齊に取卷いたを、濱までまくし立てた勢これは前代未聞でござる。其も其筈かい大明神が蔭になつて助けてぢや。あのが味方ならもう占める、前祝に鹽鰺で一合はずむとなさらうか。これ〳〵、今のが落着まで、汝願酒というた舌の根が乾かぬに、其様いふ了簡では覺束ない、と極込まれて頭を搔き、これはたゞ談話の冴えたのぢや、飲まうというても碌に清い水も飲まれぬお互が果敢無い身の上、何と左様では有るまいか。と談話も段々理に落ちて、陰々たる天の色、雨氣を持ちて雲早し。

一人が見て、此雲行の様子では、二百十日はまづ暴風雨だ。どうにも無事には濟まぬと見える、絶體絶命のるかそるか、こりやどうでも血の雨が。と浮きたる話何時の間にか斯る陰慘のものとなるは、二三日前より八村の人々が、寄ると奈落へおちなりける。すは鎌倉といふ時に此方の命と取り替ふべき石村の白髮首、皆の衆見知つたか、と眞面目になれば、一度己が見た事あり、福福しい柔和な顏色、なんでも爲ることが强惡な程、其ほど柔しい相と思へ、たゞ何處と無く險なのは爭はれぬ驗でござるわ。敵の顏も大事なれど、己まだ大將を拜まない、潛かにお目にかゝるまいか。なぞと殊勝なことを託言に、娘の顏を見たいのだの。何をいはつしやる、はてあの娘は村の名物ぢや、ほんに藤澤あたりまで響いて居るによ、先方に心があらうと己見たやうな者が女

房にすれば、可惜玉が代無しでがさあ。若様とあの娘、二人をならべて夫婦雛、我等一同齊眉きて、草の戸も住かはる、安泰にしたいもの。さりながら小萩はあはれ、六衛名主が媒して人身御供に見込まれて、屋根の棟へ白羽の征矢、どうでも免れぬ因縁か。西在の易者どのが、あの娘は嫌な相があると、眉を顰めた事ありしと、又冴え返る雑談の腰を折つて、實體な仲間、ちよつと物が問たうござる、此邊に小萩といふ綺麗な娘がある筈、其家教へて貰ひたし。おゝ、其はこゝをづいと、行き當つて左の方へ。これはお邪魔。と引返せば、魔の物からの使らしい。小萩はいよいよ見込まれた。と目を見合せて皆愁然。

銀鋲打つたる女乘物歴々の潛行と見え、供廻り小勢にて、何かを松蔭にたてさせたる、四邊は野邊の凪に、海まで見透しの田畠荒れ、稲葉黄みて荊棘茂り、滿目荒寥一點の、烏に絞る弓弦も、斷れて案山子のこけかゝれり。

泣く聲、喚く聲々に哄と砂烟を立てて七八人、瘠果てたる子供等十ばかりなるを頭として、犬一疋追來り、石を投げ棒を振れば、遁げ狂うて駕籠の廻り、礫は外れて垂へ、はたり。

脇立の奴堪へかねけむ、眼玉を剝き、年嵩なるを引掴めば、手を合せてお許し〳〵、芋畠に落ちたる干鱈の頭骨、頃日の飢食さに食ふとすれば我勝ちに引張合うて爭ふ内、うかと赤斑にしてやられ、一生懸命に追うて來て、飛んだ麁相は惡戯ならず、命はお助け、と手甲擦る眼、眞赤に

なりて泣き居たり。何はともあれ、貴女へ對し失禮千萬、以來は懲りよ、と鐵拳。平内待ちや。とお聲が懸り、美麗き手に垂を擧げて、屋敷方の奥様風、年若に色白きが、眉を落して鐵漿を含み、笹色の唇凛として、染小袖に白綾の衣紋正しく、象牙の襟に後毛を溢して顔を差し出し、其の子近う。と招き、青洟たらしの餓鬼どもずらッと並べ、銀二三枚紙に捻りて、お灸ならむ、とおど〳〵しながら、手を出す年嵩の三太郎、小さいの仲好く分け、内へ歸りて母様に、よいもの買うて貰へよ。と、目も當てられぬ子供の形態に、扇子をぱちりと顔を隱すを、伏拜み見返りて、子供の行くに入替り、小萩が家知れました、と以前の仲間踞れば、垂をぱつたり、乘物やりや。

九

沖野新十郎が宿の妻、ちと内談の筋あつて。と鷹揚に音訪へば、東領主が御内に慈悲深きは此人のみと、百姓一統尊敬の、美名は響かぬ隈も無く、麁匆有つてなるまじ、と掃くやら褥を直すやら、手の無き母娘は上を下。推懸の推參御迷惑察します、構やんな、大事無し、と扇子を疊みて小褄をぞろり、優やかに通るとて、額附き迎へて顔は上げねど、銀杏返しの髪の色艶、是が小萩と合點して、なるほど、といふ顔色なり。

折から奥の間に密談したる、卯之助に傳次目注して、武家方の女房要こそあれ、見附かつて妙ならずと、さそくに突かけ草履中庭から裏口へ、飛鳥の如く影を隱せば、卯之助屏風の後へつと入り際、ちらりと見止むる若衆前髪、其もこれも飲込んで奥様は素知らぬ顏、さて參りし用事外ならず。大略の様子は前以て名主より聞かれたらむ、打明けていひますが、石村の息子、とは表向、内實岩永武藏殿が此方の娘に大の執心、當人小萩とやらむ不服にて、御身老の一徹より過激言お言やつた……とは、六右衞門の言附口。其のみならず、袁彥道の破戸漢、傳次といへるが肩を入れる圖に上り、惡口雜言吐きましたと汗を流して六右衞門申したれば、氣早の武州毗裂け、夥兵ども馬引けい、自ら向うて引立來む、六右衞門案内と、褥を蹴て起ち、追取刀、十歩ばかり駈出られしを、折よく其座に居合せし、妾が夫新十郎、斷つて押止め、斯る荒業優なる戀に無きことなり。お任しあれ、新十郎がお媒申さむ、と漸々なだめ歸られしも、此方に不慮の難儀見させまじとの、な、深切ぞや。先方よりは人橋懸けて、まだか〳〵と催促に、言延ばして昨日と過ぎ、今日は夫に差代り、妾が談話に來ましたが。とさら〳〵淀みなき辯舌も、母の胸には支へ勝、途方に暮れて俯向きぬ。

小萩は談話半ばより堪へ兼ねて座を外し、潛かに拔けて奥へ行けば、屏風の後より靈山手招きし、其處を。と敎ふるを心得し、隔ての障子そつと閉め、如何なり行くことやらむと、唾を飲み

込みて聞耳立つれば、奥様細く咳きて、さて、老女何とすべきぞ、どうあつても嫌なるか、心置なういうてよし。と打解けたるに母は漸々、お慈悲深き旦那様と平常申上げまする、取るに足らぬ私 共をようこそお庇ひ下されまして、御前様態々の御足勞勿體無い。と鼻詰らせつゝ眼を瞬き、先方様御身分が御身分也、榮耀に人好みは致しませぬが、殿様はほんの當座のお茶受けになさる氣、娘は不束な子供也、婆々は取る年なり、行末が案じられまする。と此場合は此が有り觸れの斷謝をいへば、あゝ唯其だけならば案じやんな、六百石の沖野の家が假親になつて嫁る。と言はれて驚き、えゝ、滅相な。貴女が左程迄に御意遊ばす、岩永様の御執心空恐ろし、實の處、——嫁る氣は無きか。はい。と思ひ切る。困つたなう。と開き直りて言葉を更め、さらば其迄なり。水の出花の容色好き娘を、四十顏の古朽木に、取合はさうとは出雲でもなさらぬこと、此方も無理とは初手から承知、其方は道理、いや分解りました。賴まれもせぬにいはゞ嫌な世話して、餘計なことをせずともあれと言はれても詮方無し。薩張手を引いて仕舞ます。と少し口早に言放ち、帶止をしごいて、歸支度。今此人に突離されては、日の鼠に蔓を嚙み切られて、金輪奈落落入る下は大浪の鰐一口。母親狼狽へ、まあ、お待ち下さりまし。其様なりますと後は何様なりますことやら。と問へば、はて、知れて居る！ 武州が勝手次第、何を爲るかは前々の仕打で考へても見よ。此方の預かつて知らぬ處。とさりとは心細きことといはるゝに、重々心勞の癪一時に差

込み、むゝ。と喰しばりて倒るゝにぞ、笑止やと、推し附けて、誰そ早く早く。と騒がれけり。

聞けば聞くほど容易ならぬ災難に、卯之助様どうせう如何せう、と膝に手を懸け、揺りながら、靈山に其背撫でられて泣きたる小萩が、母の其聲に驚きて、轉がるやうに走り出、もし、もしお助け、好いお薬もござんせぬか。娘御、せかずに水を水を、とおたしなみの合薬、嚙んで含むる、息は返りぬ。

ほつと呼吸を吐く母親に葬と縋りて娘が、堪忍して下さんせ。妾の故でこの様な御苦勞懸けまする。緊乎して下され死ぬなら妾が。とおろ〳〵涙。何とか仕様の無い事か、助けると思し召してお取計らひ頼みまする此……と十の指を組み掛けて頼むいぢらしさ。奥様餘り見るに見兼ね、膝に手を置き默然と暫時あつて、よし頼まれて上げむ。餘り不便なれば、案じるな、了簡あり。と屹とした頼母しさに、えゝ眞實でござりますか、と母娘ははつと伏拜みつ。沛然と降る驟雨に、晝寢のものの生たる如し。さればとて此儘に思切らすといふにはあらず、最後の術數斯うしませう、此方衆母娘夜遁の體にもてなし妾が家邸に舍藏はむ、燈臺却つて下暗く、其とは怪我にも見附かるまい、幸ひ駕籠を釣らせたれば、小萩とやら身化粧せよ、一處に行かむ又母は、手廻りの道具片附けて、夜に入つて潛かに來よ。平内一人手傳ひに殘して置く、包持たして大事無い、と行渡りたる采配なり。

十

怒濤轟々と岩を打ちて、男浪は市街に浸入し、鹽烟天を衝きて、深く濃き霧の如し。颶風耳を聾するばかり、年經る松柏の幹のしなふこと、弱竹に異ならず。遠くより凄じき響して、一陣吹き過ぐる毎に、支ふる物を薙ぎ倒すさま、譬へば草を刈るに似たり。泥塗褫げて地に歸しぬ、覆苫亂れて天に朝せり。椽桷差脫周障屈曲、類稀なる二百十日かな。

かゝりしかば、滿目總て古疊の漸く緣の如く生殘りたる、なけなしの稻一日に倒れ伏して、生命の種皆になり、百姓望を斷ち畢んぬ。

朝より往來を風に遣りて、引籠りたる黄昏より、少し穩になるよと思へば、爆然と紐を解きて、しつきりもなき震動雷電、夜に入りて大雨盆を傾け、窪める地面は早瀨を爲せり。一生懸命大悲を念じて、應時得消散と唱ふる口も眼も明かぬ、雨瀑、水烟、一寸先は戀の闇に、女子の一心かうした物なり。濡れて纏はる袷の裾、脛も顯はに蹴出し踏み占め、捩れるが如く衣紋亂れて、玉を伸べたる二の腕まで、無慙、風に恥かしながら、馴れて迷はぬ海岸道、心は長谷へ逸れども、水を潛りて行く如き、篠突く雨に息切れして、風上へ面を向くべからず。橋の袂に來りし刹那、一幅ばかりの電を、肩より胸へ颯と浴びて、息を引きて飛び上り、つと横様に倒れむとして、縋

り着きたる榛の木を、緊乎と抱く隙も無く、長谷の方より轉がり來る、百輛の輜しばらくして、遙かに黑き靈山へ、遠く雷鳴り行きける、苦と耳を塞ぎ踞りたる鼻の先を、づいと行く草鞋の跫音、すかして見れば、蓑笠に竹槍提げ及び腰の姿をちらり！

あら肖たやうな、親分さん。と聲を懸くる間、有りや無しや、其人凜たる聲高く、鎌！鎌！といふ下に、倉！倉！と返響返し、同じ扮裝の男ども、いづれあやめが八人ばかり、一團になるよと見えし、傍目もふらぬ手負猪、蓑毛は風に逆立つて、早駈け離るゝ姿は見えず、闇を貫く跫音は、段々遠く、ばたばた……ばた。

これは、と驚く隙もなく、一團續いて又一團、途切れ〳〵に連りて五建ばかり通りし跡より、四十代の親仁一人、口の當から顎に懸けて、むさき髯の生えた事は、類と紛れなき六右衞門。しどろもどろの足取は、塵埃に醉うたる鮒の如く、虚呂々々來懸る後より、又もや一群驀ぐら！南無三と四ツん這ひ、草原を潛りて遣り過し、こいつは堪らぬ、大變々々。と六右衞門蒼くなりて、駈けいだす眞闇三寶、立木にごつんと鉢合せ。雲に閃く電光にて、同じ木蔭に散らし髪の、丈より餘る女子を見たり。あれ。と遁げ出すを、どつこい。八口から抱竦め、顏見て、やあ、小萩だな。放して〳〵。ともだゆるを、金剛力にて緊附け〳〵、汝は一昨日夜遁をして行方知れずと成つた筈、我等血眼に成つて詮索するに、好い處へ來せた。えゝ吠えるない喧しい、と小腕を

捻ぢ上げて、引擔がんとしたりしに、天が取持つ緣なりかし、今宵の一揆の殿して、一足後れの靈山卯之助。脫落無き眼に其と見て、駈寄つたら最後、襟首掴んで投げ退けん娘を圍うて突立つは、先例に徵して定のことと、六右衞門先見を着け、引轉覆つて代官所へ、不意の暴動一大事と、注進に駈け出しぬ。

手も無く救うて卯之助が、言葉も懸けず行過ぐる。闇は黑白無し蓑蟲の、姿は隱せど梅の花、笠がよう似た菅笠の、香をば慕うて駈け寄る小萩、情思ひ詰めたる殿振は、夜目にも戀の枝折なり。

誰方樣違うたら許して、卯之助樣では無いか。と問ふ。小萩か仕舞つた、とぎつくりして立止まれば、まあ、此形態は？うむ、此姿はどうでも好いが、今時一人其姿、……邸は不首尾かえ、と優しき言葉。いえ、何の不首尾處でござんせぬ。お客樣の待遇して勿體ないお饗應、それは氣味の惡き程なるは、軈てお藥の難題、と母親は取越苦勞なれど、妾は懷姙ても居りませず、辰の年月も揃はぬ出生。と思ひが屆き逢ひ見たる嬉しさに、此大雨も濡れぬ前こそ、今は苦にならぬ長談義、其處で無き卯之助急き込んで自烈たがり、其樣な事は聞きたうない、何故今夜來た其を早くよ。はい、はい、したが困るのは一間から外へ出したまはず、何も身の爲を思はれてのことと、ぢつと辛抱したけれど、急にあの……逢度うて。——

潛かに忍び出たりと見え、雨具さへも持たぬ體、末遂げられぬ此戀ながらさて惡からぬ女子なれば、此卯之助も逢ひたかりし。どれ顏見せむ、と引寄せて、手首を占めたる名殘の印、ぐわんぐわん、と亂調に風に乘り來る早鐘が、突き離したり比翼の鳥。素破鎌倉！と靈山縋れる小萩を引放し、それ顏を見せて遣る。最早好からむ疾く歸り、主とも親とも沖野を賴み、いふことに悖らはず、身の振方を附けよかし。といひ棄てて行かむとせしが、情無う濡れて居るな。それと小蓑を着せかくれば、それでは主が。笠も取つて投げ與りつ。前髪ったふ雨垂か、睫毛にほろりと一雫、氣を附けて道を行き隨分身を大事に、鷹の爪にかけられな。これは何とした事ぞ、言度事のまだあるに。えゝ。と吃驚り白鉢卷。不審は後に風說が知らす、重ねていふぞ、短慮をすな、小萩是でおさらば。と袂を切つて立つ汐や、二本まで讀む小松原、蝶の羽返し一散に。

十一

靈山高妙寺石段見附けの仁王門に、古昔も餘り無き事あり。

此頃每晚、人の開けぬ門がぎゆつと音して、見上ぐるばかりの大男がのさ〳〵と歩行くこそ、てつきり仁王樣は、爭はれぬもので、名人湛慶の作、と更まりて眞面目にいふほど、鐵砲福が例の十八番と、誰も取り上げざりしが風說の最初。

次は此間の大雨に、釣したる大草鞋に泥刎ねのとばしり懸れるを、泥濘をお歩行ひなされて土の附きたり、と見て、悚氣を振ひ、眞實だ〳〵。と觸れて廻りたるは、無間の久と渾名のある男、己が死んだら早桶は輿樗で擔げ、と恐しき佛嫌ひの、これより我折れ信徒となりたるにて、扨は其に極まりぬ。此沙汰段々高くなりしに、江戸相撲某といへる大兵、雪の下の娼妓買ひに這入る處を、朧氣に見たる者は、伊太近眼とて飯食ふ時は、眼玉で舐めると、評判の近視眼、さてこそと言觸らしければ、高妙寺の仁王尊は夜な〳〵命の洗濯にござる、と喧しき妖怪沙汰。對手は花廓で名代の肥滿女、年子を產むなる鬼子母のおしん、と其から其へ喧傳るを聞きて、さる村學究か小首を傾け、夜遊びするのは一人か、と問ふを、應と答へた揚足を取り、何方だといはれて其は、と行詰りしが、頓才のある男にて、摑んだ方は吝嗇つてると拔けたる事あり。

好機失ふべからず一攫千金、あはれ當世ならむには、早速奉加帳を拵へ、仁王の草鞋錢と唱へて、勸化に廻り、しこたまぶつちめて屋根普請する、大知識の名僧あるべきに、惜い哉、彌左衞門の時代なれば、靈山の番僧等聞捨てになし難し。

道樂ならず酒ならずの此寺に、夜遊びの見張りこそせめ、番人からが崩れ出しては取緊り附かず、此樣子では御本尊盆御座に胡坐かゝれ、欄間の天女に蟲が附き、御開山の位牌鼠と駈落ちして、一山破滅の基なり。いかさま笑ひ顏は眦下りて好色相な不埒、以ての外、熟と見屆けて實な

らば、切通しの不動を頼み、金縛りに懸けて貰はむと、是空には内々にて相談纏まり、見屆けの役は誰彼といはむより、近き頃奈良から來て逗留する大入道は、大乘經の唐櫃胸まで上げて神色自若たる强力。さるかはり食ふことは飲むことは、花和尙魯智深。體格が相當とて擇まれたる迷惑さ。實以て當人臆病なり。

摩利夫人は酒を飲みしとかや。方便に五戒は無し、と奈良法師は角の居酒屋にてぎゆッと暖まり、勢多の長橋踏鳴らし、黑革縅しの大鎧、草摺長に着なしつゝ、長刀小脇に搔い込んで、と辨慶になつて見れども、麻の衣の膚寒きに、棍棒を構へたれば、我身ながら賴母しくはなかりけり。せめて闇ならば盲目の怖ぬ飛頭蠻、我慢も出來るに月夜で弱る。と、山門の下善き處に住ひ、一生の智慧を出したる足留めの妙法、豫て用意の石を燧て、仁王の草鞋に灸を据ゑ、是にて今夜だけは出懸てくれな、と陀羅尼を誦して又誦して。狐狸ならずとも化したものは、夜は森々と更け渡りと、お定まりの刻限は丑滿つ。まづ其迄はと、油斷の虛を、してやられたり、みつし〳〵、と金剛神の頭の上なる門上の佛堂に跫音して、ぎし〳〵と戸のきしむ音。裾からすつぽりと坊主頭へ蛸の足を上げたる如く、南無阿彌〳〵と稱ふる內、がた〳〵と扉開きて、そりやこそ出たるかな。

人臭き匂して前をずいと通り、石壇を下りる處を息を詰めてそつと見れば、——何だ何だ——

普通の人間なり。

奈良法師其と見て元氣づき、腕捲りして突立てば、我身よりも小作の男、後樣に三結の處に腕組みして少し反氣味になり、皎々たる月を見るにや、遊魂半ば去つて月宮に朝す、といふ形態、無心に悠々と行く足、宙を踏むかと輕げなり。

後を跟けたる奈良法師二三度棒は上げたれども、餘りに澄まし顏なるに底氣味惡くなりて默つて續く。子の刻限なるべし。天地寂寞と風無く、彼男の後姿長き影法師を路傍の草に這はして、髮一筋ゆつさりともせず、二町ばかりにて人家を離れ、其處より大分の道は、秋草ばかりにて茫茫と淋しきこといはん方なければ、立止まりてずういと見送り、野中にぼんやり立たせたまふ石地藏の横の方にて、件の男見えずなりしまで見屆けて、早足に駈け戻りぬ。

十二

其の翌朝小僧が、たつた今仁王樣御歸山と、洒落るを什麼と聞けば、平氣な顏して、山門に上り暫時く經てども下りて來ぬ男ある由。

年配着たるものなど、昨夜奈良法師の見しといふに違はざれば、さては盜人の借家ならむ。寺から繩附は出すまじき掟なれば、公儀へ訴訟の段は見合はすべし。さりとも物騷なれば立退を申

附けむ、と不取敢役僧先へ立てば、四五人ぞろ〳〵と後へ續きて、行くことは行きたるが、件の佛堂には煤けたる佛體羅漢ほどに居並び、にた〳〵と笑顔のもあれば、頭から嚙み附くばかりに怒つた眼色もあり。殊に判然と太陽の照射ぬ處とて不氣味さいはん方なく、平常さへ誰も上りたる事無きに、强盜籠れりといふ沙汰、我と進む者無し。此仁王、風説程働きは無いかして、頭の上に賊の住ふを默つてござるは氣の知れぬ談話ぢや、とくど〳〵と呟くもあり。青松葉で燻したら煙がつて尻尾を見せべい。とあらぬ智慧を出すもあれど、一向に埒明かず。

軈て鐵鎚を使ふ音かん〳〵と聞えて、こち〳〵小刀を弄ぶ響もするに、法師達業を沸かし、金剛に八ツ當りして柱や扉を叩きたて、盜人殿々〳〵、見遁がすによつて立退け〳〵、と呼ばはる聲。合點したるか、のさ〳〵と階子を下り、仁王の後の扉を開けて悠々と顯はれたる四十二三の男、至極柔和な顏色、眉間廣に小皺多く、眉毛ふさ〳〵として眼は眠れるが如し。鼻筋通りて口一文字に緊り、頰肉豐かに笑を含みて、手足は干したる大根に似たるに、綿頭巾を冠りたれば見てくれは五十に老體たり。木綿着物に小倉の帶、小さき貝の口結びにして、手拭と、胴亂、火の用心、腰の邊にぶらりと提げ、冷飯草履でふいと出でつ。皆が相見て啞然たる隙に、石壇を下りて駄菓子屋の角を曲つて、ハヤ見えずなるに、おや〳〵〳〵。

末世へ殘す奇談の材料と、二人ばかりスト追ひ懸け、前面を見渡せど形無きに、はてなと見返

れば、通り過ぎたる駄菓子屋の婆が汲んで出す、澁茶一杯、砧卷を撮みて立食をするは又吃驚の種、慥に今の人なり。

あれ狸めが砧を喰ふ、腹鼓の下拵へ、これから如何すると窺へば、彼人胴亂を探りて波錢二つばかり取らせ、掌に吸殼をはたきてころ〳〵とやりながら、吸ひ付け煙管を手裏劍に啣へて外へは行かず、取つて返して石壇、てく〳〵。禁葷酒入山門と鐫り附けたる石碑の角にて、ぽんと吸殼をはたきて煙管を納め、又もや仁王門に這入る處を、役僧堪へ兼ねて止めんと走せ寄れば、彼人逸早く察して庇の處へ指さすを、寄つて集つて見るに、當山何代の筆にや、赤黑く煤けたる札を張りて、信心之輩縱覽御勝手。とあるに衆徒相目して言句も出でぬを、先生、そりや見たかといふ顏色。大手を振つてぞ上りける。

此札引剝いて持歸り不念千萬と息まきて方丈に申し上ぐれば、是空和尙大腹中にて、捨てて置け。さるにても毎日何をして居ますやら不審なり。といへば、开處は番僧の役目ぢや見屆けい。といはれ、不氣味ゆゑともいひかねて引退り、斯ういふ時に卯之助が居たらばなあ。

其斯する內正午過ぎになれば、程合を見計らひて、なか〳〵氣轉を利かしたる法師、煮花を拵へ、土瓶に茶碗を添へ、とん、とん、階子を上る、彼奴我が襟上を引掴む時、泥坊樣お茶をあアがアれと遣るか。……おつと旨し〳〵。と頷きて上り行き、唯見ればおや又、これはしたり！

廣くもあらぬ處一杯に塵煤ども堆く鼠の糞の散り亂れたる間に、彼人胡坐を組みつゝ前に夥多の佛像を置き並べ、なかの一つを手に取りて、ためつすがめつ見けるが、むゝ〳〵と獨合點して腕組し、眼を塞ぎて默然たる相貌眠れるが如く、覺めたるに似たり。座右に槌あり、鑿あり、錐あり、左手に、小刀、鉋の類あり。破損せる佛像、片足、片手、或は耳の缺けたるなど、新らしく繕ひ直されたる目前の光景にて樣子はさらりと知れたり。近き頃極樂寺近邊に何某といへる佛師、不世出の名工、隱棲して業を賣らず。志趣く時は杖を東西に飛ばして遍く諸寺の佛閣を涉獵し、年故りて破損せる佛體の、惜むべき名作なるは、思ふが隨意に修繕を加へて更に憚る色無く、精巧却つて故人に勝れりとて賴みては仕て貰へぬが猶更珍重なる佛師の、仙骨凌霄脫塵すと聞く、いかさま此人其ならむ。我黨の所謂禪定の如くいかにも沈默なる狀態、物言うて騷がすは慮外と思ひ、あがアれ、と持て行きたる煎茶默つて开處に差置きつ。

去程に新田四郎、富士の人穴より立出づれば、樣子は？樣子は？とせんぼの針の如く稻麻竹葦と取卷くにぞ、こゝ一番かつぎの處と、故意とぐた〳〵になりてぱたりと倒れ、水よ藥よと散々騷がせて正氣の附きたる風に見せ、さても暗澹咫尺を辨ぜず。はてな南無妙、光芒一閃拙僧の頭を臨んで金光蛇、はてな南無妙。南波羅龍王八大龍王飛天夜叉檀波羅蜜行者の守護をなし給へば、さしもの刀尋段々壞、いかさま南無妙。お茶をあがれ。とばた〳〵と遁げ出されて、なあんの事

だ、馬鹿々々しい。

重ねて我も我もと見たがりの連中、愈其人と見定めて尊敬し、敷物、茶菓子を持運べば、彼男大きに滿足して、倦む時は其にて氣散じとなしけるが、堅く斷謝りて火の氣を入れさせず。飽迄好きさうなる煙草一服も飲むことなく、例の駄菓子屋までわざ〳〵火を借りに行きしといふ。さもあらむず此より後、白銀や皚々たる雪の下に谷七鄕を轟かしたる一發の破裂彈は、潛かに此處にて造られたるなり。

斯くて二百十日の晝過ぎ又一人覗きに行きたる法師ありけるに、彼漢はじめて口を開き、見らるゝ通り修繕は皆濟ましたり、翌日よりは參らず一夜爰に寢て歸りたし、恐しき暴風雨にて道を行くに面倒。とあれば、何の方丈で泊まれば好きにと思へど右の變物ゆゑ、御勝手になされ。と答へて歸る。

十三

お手が鳴りて是空に呼ばれ何でござると問へば、仁王門のお客、今夜一泊する筈、誰ぞ夜の物を運べ。とあるに、おや〳〵と驚きぬ、蓋し此方から未だいはねばなり。

篠を束ねて降り懸る雨を卍巴に亂し懸けたる一颶風、身は隱れ蓑笠の、宙を飛んで猿の傳次、五郎組の一粒擇拔五六人引連れて高妙寺へ駈け附けたる、これぞ今宵の先鋒なり。

元來此處の寺内より雪の下まで、十八町の道は爪下り、水の低きに附く如く鴨越の人雪頽、眞逆落しに突き蒐らば、味方の氣競は百倍と、卯之助の差圖に依り足溜にぞしたりしなる。

打見れば閂貫堅くさしたる山門、それといふまゝ長脇差、背へくるりと押廻し、猿と名に負ふ身輕の傳次、三抱もある樫の木をする〳〵と打登り、鼠の木傳ひに、姿は少時葉隱れしが、枝より提りて足場を料り、ひらりと門へ飛移りて忽ち内へ入るぞと見えし、左右へぎいと扉を開け、來れ〳〵と小手招けば、小峰の猿、鍛の鐵等ばら〳〵と駈け込みたる、間も無く一團又一團、次第々々に繰り入れて、大凡の人數揃ひければ、石村の白髮首、引拔きて一口づゝ、日頃餓ゑたる腹を肥やして冥途の旅の腰兼當、早や押出せと吼り立つ、誰にやあらむ、ぢやん〳〵と寺の早鐘撞出せば、驚破鎌！倉！と合言葉。

雪の下差して一散に走り付、代官所の式臺へ頭から先に轉がり込み、一大事々々。と長谷の名主六右衞門が息せき切りての注進に、未だ運命盡ざりけむ、折から當直の石村次郎藏、所作なしに居眠り居たるが、其と聞くより顏色變へ、我身と親が意外の災難、注進奇特の到なり。たかが百姓の喰詰一揆、烏合の徒黨何程の事あらむ蹴散し呉む、者共用意と卽刻東西に檄を飛ばせば、

前以つて斯る時の用心とて黃白を摑ませ置く、武州の手の者一議に及ばず、まづ一人と一人なら此方が勝つ筈の敵は小勢。怪我過ちの懸念は無しに慰がてら打斬れば一杯飲める儲口、機を外すな面々、そうれ面白しと押取刀。餓鬼等の寄するを待設けて、氣を持たせては面倒なり、逆寄せして膽を冷させ、ぴか〳〵と拔く長き者は蛙と蛇、居竦みになる處をずば〳〵西瓜と遣るとせい……と、固より邪が非も無きながら錆たる刀は持たぬ武士輩、咄嗟の間に備を立てて、曳々と推出す、總勢二百二三十、鞍置く隙無く徒步立なり。

却說靈山の卯之助は、小萩を後に見返らぬ決心、なれども殘る愛惜を、早むる足に紛らして高妙寺間近くなり不圖耳に入る多人數の跫足は、我を待遠くて早や推寄する味方かと立止まるに、否々、段々近づくにて敵方から寄せると見たり。南無三づきを廻された不意を食つては迚も叶はじ、衆に覺悟を極めさせんと、心周章てて、山門へ飛込む時、討手は石壇の下に迫りぬ。

此方も早や推出さんと足並揃へし折なりけり。卯之助大音に、最う駄目だ、傳次〳〵、斬死だ。づきが廻つて逆寄せが……其處へ、と言葉も了らぬうち早犇々と推迫りて雨を靜むる鯨波の聲。

主客の勢がらりと變り、仕手方却つて受身になりぬ。百姓一同震ひ出し、わあ……ひよんな事に成つて來た、媽々も子もある、已はまた老寄つた親がある、死ぬほどならば此間の大病に高價錢を出して人參を買はねば好かつた。男の子が昨日から這へる。私も一刻にても生延たい、何よ

りまづ斯うしてと、ひたりと内より門を閉め、錠をしやんと下すと齊しく、念佛やら題目やら、噫腑甲斐無き事どもなり。

望は絶て卯之助、傳次、血眼にて拳を握り、必死を目と目で語り合ひ、門の際に駈け寄れば、外には討手の面々が、破るゝばかりに叩く扉、開けよ開けよ寺内の賊徒、免れぬ處ぞ觀念と、口口に呼立てて海嘯の如くひしめきける。されど名高き大伽藍、日本に幾つと指折の、堅牢無雙の山門なれば、手も無く乘り越す手術は無きに、腰拔の、恥知らずの、馬鹿の、白癡の、糞擔ぎ、其態狀は何だ〳〵、傳次とかいふ奴何處へ失せた、風説ほどにも無い野郎、未練な奴と惡口は、誰にも解る兵法なり。

門内の猿、牙を嚙んでぢだんだ踏み、えゝ、もう堪らぬ心外な。手當り次第腕限り片小鬢でも餘計に殺らして堪能するほど罪を造り、未來は阿修羅の向を張る氣、靈山もろとも門を開けて斬出むとするを見て、抱くものあり縋るもあり、後生大事と錠を押へて、此板一重が命の關、開けるが最後だ、出ては惡し、我慢して吳れ拜む、拜む、南無靈山大菩薩、南無猿大權現。

十四

此一揆、出來榮無しとは初手から知れたり。漫に動かしては井戸の緣の茶碗の如く、危險至極

の兇器を、ほんの出來心に弄び、惡き者を思ふさま討ち果して、胸のもさくさを晴さんとする熊と八の喧嘩は知らず、苟も百姓徒黨して己を虐ぐる權者を除き、法度、掟を改革し、新天地を開かむ大事業を、今夜忍ぶにと端唄がいふなる、蓑着て笠着て、無分別に駈け出して、其にて爲遂げらるゝと淺き思案は、案山子が手も無く鳥を追ふを見て萬事は其通りと心得たるいかさま百姓なり。石村が永年の暴虐固より棄置くべからず、然れども機の熟せざるに向う見ずの事仕出來すとて、三人寄れば直ぐにわい〳〵、何時の幾日に夜討仕候と夥間同志がいふとはいへ、何やら茶番でも演る樣な言種、了簡も其通りゆゑ、いざとなると早腰拔かして、翌朝へ殘した飯の菜までに未練が殘り、出懸けに切つて來た竹槍を杖にして、蟒蛇飛びに遁げる算段、いや實に笑止な奴等！

萬一これ傳次の猪主義にて、突然雪の下へ突いて蒐らば、氣焰萬丈の發機を以て、一討ほどは手合せして、少しは一揆らしき事仕たるべし。さるかはり今頃は、話せる奴は鏖殺にされ、殘りの手合は一人も殘らず數珠繋ぎにさるゝ處。天は見通し、靈山が、若きには似合はぬ進退、此寺内に集りて今楯籠りたればこそ俺が苦心も泡にはならず、是ならば救はるべけれ、血氣に湍る壯佼ども、性も懲も附きたらんず、どりや眠氣を覺さうか、と山門の樓上に伸びを打ちて、抹香臭き夜具刎ね退け、むく〳〵と起き上るは、太平の世に希代の英雄、佛師何某と、世を避けて、時

の力が人材を羅せるが如き鰯網を、尾鰭で刎ねたる鯛一尾、これぞ冠彌左衛門。

恰も此時、寄手が投げたる縄梯子朱塗の欄干へからみたるを、彌左衛門右手を伸ばし上へずいと引上げ、夜陰に及びて騒々敷門を叩き、人騒がせをするさへあるに、兇器を使うて乗入らむとする、慮外な奴等。山門の番人此處に控へた、用事あらば出直して翌日來い、夜中の葬禮は受取らぬ。と大音凛々と響き渡れば、思ひ寄らざる挨拶に、寄手の面々氣が抜けて、暫時鳴を靜むれば、あはや切つて出でむとする、門内の靈山も、傳次もこれはと、茫然たり。石村つか〳〵と前へ進み、勘違ひ致さるゝな、長谷村の土民輩徒黨を催し、當寺内に籠りたるを、城内よりの我々討手。庇立致さば僧侶とて容赦はせぬ、門を開けて早く通せ、見下して物言ふ段、奇怪至極、頭が高いぞ。と極めつくれば、山門の樓にてから〳〵と笑ふ聲して、寺領三百石當國の領主に頂戴せず、御身達が手には支配されぬ除物、一本立の寺院佛閣、武門とは赤の他人、斷つた推入は強盗、塵一ッ葉も蹂躙せば寺に取つての佛敵なり。山徒降魔の利劍を取りて飽迄防ぎ戰ふべし。長谷村の土民楯籠りたりといはるゝは、慥に見屆けられたるや、なるほど歸依の信徒ども、蓑笠に雨を凌ぎて本堂に通夜はしたり。矢の一筋も射出さず、誰に手向ひもせぬものを、賊徒の、一揆の、徒黨のとは以ての外と申すべし。斯くいふも猶肯かず漫に武威を張らむとならば、方丈直ちに輿を飛ばして、討手の眞中割つて通り、此縄梯子を手證となし東の殿に面會せむ。御領主の御

爲好かるまじきぞ、もう切上げて御歸りあれ、先刻の樣に騒がれては、夜が寢られいで番人迷惑、方々さらば。と言葉の切を、待構へたる百姓等、同音に哄と唱名して、忽ち寂寞と靜まりけり。

石村一言も無く言詰められ、手持不沙汰になりて佇めば、侍ども呆氣に取られ、何某殿いかゞでござる、いや彼奴が申す處が道理、地體聢と見止はせいで漫に推參は此方の脱心、さりながら、刀の手前、坊主や百姓に弄ばれて阿容々々と歸り難し。と區々の評議定まらず。殆んど立端を失ふ處へ、馬の嘶く聲聞えて忽ち近づく鰭爪の音、一鞭鳴らして矢の如く、風にゆらめく馬乘提灯、二つ巴の定紋は、其人品も一家に類無き、沖野新十郎、と見る間に寄りて聲を懸け、譬へいかなる風聞ありとも、殿の御諚無き内に、干戈を動かすこと相成らぬ、誰に許されて此始末、早く御引なさるべし。と言葉鋭どに言放たれ、それまた、あやかしのつきたるぞ、萬事かうぐりはまに成つては駄目ぢや、いづれもお引なさるが好い、さてはや馬鹿を見る事の。と石村狐鼠々々、多勢の中へ紛込めば、此大雨に見附からねば犬の子一疋撲れもせぬに、いづれも頭を抱へたり。

新十郎山門間近に馬を進め、つい事の行懸りに御騒がせ申したり、當山に對し別意は存せず、眞平御免下されて、方丈に御執成頼み入る。と慇懃に言ひ入るれば、樓上に聲ありて、いや〳〵住職は何とも申さず、門番鳥渡威張つたばかり、御配慮は御無用、御無用。

十五

昨夜あれほどの騒動をしたりとは、微塵も思ひ寄らぬ如き百姓達の平氣さは、夕飯を濟して、夜延して、寢酒をぐいの、夜着すつぽり、唯今漸々眼が覺めました今朝の顏色、天氣もからりと晴れて、握拳ほどの雲さへ無し。

村盡の小見世、蔀を半分開け懸けて、源兵衞様お早うござい、昨日は恐しい暴風雨でござりました。と向家の茶見世の廁を出たる人に聲掛け、或は裏田畝の總井戸に銅盥の水ざぶ〳〵と顏を洗うて東を眺望、三日以來始めて大山が見えまするな、と手拭を絞りながらいふ男あり。いづれも後暗き樣子は欠氣にも出す事無く、一揆は根も葉も無かりし事のやうに見ゆるまでしらばくれの手際は、賴母子に幽靈張る、百姓の鼻元思案にて出來る事にはあらず。叩き込んだる徒黨の腕前か、仰山にいへば虛兵を張りて矢種をしてやる將帥の智慧袋、藪にも香の物、長谷村にもそんじよそれしやのありてか、まんまと首尾を隱したものと、嗅ぎ出すことは尨犬と有名探穿方、鼻まで屆く舌を卷きて、窶の六部にて歸り行く後より、前髮をはらりと亂して藁束ねの若衆髷、重さうに鍬をかたげ、日に燒けぬ手足の白さ、ぎろりと見れば、短き襤褸の袖屏風して、おゝ寒おゝ寒と、顏を背くるは、仄かに聞く博徒の首領、暴徒の元〆に手利の美少年、此奴其なり。好き

獲物ござんなれと、袂の下に早繩をしごきしが、對手は知らぬ顏して畦道を曲る時、ツンと手鼻かみて行くに素性は知れて、待て暫時身代りにもならぬ首と、見遁して行過ぎたるは、弘法にも何とやら。是空に更めて暇乞して大膽にも眞晝中、靈山より引取る卯之助なりける。

畦道行切り、村へ入口、掛茶屋の前を通れば、若旦那此處へ、ちよいとちよいと。と小峰と鍛が手招す。妙な處へ集つたな傳次も居るのか。とずつと通り、外に見馴れぬ親仁思案ありげな顏して粗葉をばくりとやるは、はてなと立止まれば、差向ひの傳次、大事なし、お上りなせえ。頰被を取つて這入る後、障子を閉め、小峰と鐵が四邊を窺ひ、人無しと見て立去りけり。

長谷八ケ村は土塊一ツも皆此石村が持物、地代を取立て年貢を割賦し、貸して耕さする百姓は盡く我作男なり。去年より今年畠物不出來にて飢饉は見る通りなれども、其は此方の預り知らぬ處、定めの年貢を手嚴しくはたり取るは、石村が一分、指でもさゝす事にはあらず、さるを不法の强惡のと手前勝手の批判はまだしも、徒黨を起して人に鼻を明かせたる仕打の惡さ、鱠にして嚙みたきほどなり。覺えて居れ、骨も皮も砂利粉灰にして腹を癒さむ。屹度爲て見せる事あり、と石村五兵衞、腰を二ツ三ツ叩きしはぶきながら立上りて、達者ゆゑ杖もつかず、鼈甲緣の眼鏡片耳外してぬつくり厚着をなし、三助六藏跟いて參れ、權燈寺へ參詣にと行けば、金に懸けたら釋迦に於ける須達長者といふ檀越、下には置かぬ應對方、別間に請じて茶よ菓子よと饗應中、暫

時して住職頑鐵、三十二相を追從に崩して罷出、好くこそ御參詣なされました、今日は折惡く去る法事を賴まれ唯今回向最中、直と切上げてゆるりと御意得ますあひだ、お緩ぎ下さるべし。夕景より岩永樣がお越しの筈。といふに五兵衞横手を拍ちて、なに武州が見える？實はちと彼人に内談あり。お寺より人を賴まんと思うて來たに、それは重疊、お介意なく何より御商賣は大事でござる。と笑へば、剃立の青き奴をつるりと撫でて、衣の袖にぐわしや〳〵と數珠の音さして、摺足で行く後姿の、さも殊勝らしきが可笑しく、過日醉うての上の分別に、我家の腰元をつかまへて、慈尊の曉は待遠し現世も此處から後光が照射すと、柔らかき腰にしがみついた奴が……と五兵衞鼻筋へ皺を寄せて、くす〳〵。

十六

此事外に知る者無し。宵闇に頭巾目深く、扮裝も形態も人目を忍姿、平内引連れ、權燈寺は菩提所の新しき墓へ、參詣の婦人あり。

乾きあへぬ土饅頭に犇と縋りて取亂し、生きたる人に囁く如く、餘りの果敢さ誠とは思はれぬ別離、早一七日なる、今も面影目に附きて、在すが如し。父親のお顏は知らず人心つきてより、母樣の手一つに御苦勞限りなう懸け參らせ、やう〳〵お腰をさするまで生立ちて、御膳直して給

仕したも昨日今日、降つて湧きたる災難に片時安堵の隙も無く、御心痛より御持病重り、歸らぬ途へ御旅立、一所に連れはしたまはで、悲みを見に殘されしが、怨しうございまする。もし〳〵母上。あゝ呼びましても聞えぬか。と立つたり居たり、おろ〳〵聲、雨やさめ〴〵と泣く風情。供なる男、隨分むくつけなるが無常を感じて、哀なるさま見る目堪らず、やれ〳〵御愁傷樣や、思入御參詣なされ。あちらでお歸りを待ちます。と一人殘れば、餘所見の無きに、わつと聲を立てて泣崩れ、旦那樣御夫婦御慈み深く、今日も法事して下されしも晝はようお參詣もならぬ因業さ、あの手に取るやうな水の音は、遠くもあらぬ由井ケ濱と、幾度も思詰めたれど、其にては折角の厚情に悖りて冥加恐し、如何にもして御用を足し、御恩を返せとの御遺言、妾は死ぬにも死なれぬわいな。おゝ自分にかまけて長い繰言、平内殿待遠からむ、母上母上、折を見て又遠からず參りまする。あい、おさらば。と帶を搖上げ、名殘を思ひ桐一葉、薄に影を隱しけり。後は月も何にも無き眞暗闇の片隅へ、ひよつこり一ッ大入道、障子に映る影法師は、當寺の住職頑鐵なり。石村岩永三人が鼎になりて始むる密談。五兵衞談話の切に咳をあしらひ、どうだ和尚好き分別は無いか。といへば、件の影法師小首を傾け、衆生の濟度こそ心懸け申せ、民百姓を弱らしてくれうなどの御相談には、ちと乘兼ます。とざら〳〵と數珠の音。石村湯どうふで一杯機嫌と見え、飛蒐りて、此奴が〳〵と衣を引剝かんとする手を押へ、これは何とめさる。知れたこと、

是さへ脱がすれば、狼の正體、其氣で附合うて呉れ。といへば、なる〳〵。然らば御免蒙つてトやつて、ト胡坐を組みの、ト數珠を棄ての、是で狼になつたりけりか。たゞし頑鐵僧都は全くの別人、鐘をごうん、木魚をぽく〳〵、不相變御信心下され澤山御布施の段爲念願ひ置ます、どれ狼が。と盃洗をかちり盃を取上げ、着流しの一本ざし反身になりて左の手を後へつき、瞳を据ゑて額越しに我を見て居る、岩永どの一盞。といふ處へ來懸る彼の墓參の娘、草を分けて此處へ今。

岩永――岩永。ふ、とぎつくり、ぢつと下に居て耳を澄せば、經で痛めの皺枯聲して、所謂壘を深くし退きて守るの策略、百姓を擧げて人夫に役し、雪の下の住居の周圍に押廻して濠を掘るべ可し。これぞ萬代不易の基礎、根を固むる城郭にあらずや。使役には隨分手非道く汗油を絞らせ、體好く干乾に爲し呉れむに、渠等みいらとなる時分には、工事悉皆出來て御身樣は鐵艦に乗りたるに同く、ちとの暴浪ぐらゐゆつさりとも爲たまふまじ、如是我聞、一擧兩全はこれならむ。といへば、痰の切れぬかすみ聲が答へて、二も無く其奴が好かるべし、しかし渠らも生きた人間木偶使ふやうにも行くまい、なう武州。といふ。妙に腹へこたへる、ぞうふら聲が、其處は更に心配無し、昔は何某といへる道師、虎を役すること手足の如しとある。何、たかが愚癡蒙昧なる百姓輩、此岩永が權力にて、ぎうといはして見すべし。命令に背く奴等は引縛つて牢へぽッ込み片端から頭を刎ね飛ばして苦しからぬやう計らふべし。其替り此方が隱謀にも一口乗つて貰ひたい

ものぢやの、それ、領主を……ト遣る一件。近き内に謀略を以て此寺へ押籠めて仕舞ふ筈、是は和尚にも疾打合せ濟んで、機會さへあれば一刀兩斷に仕て退ける手筈極つた。臣下は大抵味方なれば、執權より桂馬に飛んで、國守となり上るに雑作はなきが、數ある中には沖野の如き、殿思ひの輩無きにあらねば、身命を擲つて楯籠るまいものでも無し。其時最大事なれば、石村足下が邸宅を以つて、假に我黨の根城に宛つべき心算、事に依ると兵糧種も足下に持つて貰ふも知れぬが、好いか。といへば、決して御念には及ばぬことなり、其儀ならば猶更もつて、急がねばならぬ我家の一儀、早速取懸ることに致しましよ。しかし此一間を借りるさへお明なにがしか和尚殿にせしめられる。其處を石村は城一つお貸し申すことなればいづれ事成就の上はいはずとも御承知ぢやらうの。と早算盤を取り懸ければ、いはつしやんな、これ、資本なしの大工事を教へたのは頑鐵でござる、ちと後生を願うて釣鐘の建立でもして下され。と說き出すに、首を振つて、うむにやまだ〳〵、溜めること〳〵、小判を鎌倉中へ蒔いて雪の降つたほどに積るまでは、なかなかもつて後生なんぞ、なか〳〵もつて後生なんぞ。

十七

此密談總體聞いて戻り、沖野夫婦に語りたるは小萩なり。情は人の爲ならず、出仕退出の送迎

へ朝夕に見る新十郎が顔色其より太く鬱々として樂まざるを、始終傍に見る小萩は、元來優しき性質の、殊に荷へる大恩には、母親の後慕ひ行く命、更に惜からじ。

某日は東領主降誕の日に當りて、新十郎忠義の男なれば、毎年武運長久を祝せむため、豫てさる畫師に畫かし置きたる殿様の肖顔を飾り、供物を捧げて祭るが慣習。小萩三寶に造酒を捧げて奥書院へ持つて行き、床の間に据ゑ置きてするり次室へ辷り出づるとき、何心なく見たる畫像は、十種香に思を籠めたる勝頼が面影あるに、わけもなく顔は赧うなりぬ。自づと眼口動きて今にも我の名を呼びやせむ、神魂の入りたる如く活々として月夜には抜けても出づべき書振り、床しさ、愛々しさ。あの此殿様を、亡き物にして我爲にせむ岩永づら、妾を日蔭の身にせしも彼が業なり。顔構は未だ見ねど定めし定めし旋毛曲りの、口はゆがみて鼻は空向き、眦下りて蚰蜒眉毛、頬骨のこけたる、あゝにくらしい哉、第一氣に食はぬ聲して、我々しがなき者をば、思ふ様苛め抜くといひたるを、立聞せし時は、女ながら引掻きて喰付きたかりし、思へば殺して遣りたい程、憎くてならず。

彼が爲めに行末は、此、優しげなる殿様、いかなる憂目をや見給はむ。慈悲深き旦那様、御苦勞なさるも其故なり。

といふは小萩が表向きにて、實は卯之助に逢ひたきなり。世馴れぬ處女氣の思詰めては、矢も

楯も堪つたものにあらず。傍へ行かれぬも顔見られぬも岩永のあるためなれば、彼が死ぬると、戀人と一所になり得るとは同じ時分なるべし。さりとておめ〳〵其迄待てば、此方は白髮になる時節、手足は干乾びて皺寄つて、齒が抜けてから何になるものぞ、おゝ嫌なこと。太刀抜くすべこそ知らね、鎌取りし覺えはある手、やはか仕遂げぬ事あるべき、彼さへ殺せば天下晴れと、さても無分別な白露や、落つればおなじ本郷四丁目にお七とて、此よりは一目上手の女ありし。

小萩や其處に何をして。と聲掛けて入り來る內室、これは奥様か。と立つて退らむとするを、少し談話のあるに其處閉めて近う、と呼寄せ、時に折入つて賴みたき事あり、聞いてくれようかと口占を引く、此用事は大抵昔から難物と知れたり。小萩、妾も少々お願ひがござりまする。ふむ、其方にもあるか何なりと聞きます。其は早速難有う存じまする、そして御前様御用事は、先づ其方の方から聞いて懸ります。いえ、御主人様を後廻しにするは慮外、何なりともおつしやりまし。そんなら申さうが事に依ると其方の願望といふのが此爲めに出來無くなるかも知れぬ、大事ないかえ。と手烘を引寄せ、火箸を輕く押へて居る。

何か大事さうな口振、底氣味の惡さにおづ〳〵、奥様顔色常ならず、無理に何かを押隱す容子見えたり。はい、はい。しかと大事はないかえ。思ひ切つて承りました。襖の外には新十郎、否ともし小萩のいはば大事を洩して其儘に棄置かれず、不便ながらと刀を杖。固唾を飲んで覗へ

ば、おゝ御用に立つは其事か願つたり叶つたり、と小萩は意外の返答して、奥様妾も其事を願度いのでござんした。

あゝ、好く承知して呉れた。と新十郎ずつと入れば、はあ、御前か、と座を避くるを、手を上げて押止め、いや其に其に、今日ばかりは新十郎が遙下りて此通り。凡そ幾百の臣下の内に此と頼む人見當らず、我自らが差違へむにも、敵は用心深ければ、なか〳〵以つて近寄難し。棄て置けばお家の大事、表立てむに證據は無し、殆ど思案に餘りたれば御身を語ふ心になり、いはむいはむと言ひ後れて、今日領主の誕生日、未だ武運に盡きたまはず、此好刺客を得たまひたれば御家は萬歳、一國は此より安泰たるべし。と肖像の前に恭しく兩手をつきて一禮し、さて小萩、御身は武術を知るまじきが腕に覺えのあらむより心だに確ならば、一人の人は刺し得るものぞ。傍に人無き閨の内、彼の油斷を見澄し、匕首を拔きて飛蒐り、爰と思ふ急所をば、力一杯貫通して、其上神氣亂れずば、一抉り抉らむには、岩永最早彼の世の者なり。さて得物には妾が祕藏の守護刀を參らせむ、召使とはもういはじ、妹とも思ふぞや。と小萩が顔をつく〳〵見て、夫と二人目を見合はせ、はら〳〵と落涙せり。

十八

七曜を繰りて大惡星、八方塞がり眞黑の天刑日、最縁談に忌むべきを、態と黄道吉日に擇び取り、輿入は夜の七ツ時、場所は五十砂井の石橋亭、其時刻には破軍星の劍尖、眞正面に其處北の方を指すこと新十郎知りての上なり。

落葉掃く庭男の顔たそがれて、時刻やう〳〵近づけば、一間の襖堅く閉ぢて薄ら暗き六疊の眞中に端然と坐す小萩御寮、七日精進齋戒していよ〳〵今日になりしかば、神壇に祭りたる摩利支天に御明奉り、祈願を籠めて目を瞑り、雙手を堅く膝に組みて、頭を少しく首垂れたり。

時に新十郎はお浪とともに靜々と入來りて、いざ此を。と押直す、三寶の上に懷劍一口、鞘の塗さへ水の垂るまで、中身の切味思ふべし。一目見て禮すれば、いで我も支度せむ、奥、落着いて介添せよ、小萩後に又逢はう。と座を立つ後に、そんなら奥様。どれ、と阿浪。小萩はするすると帶を解きて眞白き胸を顯せば、白羽二重の裂布を以て乳より懸けて鳩尾を三廻しばかりぐるぐる卷き、阿浪ぢつと引緊めて、件の懷劍差込みつゝ、決して人に見られな。といへば、死ぬとも男に見せうかいな。切り付けると仕損ずる、突通せ、突通せ。はい……はい、と答ふる時、聲も胸もわなゝきしが摩……利支天とぞ念じける。緋縮緬の對丈襦袢、手早くふわつと着せ懸くれば、細紐ぐるりと引廻す、阿浪打見て、あゝよし、よし、少しも目立たぬ安心。と心ばかりの介添女、武家に馴れたる扮裝に、しなよく支度出來ければ、珊瑚の根掛、金簪、玳瑁の櫛取揃へて、

阿浪が祕藏の頭の物、惜氣も無く指飾らせ、鏡を與へつ。顏を背け、愁然として、俯向きけり。

五十砂井なる石橋亭には、岩永武藏上座に直り、左右二側に居流れたる、腹心の者ども二十餘人、花を待間の大嵐、たらふく飲んだり、食うたり、げえッといふほど下されて、いづれも艶福艶福と、縺舌にぞ噪動きける。

武州苦笑ひして座中を見廻し、若殿儕嬲るまいてや、此好い年して色の戀の、浮氣な沙汰でもあるまいが、何もこれ藥の事ぢやて、方々が葛根湯と大した相違は無いぢやて。ま、ま、大目に見よ。とあれば、道化たる男扇拍子、さあれば其事目出たう候、徐福が日本に船を向けしも、姫氏國ゆゑに候はむ。不老延年の人魚といへば、容顏美麗に玉の膚、妙藥々々。と笑ふもあり。おかこでげすかえ。と駄洒落るあり。左樣に喜悅笑ひなされては、折角延びた皺が寄る。と皮肉なことをいふもある、亂れ崩るゝ酒宴半ばに、飲みさうに見えて飲まぬ男、肩聳かして、まじつき居る武州が股肱中村大六、苦々しき顏してつか〳〵と膝下に進み、御年の寄らぬ藥とは誠にさもあるべき御意でござるが、いはば敵たるべき沖野新十郎の裏を返せし今度の次第、むかし唐土には魚腹に匕首を隱したる先例ござれば萬一の御用心可然。と口角に泡を飛ばせば、左右に侍べる二三人、左樣然り。といふ。武藏、其も左樣ぢや。閨へは女郎ばかり來るわけゆゑ、害心ありても恐るゝに足らねど、用心には越すこと無し、汝七八人を擇みて左右の廊下に潛んで好からう、

したが花に長刀は無粹ぢやて、何時までも居てくれるな、燈を消したらば、毒では無い、歸らうぞ。最時刻ぢや、迎にやれ、口が憂惱い、別室にて待つと致す。と口早にいうてづいと立上る。いかなこと荒神樣は向うにもついてござる、此企さても危し。

とは知らず、小萩は鏡に衣紋を繕ひ、見せたや卯之助に、亡き母に。思はぬ人に見らるゝか、と敢果さも口惜さも、胸に緊めたる劍に押へ、毛穴ぞく〳〵胸わくつき、坐りもやらず立ちあへず、柱に凭れて茫然たり。裝束直して新十郎緣を廻りて障子を開け、見事に出來たな支度が好くば、いざ。と行く人、見送る人。早式臺に近づきたる、敷石はたゞ草履の音、足取亂れてあちこちへ、醉つた醉つた、四文一合と飲んで此姿に候ッ、えゝ――ッ、新十殿御內かな。冠彌左衞門御入來と洒落られた。

十九

アレあの聲は兄樣。と阿浪玄關の戸を開くれば、未だ挨拶も爲ぬ內から、上御機嫌で高笑ひ、御細君をつけにした、美なる者を御携帶、大分おつりきなお慰み、お浪、いや奧方樣。其後はお達者かな、惣領の甚六相も變らず貧でえす。や、どつこい。と懸聲して、何處のか破垣を拔き取りたる竹に括れる貧乏德利、どつさりと腰を懸け、冷飯草履脫ぎ棄てて、御家來衆、內の斑は惡

戯する犬、啣へて失せると大きに恐れる、草履に氣を注けて下されい、さらば此方へ御入り候へ、御主人御風邪か、秋冷相催しお見懸け御血色が惡き事、奥方も御同然、……さもしい顔なり。おつとこりや〳〵、美婦人つんと遊ばすに及び申さず、久濶での御光來、こゝは端近まづこれへと致さうわい。と、ずるり這入込んで四邊を見廻し、ほゝ何方様も起身でお出なされる。客がまづ寛ぎ申した、御遠慮無く下に居させられい。

こは折惡しと新十郎、鳥渡阿浪に目配せして、兄御好く來せられたが差繰られぬ要用あつて、新十は御免蒙り度し、奥、後でおもてなしを。はい〳〵、さあ奥へお出、兄様御馳走してあげまする。と連退かむとすれどいつかな肯かず、野郎にふられては、おらあとんと槍の心地が致す、これさ、嫌はせ給ふな、長いことはお止め申さぬ。ま、ま、下にござれ、と言ふ。醉うたる人、逆らはずに早く切拔けむと、新十郎不承々々、袴のひだを折目正しく、對向うて座に就けば、兄様お前はどうしたもの。と夫にお浪は氣の毒顔。小萩はとんと立端なく、袂を手持無沙汰なり。

彌左衛門一向に平氣な顏色、時に御主人お聞き下され、拙者固は一雫も飲まざりしが、菓子と澁茶ではとかくどうも、溜飲がしてならぬ、處で酒無くて何のおのれがと、近き頃より改宗致し、味を覺えると、こいつ溜らずに旨うござる。茶菓子で世を渡つて御覽じろ、細く永く愚圖々々とえらい過失は無い替りに、彼も是も胸に支へて、もたれて出て來る欠氣の氣の惡さ、一番さらり

と氣を替へて酒として御覽なされ、瓢箪ばかりが浮物か、わつと氣が發して膽が廣々となりの、山川一摑みといふ氣組になります、此處でそれ向う見ずの行當りばつたりとなるかはり、手許足許に氣が怯けぬ。されば、憎き奴は打撲し、躓足て轉べば其なりにぐつと寢て仕舞ふ、なんと異な物では無いか、なぞと眞面目臭くなるのを理に落ちるというて大きに忌む、宜しく無い奴ぢや。御主人なんと大事な用を達しになら、出懸けにぐいとやつけて行かつし、恰度五合持合せた。奥方ちよいと蠅帳を探して來なさい。おれから驕るのは御當家開闢以來の珍事、死ぬか生きるかといふ出來事、おつと船中にて申すまじきことに候、わはゝゝゝ。と何か獨で冴えのめしぬ。

阿浪は寧ろ呆れ果て、斯る兄では無かりしが、風説に聞く此頃は、破落戸等の仲間入りして、形態ふり惡くなられしよし、まさかと思ふに此樣子にては、どうも眞實か情無き事なり。常住は兎も角も今日は此上無き厄介者、人の素振見て大抵差合ひを繰れば好きにさても〳〵困つた事と、夫を見れば澄まぬ顏して持て餘して居る樣なれば、獨り氣を揉み揉み拔きつゝ、居ても立つても堪らずなり、唯々もうようござんす、分解りました。お前のいふことは御道理、此方も差當り急な用事、急ぐのは無理でござんすまい。さあ〳〵此方へ〳〵。と袖を引き立つる渡りに舟。心利きたる平内、敷居越しに額附きて、先方様からお使者參り御待兼の御様子、旦那様早く御出なされまし。おゝ御大儀、貴郎ようござります、お介意無く。と急立て、これ〳〵兄様不行儀な此樣

は。家來衆の手前、妾は肩身が狹い。と歎息。

冠とろりと眼を据ゑて、何の女が生聞な、むゝ御家來といへば其處なお女中、はにかまずと此へ來さつせい。と今度は小萩をからかひ懸けるに、えゝお前もな。此方は其處で無いに依つて、又の事にして下され、貴郎お介意無く。といふを押へ、何構ふな、奧方其はお門が違ふ、新十郎殿にこそすれ、おらあ、美婦と話したとて、けちりんも燒くには當らぬ、なんとお女中左樣であろ、まあづ物の道理がよ。出さつせい、づいと此へ、おれが好事を話して聞かせる。昔々去る處に女ありけり。人の爲に義理ありて他所に行かむと思へども、えゝ――と、心に懸る男あり。されど慕はるゝ其男も、おなじ水の岩にせかれ、西と東に別るれどいづれ後より追附きて、女と一所になるといふ。いや、やくたいも無い談話をさる少年に聞いて來た。面白う無くば其迄ぢや、これさ顏を見せて吳れ、あゝ美なる哉花やか花やか、酒無くて何のおのれが、とそれこゝん處へ落ちを取らうといふ洒落だ。何の又餘計なことを、新十殿酒にせう〳〵。と後先揃はぬ言種も意味ありげなる言葉の端、扨は樣子を知りての事かと、思ふも此方の心から、追はれずに飛ぶ蝗かも。然らば頂戴致さう。と新十郎言ければ、何お附合ひ下さるとな、又もや御意の替らぬ內、それ其處にあるは三寶、其奴おもしろし、おつと妙々、土器もあり。まづ御主人に。と獻す盃、お銚子は入らぬ事、貧乏德利其儘、阿浪が酌に飲み干して、はつと思へる色を見せず。返すと、一

口ひつ冠、いざ今一杯お女中に、お酌を賴むと引受けて、思ひ獻ぢや飲んで吳れ。と何思ひけむ座を正し小萩に膝をじりゝと向ければ、あの妾は不調法。と嫁入姿の愛々しく、振袖口に後込すれば、彌左衞門、此盃は受けたが好からむ、な。さる人になり替り、な、さる人になり替り、更めて思ひ獻、媒も兼役ぞよ、四海波靜かに。と小聲に謠うて差出す。そんならもしや。……何も彼も言はぬが花嫁受取れば、沖野阿浪が酌女郎、小萩は土器押戴き一口飲めば！……水なりけり。いで肴を。といふまゝに、冠扇を颯と開きて、（謠景淸）君の仇、思知れと、三刀ばかり差し通し〳〵、醉うた醉うた、ころりとせ、御免候へ他愛無く、ぐう〳〵と大鼾。

二十

恁て小萩が婚禮の駕籠昇出づる折しもあれ、斑といふ飼犬、切戸口より疾風の如く駈來り、駕籠傍に纏りてさも悲しげに、三聲ばかり泣きたりしが、つと庭口へ飛んで返りぬ。

これがあやかしの附始め、――石橋亭に橫附けになりて小萩駕籠より出合頭。ばら〳〵出迎へたる五六人は、いづれも恐らしき撥鬢奴、これにまづぎよつとして勇氣頗る挫けた樣子。次に新十郎岩永に挨拶の間は、十疊敷に行燈一つといふあまりどつとせぬ廣間に、唯一人茫然と待つて居る內、薄ら寒くなり、心細くなり、投首して身を縮めてをりしに、あちらの隅にけら〳〵、此

方の隅にもきち〳〵して、覗き込んでは廊下をばた〳〵。入り交り立替り、何十人に見られたるか、行燈とともに消えても失せたし。其次に、睨め付けるやうに這入り來る岩藤といふ顔構の女中、物言ひけんつんと素氣無きが、きり〳〵此方へおぢや、と切口上、引立てるやうに連行かるる權幕に、小萩は大分顚倒せり。其より別室に入れられて我が刺殺すべき岩永に酒の酌をさせられ、膝近に畏りて銚子を持てば、心に暗きことあるゆゑわな〳〵震の出でて、彼が寛々と突出す盃に注がむとする銚子、かち〳〵と緣に衝りて、酒はざぶと溢して退け、はつと思ふ胸に、高まる動悸、此處に刃物がと人に囁くが如く聞きなされ、氣取られまじと身をすされば、吸物椀を振袖にて卷き覆し、これはと顏を背くれば眉に火の付く燭臺あり。其も此も初心な奴と、岩永一倍賞翫したるは未だ運の盡きぬ物怪の僥倖。傍に見て居る新十郎の苦心思ひ遣られて笑止至極。

軈て新十郎思入ありて座を開けば、どれ閨にせむと岩永につたり。さあ〳〵お色直しお召替と、女中二三人に圍まれて、小萩は殆ど夢現の境、疊にも躓く逆上加減、足許あはれ覺束なく、總てがお三輪其儘なり。女中輩寄り集り、一人が踞うて小萩の帶を解けば、一人が着替を廣げて立掛る。透さず後からずるりと上着を脫がすまでは、唾乾き、舌硬りて、辭みもならず物さへ言はれず、彼等の仕度まゝにされ居たるが、下着に手を懸けられた小萩顏色變り、身悶えして振拂ひ、べた〳〵と坐りて、俯伏になりて、胸をしかと兩手に抱き、嫌、嫌、嫌、と聲を絞る。さういはず

ずにと肩に手を懸け引起さむとすれば、疊に喰附かむばかりに身を窘めぬ。

其と見て一人が眉を顰め、顋でしやくつて眼で知らせば、端婢心得て座を拔け出で、小蔭に出で逢ふ中村大六、油斷はならずと手ぐすね引く。

此方は一同さあらぬ體、下着をお脫ぎなされぬは、背に灸の痕があるのであらう、さても〳〵といへば、否さうで無い、脇の下に痣があるべし、こちよ〳〵此邊にと擽られ、灸の痕は此邊かとぐり〳〵ゑぐり廻され、小萩は悔しく辱かしく、身をもみあせれど許さぬにぞ、あれ〳〵と泣聲にて、轉び顚けてぞ困じける。

されば我身の境遇によりて、見聞く物より外の事は、露ばかりも知らざる處女が、豫て斯うと思ひたる通なるは、唯岩永の憎き顏色のみ。外の事は一々意外に出でて、今や絕體絕命なり、此衣一單脫がされむには、直ちに見らるべき懷裡の短刀。彼等の手足は我身に觸れて、ともすれば見顯はされむとする危さ、苦しさより切なさより、大事を抱きたる身の、五體に冷たき汗搔きて、一層のこと、此儘死にたき心地なりしが、固これ岩永が首丈の女なれば、彼等も左迄には手荒きことせず、好き程に嬲りて美しき島田髷の毀れぬまでにして手を離し、襦袢は其儘にして上へ一枚、しどけなき卷帶姿に更へ、周圍を取卷き、有無を言はさず、武藏が閨に誘ひけり。そりやござつたは脫落まいぞ。驚破といはば捻伏せむと、中村大六、腕捲りして早繩を手繰り懸け、呼吸

を殺して固唾を飲めば、一歩過てば金輪際。女中は小萩を送り狼、前には大蛇舌舐ずりして、獣慾の淫樂を貪らむと、几に片肱懸けて、岩永武藏待兼たり。

後よりとんと突かれ、はッと思へば寢室の内、襖は女中が鎖して去りぬ。

小萩は最近斯うと觀念して、近寄れば唯一突と、思ひ切つて前へ進むに、元來田舍に生立ちたれば、長く引摺る着物の裾足にからみてさばき難きに、岩永を去ること疊ならば一疊間近になりて、二つ並ぶ枕が目に入り、今更もだ〳〵と上氣して、我と我足に裾を踏みて、磴と俯伏になりたるまゝ、背に浪打たせて起もあがらず、折角の決心こゝで滅茶々々。

岩永大きにもどかしがり、手首を取つてぐいと引寄せ、膝へ仰樣に抱竦め、矢庭に帶に手を懸けられ小萩は絶叫してもだゆるにぞ、ずり出でたる短刀の柄、衣紋亂れて顯になりぬ。これは！と突立ち眼を怒らし、土足に搓と蹴落す物音、驚破やと大六飛んで出で、人心地無き小萩が小腕、力に任せて捻ぢ返せば、悲鳴を上げて、あッ痛、た、た、た。

沖野！新十郎！　神妙にしろ、御用だ〳〵。

二十一

百姓が鍬を擔ぎて寒げなる、暮の畦道一人行き、行けば後より二人行き、三人五人むら〳〵と、急ぐ塒も枯枝や。春秋幾何去にし年、石村が甘言に誑らされて、子孫に相傳の不動産を賣り渡し、一時に得たる多くの黄金は烟の代と立替る、今は一昔の後なれば、亦端金をさへ殘せるは無し。

他人の所有地を耕して少しく穫たる米穀は、過分の貢に釣合はず。年々に困窮重なり、衣食にも事缺れど、朴訥近仁所謂愚にして直なる輩、さすが故郷の棄難きに、見す〳〵石村が奴隷となりて、可憐數百の男女、蝸牛の家さへ借物なり。

二ケ年續く飢饉にて約束だかを納め得ぬは、皆身に荷ふ負債となり、手嚴しく苛げらるゝを、避けて他郷に走らんことも、心の隨意にはならざりけり。

弱り目に祟り目百姓達、不意を喰うたる災難は、石村急卒に布達を廻して、手足の動くほどの者は、年老、病人、親類忌中、何でも構はず、どし〳〵來りて出精して濠を掘るべし、辨當は自辨にて、賃銀は鐚一厘無し。差引勘定は年貢の未納と、さりとては無法な觸條。とても承知すまじと但書、左右に托して命令に背く者は、屹度曲事たるべきものなり。岩永武藏判、百姓一統。

これにはぎうの音も出すこと能はず。愈其より、昨日までは御城の濠を見て、吁此程のことを、能くも昔の人は仕遂げた事よ、とそゞろ其辛勞に寒心せし、其程の勞働を、自分々々が務めねばならぬ身となり、まだ一もつこ荷はぬ内から、舉りて顏は土氣色。

總て石村と岩永が、貪慾無慙の心にて思うて爲ざることも無く、言へば通らぬ無理も無し。さても數百の村民を盡く人夫に役し、明六つよりして暮六つまで休憩ふ隙なく追役ひ、少しの倦怠も無からしめんと、足輕若黨數十人が、岩永の手より繰出して、人足十人一組に、二人宛の見張を附けて、各々皿大の眼を睜り、棍棒を取りて容赦なく追立てしめ、倦むことあれば鞭しむれば、汗と膏の滴々にても地は窪まむばかりなりけり。

二日三日は忍びも得てし。こと旬日に渡りては、いかに耕す業を以て永年己が務としたる、農民とても堪ふべきや。加ふるに一錢の賃錢も得ることなければ、口を餬する手段に盡きて、妻子眷屬蟲の息、唯霜枯を待つばかりなり。されば數百の人足ども、日がな一日の勞働に、ほつと息吐く隙も無く、飢と疲に弱り果て、やう〳〵夜を待ち得て歸れば、戸に倚りて待つ親も無く、慰め吳るゝ妻も無く、窪みたる眼を見合せては、鼻打かみて齒を切り、無言て其處に倒れて呻吟く。もし何時までも此儘ならば、遂の詰りは堀の埋草。

手を束ねて死を待つよりはと、他國へ逃走を謀るは定と、石村其處は梟の目、暗きを見ることあり。釜中の魚は火水の責苦、五兵衛はほく〳〵悅に入り、まづ先日の報讐も出來たり、早く濠を仕上げむには、渠等のたれ死しては役に立たず、一番炊出だけ自腹を切つて廳て大望の鯛を釣

るべし。二つには體裁好く人質を取つてこませと、一思案して、勞役中の食物は當飼ふべし、多人數の事ゆゑ飯炊に、妻よし妹、娘よし、一束たばねに差出せいと觸示せば、絶體絶命の百姓等、何がさて否とはいはず、女輩は一議も無く、夫のため親のため、己が露命をも繫ぎたさに、先を爭うて參りたるを、比企ケ谷の片傍、昔或る大名の空屋敷へ、どんと打込みて鎖をぴしやり。

此家へ夜な夜な、黑頭巾の武士入り交り立ち交り、出入りするを番の者咎めず。外より鍵にて戸を開ければ、悠々と這入り込み、晝の疲勞に前後も知らず算を亂して寢汚き、女儕を擇取見取り、目ぼしき代物は新造、年增、娘でも、妻女でも、勝手次第に擔ぎ出して、人無き地藏堂、稻荷の社、樟の大木の根方など、番卒どもの慰みなり。白地の女あな無慙、千草の枕に命を落して、夕に白骨となれるもの、一人や二人の事ならず。

或夜更の事なり。眠氣覺しに腹の痛まぬ、娼妓買はむと二人ばかり、番所を拔けて面を包み、田畝道を通ふ深草、百夜の情と鼻歌で通り懸る土手際に、黑髮亂れて、はらりと顏に懸り、横樣に倒れて片息になりたる女ありけるを、好色家無遠慮に亂れ髮を搔分けて顏を覗けば、魂天外に飛んだ美麗い見附け物。年の頃二十四五なるは、さても好き程合ひと、膚に手を觸るれど身動きも得せぬは、大分血を吸はれた揚句と見えたり。此儘棄置くは惜き代物、常例の處へ連れて行け、難有しと、頭の黑き鼠めが、よいしよと擔げば、一人が髮の毛持ち添へて、舊來し道へ引返

し、眞晝の如き篝火の片蔭を、臆面無く通り行くを、外の番士、見馴れたこととて少しも咎めず。いよ、某殿好き者を。といへば、行つて拾はつし、いくらでも落ちて居る。いや滅多に拾ふと鼻を落すテ、わはゝゝゝ。と見返りもせず、燒落ちた松を火箸に搔寄せ、大欠伸して股倉烘り。

暫時たちて、捕手五六人、ばら〳〵と駈け來り、御存じの囚人沖野新十郎を今夜經師ヶ谷（土の牢屋のある處）へ護送の途中、網乘物に近づきて、奪ひ取らむと仕損じたる、大膽不敵の女あり。引捕へむとせしを、苦戰して切り拔け、行方知れずとなりぬ。長谷の方へ脫走には此處は是非通道、もしや。といふに番所の者目を見合せ、其か非か少時前、垢拔のした日向臭からぬ、震ひ附きたき婦人を若侍が擔ぎて行きたり。さては、といへば、さあ終了つた。遠くは行くまい。と後を追手、御用の提灯飛ぶが如し。

二十二

太守勢を凌がれて法令更に行はれねば、誰か又理非を論じ得む。昔、亂世の時だにも、麥刈る士卒を罪せしに、今や太平三百年德川の流濁らざるこゝ近隣の相模の國に、前代未聞の活修羅場、言語道斷といひつべく、今目前地獄の形態、歷然と見つゝべし。良民塗炭に困みて婦女子は操節を汚さるれど、梟惡の逆臣賊子は、月日とともに彌榮え、軒端に蜘蛛の巢懸ることなく、秋

葉深き間にまで、金殿玉樓輝けども凩も吹倒さず、雷も碎かむとせず、鳥も其家の森には宿れり。あゝさても秋の空は、天も定めの無き世かな。あはれ南海心あらば、爆然怒濤を捲き上げて此慘境を一瀉せずやと、目を瞑りて怨を呑む女を擔ぎて、武士二人、早くも番所を通り拔け、一叢木立に着きにけり。

誠にこれは掘出しもの、働かぬのが難なれど、僥倖よしとゆふだちや法華駈込む阿彌陀堂、狐格子をがらりと開けて、はい、今晩は如來樣。トどしんと戀の重荷を下し、雙方一齊に汗を拭ひ、下和の明珠とは譯が違うて、此美婦暗闇では曲が無い。それかつちりとお遣なされ、火奴是にござ候、と吹付けて壁へ燭火。女を勾引す處にも事を缺きて、阿彌陀堂へ蠟燭懸まで用意して置く、不埒千萬の奴等なり。汝等は明るくなりたる替り、己あとんと眞如の闇ぢやと、御本尊蜘蛛の巢で顏を隱し、見ぬ振して立たせ給ふ。

好色家等再び女の顏を見じ、手足を撫て見て、さるにても口も利かず掙きもせぬは、來山ならでは堪能ならうか。俎の上でぢつとして居る鯉は、我等下司の口には合ひ兼ねたり。まづ介抱してト口說いてト而して後に拜むとせまいか、きこう抱かつし、此處に用意の藥あり、と芬と香り高き丸藥を含め、こらよ、女しつかりせい。と耳へ口を持つて行けば、元氣の附きてか恰も此時、莞爾した其艶麗さ！　氣丈夫になつたか、しつかりしたか。といへば、女恍惚目を開き無言にて

領く。抱いてやるが嬉しいか。と擦り付けば眉を顰めて、否々と頭を振る。こん畜生奴、憎いといふは可愛いの、だ。浦の苫屋で夢結ぶ。と悦に入れば、一人が兩手を扼りぬ。途端に婦人が阿の呼吸、うむと呉れたる柔術の一當、見事一人はもんどりうち婦人はすつくと突立ちたり。これはと驚く殘りの武士一足退る足を目懸けて、何時の間に來たりけむ、緣の下より飛出す、犢大の斑犬が、向う毛脛に嚙附けば、あいたしころりと倒るゝを、透さず吭に爪を立て、唯一口と牙をば鳴らす。魔佗羅！退いた。と彼女、手眞似に犬を押退けて、件の武士の襟首をずいと取つて引起せば、魔佗羅は傍に踞りぬ。

下郎ぢつとして居や、好きことをして遣らう、と帶を奪ひて後手にぐる〳〵卷き、柱へ結へて動かせず。小刀を沒收げ拔き懸けて、錆びたるを見て、ぽいと投出し、倒れたる今一人のを驗めて、これならば、我慢が出來ると、身の用心に奪ひ取りしづ〳〵と衣搔合して、帶をしやんと身繕ひ。懷に差添呑んで、振返りて、奴さん。お蔭を以つて易々と番所を越し、負つて呉れられて草疲癒りぬ、重ねて看病過分に思ひます。其禮に活けて置く、早く歸つて岩永に、武州、枕を高く寢たまふな。沖野新十郎が妻浪といふ今では無祿の阿轉婆が、行方知れずなるあひだ、何時何時飛蒐つて、首級を申し受けむも知れず、永くは持たぬ今の內思ふほどの惡逆を、出來たらば爲よ、と斯ういふべし。そんならあばよ。と言ひ棄てて飼犬を一寸見遣り、頤で招きて悠々と魔佗

羅を後に隨へて見返りもせず立去りたる沖野阿浪の大膽さよ。

さて〳〵狸も、劫羅經ては、自由に犬を役ひこなすは、恐しい〳〵、と呟くにも應ふる脾腹の痛さに、顏をしかめて起上る。御同役、お氣が付かれやしたかな。狸ではござるまい、諺に好事魔多しと、な、それ斯ういふ事には得て魔がさすもの。と手首をさすりて、歸りましよ〳〵。と燈火を吹消して、出に懸ると人の聲。あれ見や傳次、燈明が消えたぜ。啊呀ほんにな、何でも此邊に阿彌陀堂が……どつこい踏壇、おつと此處だ。卯之樣鳥渡お掛けなせえ。

二十三

傳次何とせう。と頰被を取りて首に卷く靈山卯之助、手足も汚れ垢つき古袒袍に三尺帶、はぎはぎの股引に草鞋懸の寥態は、猿も同樣人足の夥間と見えたり。こゝが大事だ、今少し辛抱なせえ。輕忽に失策は先度でもう懲々した、今度は腹を堅平と緊めて懸るだ、卯之樣、御方の思はくは。已には迎も待切れないぞ、まあ此を見い。と、襤褸の袖を撑げて見せたる、二の腕より肩に掛けて、生々しき撲疵紫色に腫れたるが、一個所のみか二三個所、色の白きは生育柄、理質細きが哀れなり。な、此だ、此通り私は毎日撲れます、固、靈山を下りしは、義の爲に死なむため、鋤鍬持つて、石村が要害を造り、働樣が鈍いとて、下郎どもの笞を蒙り、阿容々々生きて居る筈

では無い、最早堪忍の緒が切れて、追ひ使はるゝ其度には、憤懣に我身を忘れて、役人等を取つて投げ、蹂躙して遣り度なる。其口惜さ無念さに、其儘日數が懸らむには、じれて自殺を仕て仕舞ふ、何と傳次、又仕損へば其迄だ、一か撥で遣附よう、死ぬのは一番容易いぞよ、と思ひ出したる無念の切齒癇癪額に顯れて握り占めたる拳を其儘、猿が膝を搖動りて、さ、さ思案をして呉れよ、と弟が兄に强請るが如く打歎たれて猿の傳次、あ、御道理。餓鬼の内から悠然と蒲團には寢ぬ私でせえ、あゝもぎだうな苦役では、十日と二十日は勤務らねえ。況て筋骨の固まらぬ、此方の樣な身體では、御辛苦思ひ遣られます。村の衆も二三人、倒れて死んだも見受けたり、評判の綺麗首は(小萩にあらず)如何程苛酷い目を見たか、身體中が血だらけさ。虎狼も鬼も蛇も、這奴等が非道にや井目だ。目も當られねえ一統の難澁、唯の一刻半時も安閑と爲て居られうか。子分の奴等一纒めに、蓆の旗を吹靡かし、卯之樣お前が打物取つて、傳次兩肌脫がむには、撥鬢頭の一束位程、斬並べるは瞬く間、なれど此方も知つての通り、濠まで穿らせる用心深き、石村五兵衛と岩永の、首はちつと貴ひ惡い。其奴を活かして此方が死んでは、其こそ犬死、固の通り村の奴等はおなじ境遇、涙の種も悉盡になる、半死半生の彼慘景を、冥土で見ては浮ばれねえ。一花咲かせて散らうなら、あの因業な老耄等の、顏に唾を吐いての上だ。これ仕遂げるにはお前や俺の若い智慧では埒明ねえ。見懸けはけちに瘦こけて、風が吹くと飛びさうな、皺くちやの親

仁樣、度胸といひ、技倆といひ、底の知れねえ冠彌左に、軍配持つて貰らはねば、大望成就は覺束無し。此間から幾度も口を酢くして賴めども、とつても附かぬ挨拶して、空嘯いて取合はぬ、其見識に猶一層、床しさは增すばかり。今夜も此から賴みに行くだ。そんなら傳次出懸よう。さあ卯之樣歩行なせえ。臥龍を覺す玄德の、德は此方に無えけれど、何の巖も徹す弓、引いては返らぬ誠心を、汲んだら承知しようも知れぬ。と稍聲高に鳴海も、水に口あり阿彌陀堂、後の格子に四個の耳、二人の武士が聞居るとは、知らぬが佛だ。皆聞いた、非望を巧む土百姓、退くな、捕つた！と聲懸くる。

傳次ぎつくり、卯之助驚き、あつ、終了と遁出して、追うて來るは幾人かと、人數を見て取る咄嗟の氣轉、勢に乘り追蒐る二人の外に續く者無し。占めた！といひさまつツと戻り、ぴたりと合うたる四個の身體。や、や、と懸聲して、四人一齊に屏倒し。と見れば武士組數かれ起上つた る卯之助傳次、血汐滴る短刀を草に拭うて鞘にかつちり。遣つちやつたか。はて脆いもんだ。と塵を拂うて兩人が一足踏出す秋草の、さや〳〵靡く跫音大勢、御用と朱書の提灯を眞先に立てて近寄つたり。

鷹が蒐つた南無三、と羽搔縮めて狩野の雉子丈より高き薄原へ潛と隱れて遣過せば、草を分け行く捕吏の面々、隱れし二人を見落して武士の死骸に燈明を指附け、偖こそ後れた、今の前、擔

がれて番所を通つたは、宵に新十郎を奪はむと、大膽不敵を働きたる、沖野が妻に極つた。逞しき男二人まで、切殺して遁げ退きしは、何樣餘程の手利なり。まだ血烟の立つ樣子殺られたはつい今か。遠くは行くまい、追駈けろ、と御用の提灯、流れて跡も無かりけり。

蹂躙られし萱薄自然と起きたる共葉摺れ、ざわ〳〵と音のして、首ぬいと出て四邊を覗ひ、さあ好し卯之樣出なせえ、と囁き示して猿の傳次、危なかりしさるにても外の婦人に猜疑懸て我等と知らぬ癡呆な奴等、都合ついでに冠の好き返事聞きたい、と靈山卯之助打連立ち、蕎麥屋と按摩に大町通り、小町も過ぎぬ材木座、横に折れて二三町、彌左衛門のお宿はまだか、直に見えるあの屋根だ。浮世に遠き隱逸の門前に草深けれど、君が住居と思へばよしや、玉の臺も愚でござる、玉の臺も愚でござる。

二十四

名の立つに、お笑ひやるな佗住居、餘所の見る目の見榮も無く、老いては杖を突支棒、腰の曲つた破茅屋一軒、人といふ字に成り懸けて、未だ凩の吹かぬ間を、纔かに支へて立てるあり。竹藪自然の垣結ひ廻し、前を流るゝ小川の上に、板一枚の橋を渡して、是が……といふべき戸口に到る、後は青照山の裾にして、半腹より横樣に、茂り老いたる松柏、枝を連ねて屋根を蔽ふは、

風吹く度にがつさり崩るゝ、萱より增しなる雨避か、壁剝落ちて骨見ゆるに、照射燈火の影無きは、住人寢てか、主人は留守か。

寂寞破れて活物一個、矢の如くに駈け來る魔佗羅、小川の前にて立止まり、舊來し道を振返りて、頻りに尾を掉りて迎ふる主、沖野お浪は謀詐りて、二人の武士をぎうといはせ、八方へ懸けたる捕吏の網を、漸く潛りて今此處に、兄、彌左衛門が住居の戸口。がたりと開けてひらりと飛込み、ぴたりと閉めて稍ありて、細目に開きて戸表を覗ひ、後を跟けたる捕吏も無ければ、再び鎖して引込みけり。魔佗羅は藪を潛りて失せぬ。

之は此邊に住居致す表德と申す佛師でござる、某ちと思ふ仔細のあつて、夜な夜な高妙寺へ參詣に因り、念無く夜を更してござる。先づ急いで歸らう。我庵は、都の巽鹿ぞ住むウ、世にもうかうかと歩行たれば、これはいかなこと行過ぎてござる、えゝいやとな。と冠が、馴れた事とて雜作無く、一足飛ばして川を越え、大戸に手を懸けがたりがッたり、はて妙だ、と小首を傾け、明放して出掛けたに、內より鎖して開かざるは、むゝ取られる心配無き程の所帶、明巢と思し召して寢にござつたな。盜人に〆出しを喰ふ彌左が宿と、後世にも年代記に出さうなことぢや、と苦笑ひして佇む所へ、藪をばさ〳〵飛來る犬、こりや魔佗羅か、と呼ぶ聲に、うわつと尾を掉り裾に纏はる。

さては奥方見えたわい。むゝ、と點頭き彌左衛門、今歸宅た、と戸を叩けば、家内に物音立上る、沖野の妻は勝手が知れず、眞暗闇を手探りに、浮足するは愈それ、お浪かと呼ぶ、兄様かえ。好く來た、お變りも無いか、といひつゝ、戸を隔てては屆くまい明けぬか、といへば、何處が何やら足許が知れぬ。といふ。那邊に居る、おゝ其れからは土間になる、氣を注けぬと落ぬるぞ氣を注けよ、といふ中に、待遠かつた兄様、と戸を開けて見合す顔、何時から來て居た！待たせて氣の毒、これはいかなこと家内は闇ぢや。

和兄もまあ物騒な、戸じまりも爲ずに何處へと云へば、何さ盗られる物も無い、太平無事な御住居、盗人が這入ば却て愚癡を置いて行く。先づ座に着いて談話ましよ、燈も照射さずに寢て居たのか、端無いお女中だ。さりとて留守に火の氣は無し、燧石の在處固より知れず、魔佗羅が傍に守ればこそうつら〳〵としたるなれ、さも無くば一時も、おつちり居られる家では無い、ほんに鼠も居やせぬぞえ。其は仰無くと御道理、ぽんとお手が鳴る、よしか、召ましたか、と侍婢が來る。あのお茶煙草盆持つて來や。承つてござりまする。などと言ふ消光で無いわい。再かいな嫌味ばかり何時來てもそんなことを、義理ある大切な兄様故、家へお引取申そといへば、嫌ぢやというてお強情なされ斯した貧乏はお前の勝手だ。左様なに情無ういうて呉れるにも當らねえ、いや、立説話で麻痺を切した、さゝ御客様御入來。と煤け行燈に火を照射し、柴折燻べて大胡坐、

火影に熟々お浪を見れば、膝も崩さず整然として、心丈夫に見ゆれども、白綸子の襟濕然と涙の雨の村時雨、觸れば冷たし絹布の袂、瞼も腫れて重たげなり、始終は知れど知らぬ顔、彌左衛門故意と莞爾々々、おらあ腹が空いて來た、夜半の茶漬は天下一品、將軍様も御存じ無し、阿浪お前は喰はねえか。いえ、廢止ます妾は喰べぬ。いや御生育柄尋常ぢや、然らばそれにて御覽なされ、と膳取出さむと立懸る、兄様妾が出して上げます。おい、其は、憚ながらぢや。啊呀々々此が御膳かえ。今始まつた事でも無いに、お茱は何を、探せど無し。さあれば久々で逢うた故か、お前の顔が珍敷い一寸々々と斯う見ては一口宛旨く食ふ奴ぢやと、ぢつと見詰められて面羞く、あれ曠がましと横を向く。此奴は、しをらしい、大笑ひだ、高い聲ではいはれぬが俺お前にぞつこん惚れた、いやさ、七兩二分は工面が出來ぬが、首は要らない眞實だ。おつと言ふまい兄妹は名ばかり、死んだ媽々の妹なら、縁の無い衆生にあらず、と眞面目になられて阿浪は呆れ、餘りのことに物をも言はぬを、矢庭に手首を握りければ、えゝお串戯で無い程がある、と怒氣滿面に溢るゝを、見澄まして今一息……なほ懲ずまにしなだれ懸れば阿浪堪へず赫として、慮外すると手は見せぬ、猥な兄は縁切つた！　それやこそ言はしてやつたるは、何とお浪、定めて言惡かつたであろ。今夜來たのは其一言を言ひに來たのであらうな、と圖星を指されて驚く阿浪、冠席を避けて座を正し、其方、世を忍ぶ身となり、我に縁邊ゆゑの連累懸けじと、其厚情忝なし、な

れど其には及ばぬこと、如何やうなことしようとも、此彌左は頓着無く、思案に餘ることあらば人殺でも、盜人でも好いは相談に乘つて遣る、と自若としたる顏構、ゆつさりともせぬ賴母しさ。そんなら總てを御存じか、兄樣小萩は仕損じて、夫は其夜捕へられ、妾は屋敷に謹慎中、經師ケ谷の地獄牢へ送らるゝと洩聞いて、奪取らむと近寄りしが、運惡く見顯され、やう〳〵に切拔けたる、命を惜むにあらねども、一度彼牢に入れられては、迚も助りはせぬ間、見惡き餓死させますより、思切つて刃物を進らせ、自殺を進申さむため、牢破りの罪を犯さむ覺悟。緣者というては兄樣ばかり、今宵をお顏の見納に、緣を斷つてと言ひ兼ねしがよく察して下された。と流石氣丈の女とて、聲は立てねど愁歎の門口にて小聲になり、御免なせえ、傳次です。每度ながら御邪魔を、とぞんざいな物言ひも、可成的禮を厚くして、長者を音訪ふ二人連、やあ又しても一揆の精靈が遣つて來た、面倒なと顏さへ見せず。主人こと白河へ夜船を漕ぎに、唯今は留守でござる。と冠自身に答ふれば、血氣の卯之助堪へ兼ね、踏込んで逢うて遣る、とはやるを止めて猿の傳次、こりや一思案せにやならねえ。

二十五

怒濤夢を驚かし腸氷る夜は涙、猿叫びて肉動き、鼯鼠鳴きて血を絞る、晝猶暗き幽僻地、經

師ケ谷の土の牢、俗に地獄と名附たり。身の毛の戰慄つ鐵格子、中に暗澹の幽冥界、猛獸が穿ちたる山の半腹の疵口を、其儘用るて牢とすれば、巖の骨の銳きに、觸らば五體を裂かむ。したゝり落る岩淸水の血液の如く腥きは、我のみならで他の人の、屍骸を委に殘せばなり。墮地獄の苦艱活きながら銅汁を啜る罪人は、十惡の惡魔か、又は、親を屠りし梟賊か、噫否、東家譜代の忠臣、沖野新十郎の大厄難。

牢を去ること七八間、枝より枝に丸太を渡し、蓆を懸けて雨避の、假に造れる番小屋あり。妻を賣つて博奕を爲せし者、親を路頭に迷はせて女郎買をしたる者、二人して之を守る。通常の人の情を知るものには、彼罪人が呻吟き續けて、遂には餓ゑて死ぬるまで到底見張の出來ねばならむ。さりながら此獄は、堅牢類比無きものゆゑ、鼎を扛ぐる腕にても、角を裂く力にても、得て破らむこと成難ければ、よし番卒のあらずとも遁げ出づるの憂は無きも、萬一囚人の妻孥の類が潛かに食物を貢がむかとて、警衞最嚴密なり。

此恐るべき界隈へは、木樵草刈相警め怪我にも近づく者無きに、今日しも時候ならぬ東風の音信、晨朝より一人の女、番小屋を纔かに隔てたる谷間に柴を刈りて居り、鎌を持つ手のしろ〴〵と爪外づれの尋常さ。かゝる類に見懸けぬ艶婦、窶せる賤の姿にも、八口より洩るゝ香を、二人の番卒嗅ぎ附けて、無體に小屋へ引摺込み、きやあ〳〵言はせて噪動きしが、蓆の戸帳深く下り

て、後には音も無くなりけり。

然る時、うら悲しげに犬の鳴く聲、纖々に、山一つ彼方の谺に響きて忽然と爰に顯はれたるお浪が愛犬、例の魔佗羅、時下小屋の戸つと擧げて内より密かにお浪は出でぬ。紅葉の錦に立向ふ、襤褸の袖の恥かしや、夫が顔の見納めに、嚴禁を犯して女の單身、柴刈る者に姿を變へて、故意と番卒の目に懸り、あはれ指でも觸れさすまじき主ある身ながら袖引かれ、よしや情は賣らずとも、あるまじき色の手術、爲まじきことを忍びてして、さて救はるべき夫かは。唯一目顏見たし見た上に、醜き餓死すさまじく舌嚙んで狂死は一分立たぬ恥辱なれば、武士の最期を天晴爲せむ、と雪の懷夏寒き、懷劍一口隱し持つ、胸中汲んで知られたり。

阿浪は我知らず頰に傳ふ涙をば、袖に拭ひて衣紋を繕ひ、帶の結目とんと叩き、屹と振返れば、我酌に盛潰されて番人が大蛇の如き鼾に點首き、する〳〵と浮足して牢屋の前に礑と倒れ、漸くに伸上りて鐵格子に縋りて泣きぬ。

旦那樣、と呼びて差覗けど、中は眞暗黑白も分かず耳押當てれば呻吟く聲あり。魔佗羅、見張を。と聲の下、つと駈離れて岩頭に爪を磨ぎ、邪魔物來れ、裂かむず眼光、四邊はよし、と心を落着け、旦那樣、旦那樣。と忍音に力を籠むれば稍聞き附けて蠢き出づる沖野新十郎裏枯たる聲して、だ……だ誰だ何者だ。浪……浪が御見舞申しました。

其と聞くより新十郎投げたらむ樣に身を起して格子を洩るゝ眞蒼き顏、妻さへこれは！と見違へたるまで憔悴果てて見る影無ければ、嘸な！とばかり喉塞がり、言はましことも得言はずして餘りのことには涙も出でず。新十郎切なき呼息をほと吐きて、用は何だ……と素氣無し、お顏が見たうて見たうて、と言はせも果てず眼を怒らし、五百石の武士だ。餓死した澁面は見られまいと誓つて居るに其方は妻の身を以て餓鬼道面を見に來たか、こゝな馬鹿め、と睨附くれば、阿浪莞爾と笑を含んで、お嬉しや、其御心なら、浪が來たのは此ゆゑに、と戰慄きながら取出すは膚に溫めし誠心も冷たき風に玉散る短刀。其と見るより新十郎立たれぬ腰に雀躍して、こは難有し忝なし阿浪何にも言はぬぞよ。とさも心地好げにつと笑みし、歎かるゝより猶苛き、妻は心を勵まして、左手に持替へ格子の穴より眼を瞑りて差込めば、新十郎短刀受取りつゝ、其手を引くな。と聲懸けて流石に武士の意氣地にも此が最後と思ふにぞ眞白き阿浪が手首を取りて、おいつとばかり握り緊め、あゝ、痩せさした堪忍せい。と最も冷たき手の甲に熱き涙を注がれて、五體微塵に碎くるばかり身の節々も離るゝ心地、氣丈の女も最う堪らずわッと泣く聲——これ人は居らぬか。

天晴戰場に毛色好き敵と引組んで、弓折れ力窮る時、末世に殘す武士の龜鑑、見事に切るべき腹なるを、岩永が爲めに幽囚され食に餓ゑて死せむこと、疊の上にて死ぬるより猶一世の恥辱ぞと、遺恨遣る方なかりしに、人の及ばぬ阿浪が膽力、斯ほどの大難に取亂さず、夫に自殺せよやとて、手づから匕首を齎らせし、度胸を見込みて頼み置く、我今死なば念佛申すな、經も讀ますな、回向は嫌だ。藻に縋りて水中に浮ぶより一層危き東殿の御身の上、蔭になつて御扶け申し岩永の首捻切つて、我に手向けて呉れむ時こそ、九天に浮ぶべけれ。唯頼む此事を、子孫無き身の遺言無し。さらばだ！最後を急がむと、袖を拂ひて大肌脱ぎ、拳少々鈍りたれど、など十文字に切れざらむ。南無正八幡大菩薩、女房眼を閉げ、といふまゝに、岩角に背を凭たせ、血汐に颯と一文字！

此世の縁は切果たり。彼世で逢はむ夫婦は三世、後れはせじと半狂亂、巖に乳の下裂ざかむと、つと立上る疾風一陣、裾を蹴へて引止めたる魔佗羅の鳴く聲鬼啾々。

血聲幽かに新十郎、むゝ魔佗羅能く止めた。お浪、狼狽たる大白癡、仇敵の命ある間は幽冥の侶伴爲せ難し、我亡魂も死なぬぞ、と言畢りて永く逝きぬ。罷り爰に出たるは、岩永が腹臣中村大六、一點張の武骨者、大道一杯の幅つた面、礫を蹴飛ばし大手を振りて伴人も無く唯一人、武藏の内命を請けて沖野新十郎が様子見屆け、女を刺客に執權を討たむとせしは唯一人の分別でな

い、同意の者幾人か其姓名を白狀さば牢から出して武士らしく切腹をさして呉れう、言はねば此儘乾殺し末代迄の恥を思へと、斯く言傳ふるお使番。地獄牢間近になりて、ぎやつといふ聲聞えたるに、何事やらむとすた〳〵と駈附け見れば、番人二人ともだあとなりて反返りたる眞中に、血だらけの鎌を逆手に取りたる婦人、我行く跫音に、周章て、遁げむとする矢先に出逢ひ、汝動くな、と追懸けて、女の弱き足に追附き、えゝッと伸す猿臂の下、潛り拔けて後にすつくり。頸へ閃く弦月を、刀の鍔にて丁と受留め、何を小癪な。と顔を見れば、覺ある阿浪が姿を窶せるなり、番所破りの人殺し、今又嚴禁を犯したさうな。主人岩永風雨につけて寢覺を惡がる此婦人！上無き捕物ござんなれ。と木剣仕込みの鐵棒腕、八町に開きて組まむとす。

見もし聞きもし知人の、兼てより恐怖を抱く强の者が、一歩を隔てて吼るなれば、手に餘る敵手と思ふほど、心の怯けて呼吸はずみ、總身したゝ汗に濡れ、白眼み合ふ内動ともすれば、渠が眼光に射窘められ、はあ〳〵胸の轟けど、一世の大事と心を手に籠め、汗を握れる草刈鎌、大六流石侮らず。手捕にせむとて得物は取らねど、厘毛隙無き五體は固く、石を斬るまで腕冴えざる、阿浪は愈々打込み難きを思ひ切つて眞闇三寶。そりや急込でござつたわえ、と大六眼早く引外づし、ひよいと寄りつゝ手を扼るに、あれと解くを、やッと一打、脈を打たれて二の腕麻痺れ、思はずはたり鎌を落せば、小禽を占めた、と揉倒す。さはさせまじと蹈張るに元結切れて亂髪、銀

の笄散る花を、此山風や鷲掴み芝生に捏と捻伏せつゝ押へて手早く繰出す下緒の蛇蟠きて纏ひ附かむとしてければ、えゝ無念やと言ふ唇も、砂利を前齒に嚙みたる時、大六苦と叫びて手を弛むるに、弓矢八幡撥ね返して、ト見れば髷節に爪を懸けて、頸首嚙まむず魔佗羅の形態、得たりと阿浪駈け出せば、怒の炎顏に焚やして赤熊の如く中村大六、苛つて犬を蹴て飛ばし、驀らに追ひ迫りて、帶の結目引摑めば、空解けしたる繻子の帶、ずる〳〵と手に殘りて、女はお先へつういと行く。

べつたり尻餅、怒は十倍、ましぐらに颯と駈け、踏むは斷崖傍は山、前は蒼海漫々たる、こゝ稻村のがけ續き、際どき處に追詰めて、袋の物を取出さんと袂を犇と取押へれば、ひらり脫ぎたる兩の袖、紅裏風に飜る花か霞の肌襦袢。脫ぎ棄てたる上着を手に、力負して大六たじ〳〵、一足退ると瞬く間に阿浪細紐ぐいと結んで、足の爪先踏揃へ、南無と一聲踵を空、羽叩きひら〳〵駈違ふ鶚の下に淘と音あり。途端にぎいと漁船一艘、水を切つてついと出る。上なる大六海面覗けば、舷を枕にして、眞仰に倒れたる阿浪を載せて漁夫一人、大工殿より木挽は憎や、よい〳〵と艪拍子取りて、端舸の輕裝矢の如く男波に隱れ女波に泛ぶと、目前に見てぢだんだ踏み、美人の體溫可惜着物を、滅利々々と引裂きたるは、水心無き男ぞかし。

二十七

るほどに猿の傳次は、夜一夜も眠らぬ迄、冠彌左衞門に加擔さすべき計略を、あゝでも無い斯うでも無し。種々に苦心しつ。組みたる腕を解くと齊しく、膝を叩ける妙案あり。試に卯之助に言うて聞かせば、其ぞ究竟と點首くにぞ、打てば響く如く其夜の中に、長谷の町盡から村盡まで、すらりと行渡りて愈々翌朝實地に行懸る。

東雲の雲ほつかりと龜裂破れて、遠山の巓に刷目の如く薄紫、濃く立籠むる朝霧に、人を包みて朦朧と、影法師の如き者ども、三々五々打群れて西より北南より、東を眺めて怨めしげに、旭は吾人に艱難を告り示すか、と天道を恨み申し、乾しあへぬ襤褸を絞りの手拭目深き、同じ扮裝の濠人足。急ぐとせねど刻限に後れては、又笞をや受くべきと、己が心に追立てられて、建長寺の明六つを聞きて齊しく集りたる、數百の百姓いざ之より工事に懸るといふ前に、言ひ合せたる傳次の謀計、はた〳〵と手拍をして、萬口一聲——冠來い！

冠來い、と土を掘れば、冠來い、と掻込みて、冠來い、ともつこを擔ぎ、冠來い、と歩行き出し、總て一擧手一投足、冠來い、と鍬を上げて、下ろす時にも、冠來い。

音調次第に調ひて、一種異樣の節を附し、拍子に乘地と働けば、泣き〳〵工事を爲たりし時よ

り、唯何と無く發奮の出て來て、氣競ひ懸けたる人足等。不平と怨恨の鬱勃して、胸一杯に滿ちたるを、聲を吐き出す氣持の好さと、夢中になりてわめく聲、殺氣の凝りたる悲歎の楚歌、泣くが如く怨むが如く、十町遠くに響き渡りて魔の與してか物凄さに、耳を掩はぬ婦女子は無し。

軈て冠に滅さるべき前兆と今は知るよし無きも、蟲が知らして爭はれぬもの、石村五兵衛何と無く冠來いが氣に懸り、耳を貫く如くに思はれ、胸中大に穩かならず、不快嫌惡の念に堪へで、此聲を聞くほどならば、一層のこと外濠は休止にせむとまで弱りけるが、其では目的が外れると慾といふものは恐しい、素張斷念る譯にも行かぬは、さても〳〵因業な。

二日三日と日を重ねて冠來いの火の手盛に、石村耐忍なくなりて、權力にて壓倒し口に錠を鎖して遣らむと、苛酷掟にて禁ずれど、此にこそ人足一統撲懲しても聞くものか、石村厭ふと知りてより、一段と高まる、冠來い！

工事を休止るか左もなくば鑿殺にせざるよりは敢て止まる景色も無きに、親子屈託の額を集めて、さらば流傳の源を堰止めよ、と見張の士卒に言ひ含め、何者が言初めて、冠來い、を唱ふるぞと手嚴しく問糺せば、其は彼人と、十指の指すは實に衆目の見る處、群鷄の中に一鶴と初手から目立ちし俠客肌、色淺黑く痩ぎすにて眼の光凄じき、辨慶縞の廣袖は、別人ならぬ傳次なり。

いざうれ其奴を引捕へて目に物見せよ、と五兵衛自から座蒲團離れて戶外に出懸け、宋丸を立

てさせ指揮をすれば、足輕等十人ばかり多勢の中より探し出して今しも土を掘居たる、傳次、神妙に彼方へ參れ。

傳次、私かね。應手前だ。ふむ而して、用といふは。來さへすりや分解ことだ。ても無體なと鍬を棄つれば、愚圖々々すると引立てるとお定の取繩沙汰。なに其にや及ばねえ、と取圍まれてびくともせず手拭取出し肩の邊をはた〳〵と拂ひながら、へい、お連なされまし、と紮げたる裾を下ろして落着澄ます。おゝ好い覺悟だ。さあ來い。と前後を擁して連行くを、靈山卯之助遠方より見て、一散に駈附ければ、むら〳〵哄と總立ちに小峰鍛瀧登、子分の大勢何の默つて傍觀べき、あれ奪返せと行手を斷てば、それ邪魔するは追拂へと、侍ども馳加はり、陰々となる空模樣血の雨降らむとしたりしを、猿の傳次大音に、えゝ騷ぐない、靜まれ〳〵抵抗は恐多し、卯之樣宥めて退かしなせえ。と腹を敎ふる眼を讀みて、靈山手を上げ押止め、指一本でも出すべからず、少々思はくのあることだ控へやツといふ。なまなかなる事仕出來して却つて迷惑懸けてはぶまと、其なりけりに手を束ねて口惜紛れのいかつ聲、口を揃へて、冠來い。

あれを言はせるは汝ださうな、如何いふ趣意だ其を言へ。と石村五兵衛威丈高に突立ちて傳次を前へ引据たり。此を見せて性懲を附けさせむと故意と大道の眞中ゆゑ、堵の如く集る人足近くは寄らせず足輕ども棒突立てて叱つ叱つと精嚴しく警戒す。知らねえ、聞くな、何にも言はぬ。

と強情を張通して開かぬ口を、捻返しても開けさせむ、と辻の傍示杭を間に合せの刑具、傳次を後手に縛りて、頭の毛を取りて伏せ、手當り任せにどしん。ぴしやり。皮の破れて身體中血塗れになる時分は、一人として眼を開けて見たる者なし。拷問飽みたる石村、狼の餌食になれと、其儘放棄りて歸館間遲しと、卯之助駈寄りて、がつくりとなる傳次が頭を膝枕させて、水だ水だ、と口早に急き立てば、おつと合點して乾兒大勢土用の蚯蚓に蟻の如く筋を揉むやら撫るやら、親分死んで下さるな、と中には泣聲に成るもあり。傳次赫と眼を開き、因業老耄覺えて居れ。と縛れたる拳を握り、皆居るか、と聲枯れたり。あい卯之助も爰に居る。ふむ繩を解くな、血も洗ふな、此儘我を戸板に載せて、冠が家へ擔ぎ込め！

二十八

落つる葉の音聞く耳、の月澄みて、浮世の闇の外なれば、心に懸る雲も無し。南無妙法蓮華經普門品第二十五の卷を、孤燈の下に繰廣げて、靈山の是空和尚、若惡獸圍繞利牙爪可怖と小聲にて、念彼。と讀懸けたる後の襖すらりと開け、和尚觀念。と呼ばはる聲に、自若として振返れば、何時の間に忍びけむ冠彌左衛門、明晃々たる抜身上段に振翳して、二つにせむず身の構、顧る是空と面を合して、正に斯る時什麼、と問ふ。遁げること〳〵。と言下に說けば、八方より圍まれな

ば？と疊掛けるを、死地に入つて避くべしと答ふ。既に既に危くば？　ほゝ、圖星へ持つて來たな、然る時んば觀音力觀音力と答ふれば、彌左衛門刀を納めて莞爾々々と笑ひ懸け、其處ぢやて和尚殿聞いて下つし。

他國へは走られず、身を死地に落して濠を掘れど猶以て遁れ難く、遂切迫詰つて長谷の百姓、一心になつて己に來て呉れ、冠來い。と言ひ出した。聊にても遁路のある間は、烏合の多人數心をも一纏めに進退一致と參らぬゆゑ、二三の男が賴みに來るは、刎ね附けて遣つたるが、今では時機も熟したなり、彼等は首の座に坐りて、白刃頭に望むの境遇、此處で念ずれば彼觀音樣さへ、氣紛れに飛出して扶け給ふとしてある。さすれば血のある人間は猶更ぢや、喃和尚、彌左も出懸ずばなるめえね。とて屹と相手の顏を見る。

是空笑うて、これ〳〵彌左殿、異う言ひ廻して烟に捲かうとはならぬならぬ。さりとは業の滅せぬ親仁、若い者かぶれに虎は死してもと、名を殘さうの野心と見たが僻目であるまい。わツと一騷動遣るも陽氣で好からう。無鐵砲に遣附けろ〳〵、といへば、彌左衛門髷の附根を指二本で撮み、別に左樣いふ譯でも無いが。はん、餘り無きことも有るまい。はて意地惡く曰ふな、傳次が己の爲に骨をも碎いた、卯之助附添ひにて戸板で背負込みと遣りをつて、親仁に否は言はせねえ。和尚聞き〳〵、ふむ、はゝあ飯粒奴が鯛殿を釣つたるかな。いかさま木石にあらざるよりは

だ。何もこれ道を以て衆を教ふると劍を以て人を活すとの相違、先づ肖たり似たりの中、女も男も同じ親なり。介意ずと遣りなさい。軍用と名附けて金が欲くば和尚が臍繰三十兩少許はある。と氣輕に立上りて用箪笥の曳出しをがた〳〵。

根が窮して起す亂、金は不用。と冠手を振れば、何道立ちたるついで、此を返さう。と出して渡す袱紗包みは、彌左衛門が親重代の重寶。系圖を開きて中興の祖先は、何某卿といへる御公家なりしが、末民間に下りても其の冠を失はざる什物に因みて祖父の代に姓を冠と替へしといふ。彌左衛門禪門に歸依して捨世の心深く、是空に交り淺からねば、發心の驗に曰附の什物を捨てて靈山に納めたるを、今又浮世に旅立の餞別。

冠押戴き、又娑婆へ生れまするわ。と打笑みて懷に納むれば、是空膝を寄せて、一揆はお前一人で好からう。勿論と平然たり。あの二人は？　此の方へ差向ける、と二本差を仕方で見する。むゝゝと點首き、いかい功德だ、其が好い〳〵。彼子は實際鋭鎌の遺子だ。死んだ利平といふは談話せる相手で己と懇意、妻の渚といふも心懸の好い者にて能く存じて居つた。去ぬる年腰越へ托鉢に參り、一人でぽか〳〵朝比奈の切通しへ懸る、と首の無き女襦袢一枚に剝かれて數ケ所の切疵、疵口破れて脇腹から今生れたといふ嬰兒ひく〳〵と動く。和尚當時讀本中の人物と成澄して、件の着物片袖を引切つて嬰兒を包み、恥を隱して遣らうずと衣を脫ぎて死骸をばくるりと卷

き、よいと背負、として歸る道、鋭鎌夫婦に相談せむと立寄ると大騷動、今岩永が捕吏を向けて御新造は自殺、孕婦であつた死骸が見えぬと村の者に聞いて、違ひなし、拙僧の背にお在のが其ぢや。引摺行きて滅多切りの首を取りとやりやあがつた、殘酷をする奴等、此子物にせうと面倒ながら世話をしたのが卯之助。手は利くなり、氣質は好いなり、大事に懸けて置くを傳次奴が哄誘かしてあの通り。猿め、時々智慧を出して惡い癖ぢや、お前まで一杯食つた、わはゝゝ。と高笑ひ。斯うぢやに因つて岩永は卯之助に取つて當の讐敵、一方の功名は小僧に讓つて遣らつしやい、いや餘計なことを、と又笑ふ。

冠再度點首きて、委細承知致せり。我が石村を滅すは所謂暴を以つて暴に替ふるの所業、罪を論ずれば最死なり、末賴母敷壯佼に此事は爲せたく無し。引替へて岩永を討つは相模一國の爲、太守への忠、和尚御存じならむ岩永が惡逆、頃日詐りて東殿を素引出し權燈寺の一間に幽したれば、遠からず失ふは一定。此には、我が方寸に一山あり。孤忠に憤死せし沖野新十郎が寡婦は亡妻の妹、此間地獄牢に忍び行きて夫の思を遂さし、敵に逐はれて海に投ぜしを救ひ得て現在舍藏置けり。女は精細に氣の附く者、密使には打つて附けの役、忍んで權燈寺に行かしめ、第一、殿に不時の危急を遁れ給ふべき術を告げ、次に、岩永追討の墨附を靈山の爲めに戴かしむべし。其さへ濟まば直ちに遣り遂げる。其節は又和尚殿の厄介になるのが多少はある、賴みます。好いと

も好いとも。然らば此にて。冠が永き別離を送り出す是空縁側に爪立ちて其影疾走無邊方、見えずなりて座に復し、好漢珠玉となりて破碎るか。と打呟きつゝ經を取り、蚖蛇又蝮蝎氣毒煙火燃、と次の偈を誦して憮然たり。

二十九

水は烟りて白く森は濕りて蒼く、田畠山川一面に蒼隈の俳優の顏、秋の末つ方は梢ばかりの月夜の話柄なり。葉裏は闇き木下蔭よりぬつと出でたる親仁あり、四隣人靜まりて世には唯我の誰憚からむ。材木座の裏田圃を、悠々と歩み行く、足の輕さは身體の達者、歩を移すこと三町有餘、忽然と姿隱るれば、小田へ飛込む蛙の音、二三度どぶんといふ間に、丈より高き薄叢を通り過ぎて、再び顯れ出たるが、十歩ばかり行き懸けて、不圖根の生えたらむ樣に立止まりたる、處は丁度若宮口、左右に植ゑたる往還松原、一本目には池の松、二本目に庭の松、三本目と數讀みて四本目は、死出旅松、死神の此木に住めりと名高きは、いかさま幹に大洞ありて、蛇の巢やらむ氣味惡し。首縊る者多ければ宇宙に彷徨ふ遊魂を、濟度に建立の石地藏あり。親仁、此に凭懸りて、すくりと突立ち、月に向つて赫と眼を開き、ぐる〳〵と瞳動きて、仰ぎ見たる北方に燦然と輝く明星の、今一個あらむには、斯眼に適度眼鏡ならむか。見たるは何ぞ——一宇の棟、屋根の瓦

の重なり重なり波を描きて、月の光に銀色輝く、此れぞ雪の下の白銀と渾名されたる黃金の藏、幾十萬兩の番人なる石村五兵衞が住家まで、一町不足の路程なり。これを睥睨みて稍暫時は、瞬もせざりしが、眦きりゝと眉動きて、金も爍けるわ、家をも燒くわ、火だ火だ！と呟きざま、皓く細き前齒を見せて、にたりと笑みて、首を縮めて、聳かしたる兩の肩には、天晴三座の寶山も、背負うて起つべき風采なりし、俄にがらりと相好崩して、地藏の眉毛、文珠の眼、蟲も殺さぬ柔和の面相、背丈もずつと低まりて、平然としたる顏を見れば、喝乎此冠彌左衞門！

踵を返して海岸通を、急ぎ足に……

＊　＊　＊

（月落ちて星ばかり、異だね。）蝸牛の家を殼になして飄然と立去りたる、冠彌左衞門が材木座の住居へ、ほんの一足違ひにて洪と寄せたる一隊の捕吏あり。石村五兵衞も一廉の分別男、捕へては放ちやるまじかりし傳次を、撲放しにして態と引取り、細作を放ちて其進退を窺はしむれば、先度に懲りて此度こそは利腕に糾を懸けたる尨犬と渾名の丹藏、五兵衞祕藏の探索方。首尾好く嗅出して復命せしにて、冠來いの所以は知れたり。人違ひにても怪しうはあらじ、引縛りて問糺せ、似た名の佛師は關係ありと、子息次郎藏手勢を統べて、配下にあらぬ他村の者ゆゑ、遠慮して夜を待ち、潛行きて犇々と押寄せ、小屋懸の如き一軒家を、多人數にて圍むなれば二卷半ぞ卷いたりける。

毒蛇の頭むく〳〵と動きて、眞先に石村次郎藏、火事だ火事だ、と戸を叩きてぞろ〳〵と込入れば、破障子に灯影映射て、さも人の居るべき氣勢、得たり應、と障子に手を懸け、がアたりと明けたる鼻の前へ芬と來る香の匂ひ、遁れぬ處と自殺をしたか、殊勝な奴と見れば人無し。ありこそ風を喰つたり、雪隱探せと、見廻せば、綺麗に掃除したる四疊ばかりの一間塵一ッ葉も無く、秩序好く取片附け、爐にはかん〳〵火を焙して、茶釜の湯ちんと沸り、塗盆に茶碗を伏せて、遠方御苦勞お茶でも食せ、とあるを見て、一同舌を吐きて呆氣に取られ悄々歸宅て隱して濟まねば、不得止、斯る出し拔かれの不覺、愚弄れの沒面目を、有の儘冷汗にて談せば、火の如くに怒ると思ひの外、五兵衞がた〳〵と震ひ出し、蒲團を引被りて大頭痛。

○黑幕切り落して作者申上げます。二十九回の書出しより次回のお浪山籠りの處まで、打通して同じ夜の中にありたる談話、時間の相違と事實の前後は好く察して御覽下さい。冠地藏に凭れてにつたりの思入れの時刻は、捕吏復命して石村ぶる〳〵の時刻と丁度同時と、斯樣にお讀下さらば皆樣にも面白くて御損は無く、作者ことも大だすかり。

死出松より踵を返して海岸通を眞直に左へ折れ、ひたと犬の鳴く町を幾つか過りて、寂靜まりたる旅籠屋の軒下迄來りたる冠を、待構へてありけむ、跫音を聞くと其儘、薪屋の前に積重ねたる薪の蔭に踞り居る俠客、すらりと背の高きが、ついと立出づるに心置きて、彌左衞門立止りて

すかし見るを、私だ〳〵。と言うて頰被を取り退けて、肩へと掛手拭。傳次か。唯々、と揉手をしながら、好くこそ、と腰を屈め、後を向きて、光來た〳〵、と呼ばはれば、居酒屋の戸の節穴にさす燈火の影、ぎいと戸を開けて顏を出す靈山卯之助、其と見てつか〳〵と進み寄る。後に續きて十四五人の博徒、二列になりて兩側に居流れたり。冠手眞似にて一六を見せ、今夜も又遣つて居たな。傳次鳥渡小指にて鬢を搔き、否もうほんの內端唯心遣りの袁彥道。靈山阿主も覺えたか。唯々、否 私は見るばかり、と俯向きて極りの惡相。

冠苦笑して、さて〳〵暢氣な奴等かな。石村八方に手を廻し、お前と俺が目指れ人だ。一先風を避けざあなるめえ、皆を集めろ。といふ口に從うて動く手足は、五郎組の壯佼ども。

三十

差圖の下に四方へ手を分け彼方此方を走り繞りて百姓家の蔀を叩き、何やらぶらりと觸廻して舊の處に歸り、冠を中に擁して、一團になりて程近き景政の御靈神社の境內へ入り行きたる後より、今時分夜の明けたる如く一軒も殘らず大戸を開けてぞろ〳〵と出たわ、出たわ。少時が間といふものは絡繹織るが如し。往來の人の波は洪と神社の境內に落合ふや否やに寂寞と靜り返りて、咳の音をも立てず、斯くて爲したる事件は所謂天機を洩さぬ其なり。小半時ばかり經頃何や

らむ動揺き渡りて、鎌と懸けるを倉と請けて、鎌、倉。鎌、倉。と口々に言交はして多人數の中より唯三人颯と拔け出して何處へやら四角曲りて見えずなりける。後に蜘蛛の子ちらばら〳〵。

人の通らぬ山路を仙人ならぬ、婦一人、谷間の栗の木の下を步行み行くに、觸りて落つる玉笹の、雪なす脛を裳高に端折りて、月夜なれば踏みも迷はず、しいをりと行く柳腰は荊棘も避けて通しぬ。四五間離れて素直に跟いて行く飼犬は、大笊充滿に種々の果實を拾ひたるを首に懸けたる魔佗羅、是こそ道はずとも知れたる阿浪は、面瘦せてめつきり窶れたれど、何處で御目に懸りてもあゝ艶麗かな。

草の間を流るゝ谷川の音に步行を止めて、水際に踞ひつゝ、袂を啣へて泥の手を洗ひ、見るとはなしにさても〳〵と言度浮世の、薄命を一人で背負へばよろ〳〵と傍の岩に腰を投懸け、草臥たる足を伸ばして、眉に亂懸る前髪懊惱く、西施顰に櫛の齒に搔上げて、ぢつと月を見詰めたるまゝ、兄樣が待遠し。最來さうな物來さうな物と、三日三晩は空しく待ちぬ。地獄牢に比較ればこそ數ならぬ、名の知れぬ鳥の鳴く此山奧に、岩角を枕に一目も睡らぬ耳には、絕えず狼の呻吟を聞く。夜寒に衣薄けれど、煙を揚げむは麓なる敵の番所に忌憚あれば、落葉を燒きて濕勝の、袖を乾すべき術も無く、炊がぬ米に、流の水、これにて命を繫ぐ身の、肉肥えざれば、狼の不味

餌食になりやせむ、と歎つぞさすが女氣なる。されども冠が義妹にて亡新十郎の妻ぞかし。ナニこれしきを、と氣を替へて、目的の敵は岩永が、錦の蒲團に座を構へて、珍味を嘗むるに比較ては山に棲みて人を屠る狼如きはものかは、と彌猛心に移りなりて、魔佗羅々々と呼ぶ聲に、岩に擦附き足に纏はる、頸を撫でつゝ淋しく笑ひ、わツと言へ。ふ、ふ、好肯分るな、それ此を、と腰帶の片端引出して、綾せば狂うて飛附くを、推遣つたり、抱いて見たり。夫捕へられし砌より我手で餌は與へねど、影の形に添ふ如く何時も傍に從ひて、言ふことも分解さうな。我が爲す業は何事も半は汝の働なり。今にも來べき兄上と引違へて、遠い處へ行くのぢやが、又一所に來て手傳うて呉るかえ。吻々點首かおゝ嬉し。さてもし汝が先へ死んだら地藏樣を建立てやる。承知かい〳〵、と前足取つて引上げて膝へ顎を載せて遣り、仕損じて妾が死んだらこれ如何して呉れる氣ぞ。可愛い奴よ。と搔撫でて、えゝ、如何して呉れると唯串戲、何の氣も無く、言聞かして見詰むれば、魔佗羅尾を伏せ耳を低れ猛き眼に——氣の精なるべし——ほろりとしたる形容に思はず悚と頸脚から、冷水浴せられたる如く、毛孔忽ち粟立つに興を覺して茫然たる時、魔佗羅忽ち耳欹て細く吠えたる聲は、常例人の來るを知らする聲なり。それ見ておいで、と命ふ間も無く、一飛びにて姿は見えず。阿浪は、つと身を起して、此谷川の其其處に、とある山懷の洞穴へ、這入口は女も身幅をすぼむれど、奧は十人團欒し得べき究竟の隱場所と、穴居の古跡の、名所圖會

には洩れたるを、蓋し冠が掘出しものなり。

却説以前の三人は今山道を歩行きて居り、青照山の奥深く草を分け入る谷間より、小笹ざわざわ飛出す魔佗羅。三人ぐるりと方角直りて後へ續けば前に立ち、顧りては尾を掉りて、路無き方へ導くまゝ、七八町も來るらし。早鎗流の音するに、冠彌左衛門犬と伴に立止まり、是在か是在か、と聲懸くれば、應々と響くは谺にあらで、山懐の洞穴より榮螺の殼に火を照射しぬつと出でたる沖野お浪、おゝ兄様か、待兼ねた。附隨て御光來のお二人は。靈山卯之助、猿の傳次。

冠何も言はず、足の爪先から頭の毛まで、阿浪は一遍屹と見て、最出懸けても好いぞといふ。えゝ何處へ？何處へとは？阿浪ぽんと手を叩きて、あゝ權燈寺！むゝ其事だ。そんなら直に、と其儘に、別段身繕ひするでも無く敵の繩張へ這入込む畢生の大役を、つい酢を買ひに行くかの如きは、決心の上といひながら、此細腰と蓮歩を以て、さても〳〵と猿の傳次、卯之様あゝだ。と囁きて、漫に舌をぞ卷きにける。

兄様。阿浪。こりや今御目に懸つたばかりと名殘惜げな、お二人様、おさらば。と行懸り、忘れたことあり振返りて、兄様お前に進げようと熟した柿を拾つて置いたが。おい其は御厚情。洞穴に入れてある、お前方も澤山お食り。へい、忝なく頂きます。今まで妾が守つた隱家、いはば主人が珍客へほんの寸志。息せき走り來りたれば渴を止むるに無類の珍味、と卯之助腰を屈むれ

ば、いゝえ何の御挨拶、魔佗羅來れ。と後をも見ず。お浪は無雜作に別れしが、茨の刺に裳を取られて、轉ばんとして踏止めたるを、猿の傳次伸上りて、姉御氣を注けて行きなせえ。あい、合點して、跡白浪。

三十一

石村外濠の建策者、岩永帷幕の參謀、權燈寺の住職僧正頑鐵、長き夜の枕、子刻過天井を駈ける鼠の音に眼を覺し、首上げて我闇を見る寒さに小便を催し、達して歸際に雨戸一枚繰りて、手を清めんとする時、人の囁く聲あり。

那邊ぞと猶傾聽けば、此中庭の露地の正面に、仄かに燈影の映射其離座敷より洩れてぞ聞ゆなる。其處にこそ當國の太守東相模守を籠の俘と押籠め置きたるなれ。固く出入を禁じたるに何者か忍び入りけむ、容易からぬことと手を叩きて夜番の侍を呼ばむとする隙なく、と見れば彼處の緣側の障子音靜に開きて、人一人つと出でざまに、早くも庭に下りたりと見る内、雪洞を袖に蔽ひて後より出らるゝは慥に殿様。二三歩行き懸くる曲者を、こりや〳〵、と忍びやかに呼び止め給へば、はい、と媚しき返事、振返りて土に手を支くを、雪洞さつと差出して此を名殘と見らるる刹那、頑鐵が姿ちらと認めてふつと消し、ぴしやりと障子を閉めて引込まるゝ相模守。曲者は

鼬の如くちよろ〳〵小走りに木立の間を潛りて行くを、頑鐵見認めて、待てッ、と聲掛け、手燭を片手にひらりと飛下り電の如く追懸くれば、ひよいと石燈籠の後へ潛むを、見遁さず。手燭差付られて正體を顯すは女なり。遁れぬ處と觀念してか、つか〳〵と寄り添ひて、却てお敵から初音床しく、御上人樣妾はあの……と欄間から落ちた天女何のそのと云ふ艶婦。おのれ妖怪、と叫ばんとする口を、冷たき掌にひたと蓋して、腰高に〆めたる下〆を片手に解きて雪なす襟を綏げ、溫き玉、眞白き乳房を鼻の前に持つて來て莞爾と笑めば、頑鐵今年は四十二の厄年、命は取らるるかと震ひ出、怨敵退散南無阿彌陀々〳〵々々と口の中、ほつかりと來る仙女香の匂は飢餓腹に江戸前の燒初、親の精進ころりと落ちて、救はせたまへ女菩薩とて兩の身體べつたりと坐ると見えし。ぎやあというて手足を掙けば、放り出されし手燭の火、枯たる芝に燃移りて、疊に見立てて一疊ばかり爆發と燃上りぬ。炎照添ふ緋縮緬の下〆、頑鐵が吭に卷占めたる兩端を取りながら、煙の中に沖野阿浪星眼銳く突立ちたり。もろくも其儘息絶えたるを火葬に蹴遣りて、突來る煙に顏を背け、身輕に火の中飛出でたる、行手に人あり。小僧めが、あれ〳〵方丈樣を、といふ聲を、立てさせじと一當あつれば、うむと倒るゝを見向きもせず。

表裏口兩門を蟻の這入づる隙も無く、犇と警護の不寢番卒、奥庭の高煙に驚きて、水よ火よ、と騷ぎ立ち、不意の出來事にあわを喰うて職分は其方へ退け、一人も殘らず火を救はむと駈け行

きたる隙に乘じ、勿怪の僥倖天の與へと沖野阿浪、一通りにては出らるまじき寺内を易々と立出でて、一町ばかり夢中に駈け出し、木蔭に憩ひてほつと一息、見返れば火は消えたり。

今は早和尚の死骸見附けたらむ、追手懸らば一大事、少しも早く、と心急ぎて、身繕匆々にひた走りに走りて雪の下に差懸る。晝は數百の人足が汗水流す熱鬧場、夜は人の氣勢も無くて寂寞としたる石村が邸の周圍、九分通出來たる堀端傳ひに息せきと行く前面より、夜巡の番人四人連、一時交代に見廻らする、石村が用心深し。何かわや〳〵と談話ながら來懸るに、はたと出遇ひぬ。

此邊何處までも廣々と見通しにて、賴むべき椎の木蔭も無ければ、阿浪はつと當惑せしが、咄嗟の思附惡怯たる色無く、小刻に走り行きて、もしえ、何時頃でござります。と聲懸けさま四人の眞中大膽に行違へば、さればさ何時であらうづ。と女ゆゑ優しく返事して、美形ゆゑ一同振返る。あら、腹立やの、腹立やの、惡性男が見棄てて遁げる。と實らしく呟けば、大井川は川留ぢや、と一人が笑ひ、蛇になつて渡りたうても三井寺はない、此國の海は南の盡ぢやと嬲るを、聞かぬ態して、一散に走出せば、哄と笑うて行過ぐるに、胸を撫下ろして冷汗になりぬ。

此より閻魔川の上流なる坐禪橋を通りて比企谷を越せば直に青照山。五分は仕遂せたりと心勇み、橋を渡り懸けて不圖向うを見れば、大町より小町へかけて比企谷の麓まで、提灯數限りなく松並木をちら〳〵と行くは、ても夥多しき人數。狐の嫁入のごとし。南無三これは御用の二字遠

目より讀まるゝに、さては追手。あの人數あの騷動此單身を捕へむとてかと身震ひして、詮方なしに廻り道、引返して若宮口から、海岸道へ行拔けむと、足もうはの空を駈けしが再びぎよつとして立止まりぬ。死出の松の闇夜にも判定と拔出て繁れる邊は、こはそもいかに眞晝の如きこそ、無しと思ひし番所の更に其處に出來たるなれ。

三十二

いでさらば退きても遁れぬ身の、吹毛急に用ゐて進まむに如じ。阿浪は宿心を決しつゝ、欺きて番所を通らむに便惡きは小袖を着たることなり。襤褸に更へて、と思案して斯る折にこそ斬取强盜、天道樣許させ給へと隣家の無き百姓家、推せば開く戸を得たり、と押入れば、三十餘りの眉目好き女房、一心に砧を打ち居たるが、不意に驚きて眼ばかり睜るを、無心に參つた、といひつゝ飛蒐つて捻ぢ伏せ、聲を立つると絞殺す、といはれて女房叫びも得ず、ばた〳〵と足を掙き、傍に夜着を被りたる幼兒の頭を蹴れば、わつ、と寢起きて、嫣々樣々々々と、虚呂つき、阿浪の顏を熟々と見て幼心に覺込みて忘れずやありけむ。おゝをば樣が、といふ顏。阿浪も可愛やと思うて與へたる小判のことをいまだに忘却ず。其と思當るまゝ消えも入りたく、あれ恥かしや、と顏を隱して駈出るを幼兒指し、嫣々樣お錢は彼人ぢや。小判々々。とけたゝましき呼聲に、母親え

え、といひ樣飛んで起き、遁出す阿浪の袂を取つて——貴女は、貴女は。あゝ惡かつた堪忍して見遁してたも、これ、これぢや、と手を合されて女房大きに狼狽、何のまあ勿體も無い、見遁すの、さぬのと、其樣段でござんすか、お駕籠に召した方と聞いたれど、何時かはお目見えして御禮を申しましたいと、思はぬ日は無かつた念の屆き、嬉しや貴女が其上薦。縱令實の泥坊樣でも大事無い、有つて御入用の品ならば熨斗附けて進ぜましよ。まあ〳〵此方へ。と田舍は律儀、一國者の無理强に、一間に請じて上座に据ゑ、三太來やれ、と子を呼びて、さあ〳〵お辭儀、と丁寧なるに、御挨拶痛入る、と阿浪は恥ぢて面を低れぬ。

女房軈て立上り草鞋や干菓子を賣溜が、と持出さんとするを、あゝよしや、廢止や、滅相な。金を欲くば此方から進ぜよう、妾が所望の品物は、此方衆の着る樣な、短かい袖の衣服が欲しい。替りに此をば脫いで行く、と言はれて不審霽れやらず。して又何に遊ばしまする。其々其は……と行詰りしが、むゝ斯うぢや、親類の者が大病を、見舞に長谷まで行かねばならぬが、氣の注かずに來て見れば行前に番所がある。此扮裝では事面倒、其故身扮が替へたいのぢや。と出任せに言ふを眞に受けて夥度打點首き、好くこそお氣が注ました。斯う申してはいかゞなれど貴女樣の樣な御人柄が……な、萬一見えたらば注進せいと、前々から嚴敷御布達。其儘でうつかりお出なされたらそれは〳〵どんな目にお逢ひ遊ばさうも知れなんだ。氣味惡くとも御着替なされ、其に

又都合の好きは、内の亭主が番所に雇はれて居りまする。其は何よりと膝押進め、其は上々好い都合、もし番所の頭人の名は知れぬか。さいな。冠とかいふ人が這入込むと大變だと俄に出來た、あの番所、石村様の子息次郎藏殿が頭人さうな。附添ひの下役は、中村大六といふ恐い目玉の侍だ、と宿が談話して居りました。と聞くより阿浪、えゝ大六が——石村が。孰も普通ならぬ大敵に、と胸を吐きしが覺悟して、借着の着物に手早く着替へ、鳥渡鏡臺貸してたも。顔に煤を塗るあひだ見て居られては妾は嫌、と女房を立去らせ、亂れしまゝの圓髷切つて颯と亂し、袂を探りて恭しく取出すは、東殿直筆の岩永追討の御墨附、今一品の紙包みは此度の使を勞らふとて、手づから給ひし名香なり。手に捧げて三度戴き、くる〳〵と小さく丸げて、丈に餘る黑髪に卷込んで束髪、櫛を差して一度撫でて、是ならば大丈夫、もし捕はれて身體を點檢られむ時、見出さるまじとの用意なり。

お蔭にて殘なく支度は出來ぬ。難有し、御緣あらば重ねて、と暇を告ぐれば、あゝ、もし、もし、其處迄一所に御隨附して、宿のに言葉を添へませう。さうすりやわけ無く通られまする。といふは何より渡りに舟。そんなら賴む御苦勞ながら。何の遠くは無い道を、直様歸る待つて居よ。と後を追ふ子を賺してぞ打連立ちて立出ける。

篝火幾個か燃立て幔幕絞りて兩側に弓矢鐵砲突棒 叉 警護の士卒三十餘人二列に居流れつ。一段高き假小屋には毛氈ずッと敷詰めて、戸帳の裡には頭人なる次郎藏大六控へたり。此處を緊要の番所とて潛り出なば蚯蚓にも、目を放すなと萬燈の灯影、頭の髮だにも數ふべし。

期しては居れど胸轟き進み兼ねて沖野阿浪、後退して猶豫へば、女房は阿容たる色無くさつさつと歩み出、此方の人御座んすか、お賤が鳥渡用がある、吉兵衞殿や。と呼び出せば、應、何用ぢや。と番卒の、中の一人が顏を出す。あのな、妾の朋達が、急病の緣者見舞ひに長谷の方まで行かんする。通して進げて下さんせ。おい、了解々々。と答ふれば、貴女ちやつと、大事ない。と目注せするに度胸を据ゑ、態と愼ましげ無き體して、つか〳〵と眞中通り、悠々振返りて小腰を屈め、お賤様難有う。とさそくの氣轉挨拶すれば、左迄疑ふ様子は無けれど、萬目一身に注ぐにぞ、後見らるゝ心地して針の山を通るが如く、足の裏の擽たきを、益々落着きて靜々と、あら

難有し拔出ぬ。

途端に後に聲あつて、一應身裡を檢めい。と幔越に石村次郎藏。番卒二人ばら〳〵と走寄り、吉が知己でも詮方が無い、此方へ失せう。と兩手を取り、引戻されて沖野阿浪、叶はぬ處と觀念して頭人の前に引るれば、幔の裡より石村次郎藏それ〳〵と聲の下、番卒阿浪を手籠にして有無を言はせず、帶に手を懸けする〳〵と解くを、目を瞑りて逆らはず。猶衣服を脫がさむとする時、あれ、といひながら押ふる眞似して、袂なる黃金を潛と握らすれば、何がさて金次第、何品も所

持いたさず、異狀は無之といふに、さまではと石村納得して、許す、通れ。
あら嬉しやと帶引抱へ、重荷を下した心地して、急々と行懸りし。何とかしけむ石に躓き、はつと踏止まる。噫止ぬる哉。髪に差したるつげの櫛、地の上にはたりと落ちて眞中より三つに折れぬ。
女待てい！と大喝一聲、釘を胸に、ぎくり、えゝ、と立止まれば、石村ぐいと幔幕絞りて、あの結髪の中檢め見よ。

三十三

千差萬態の苦楚を嘗めて、幾何の艱難を喫し、山ならば絶頂、此より下道といふ處にて、運の極めか躓きて落せる櫛、女が物を隱し持つには彼中こそ屈竟と石村、阿浪の束髪に目を注けて、それ檢めよ。しなしたりと阿浪顏色變りて戰く間も無く、番卒飛蒐りて黑髪無手と引掴めば、吁、情なや。と思はず聲を立てて、ほろりとしたる眼血走り、取られたる手を引擔ぎて、えゝッと矢聲鋭く、沈んで投げたる柔術の精妙、肩越しに番卒見事に轉る。それッといひ樣、つと寄せて石村が差添をするり奪取る秋水一閃、裳を蹴開き後樣に丁と飛んで、死出の松をば小楯に取り、決死の面色凄じく、ならば手柄ぞ懸つて見や！

女と侮り石村次郎藏、自から捕らむと夥兵を押止め、眞先立に唯一人、十手の稻妻やつと打つを、物々しやと引外して、沖野阿浪は一世の晴、柳に風と受流し、油斷を見澄まし打太刀に、ぱつと血烟南無三寶、肩先四五寸切下げられて次郎藏は其儘べつたり尻餅。おゝ嬉しやと切蒐るを、啊呀と驚く番卒等、懸隔てて遮る隙に、手早く手負を肩に懸け、ばたすたと駈出して、假小屋へ遁籠めば、さまでの疵にはあらざるに、次郎藏は蟲の呼吸、疵口にそつと手を當てて、指頭に染る血を一目見るより、雨やさめ〴〵と泣出し、これやい者共、末期の際に、父親樣をたつた一目。それお迎ひに、とて二三人。

中村大六はぐい飲みの大鼾、酒氣芬々と寢そべるを寄つて集つて呼覺せば、夢に見て居た切合ひは實であつたか、と蚤の痕を欠伸交りに、ばり〳〵と搔きながら、何曲者！ようし來た。

冥途には好侶伴、あはよく一太刀切りたるを、見す〳〵遁して眦裂け、八方に當る一條の金光蛇。四五人に手を負し、二人ばかり斬倒せば、女に似合ぬ手強き對手に、番卒大きに舌を卷き、持餘してばつと退くを、睨廻してほつと一息。腕に受けたるかすり疵より流るゝ血汐に吭を潤し、亂るゝ髪を搔上げて、つッと立ちたる目の前へ、下郎丹前蝦蟇、動ぎ出たる中村大六、一寸御目に懸らうかい。と白刃に恐れぬ强の者、飛んだ處へ出て來たものかな。

惡き敵手と思へども阿浪今は絶體絶命、死物狂ひに斬蒐るを引外し遣違へ、せい〳〵と息を切

りて、逸る處を、附込んで、やッ突出す手練の拳に、阿浪乳の下當てられて、ン――と呼吸を詰めて、立すくみになるよと見えし、たら〳〵と血汐さつと。齒を洩れて頰に流れ、はたと大地へ倒るゝと齊しく、身體は絲の捩れたる如く、手足は疲れて綿の如し。様を見ろ女郎奴が小癪の腕立、苦しい思ひは自業自得。と中村大六せゝら笑ひ、あれ縛り上げい。心得ました、と番卒大勢折重り繩を懸けむとひしめくを、無念々々と手足を煩悶き恥も外聞も用らばこそ、雪を束ねし姿となるまで、暫時は防ぎしが、所詮叶はじと斷念けむ、我手に髪を搔毟りて密書を口に含む處を、とゞ高手小手がんじがらみに、占た占たと恐悦せり。

引立つれど得起たねば、其儘阿浪を横に寢かして、八方を取圍み、一倍篝を燃し立つれば、眞晝の如き火の光に、黑影の番卒等うよ〳〵ぞろ〳〵、眞白き身體に寄り集る形容は、燒石を蜿轉る土用の蚯蚓に、蟻の集ふに髣髴り。大六腕捲りして進出、俯伏居たる阿浪が脇腹土足に掛けて、ころりと眞仰に蹴返し顏を蔽へる黑髪を搔分けてつく〴〵顏を見て、はたと横手を打ち、やあ化けたりな沖野の妻、さりとは容易ならぬ奴、道理こそ骨を折らしたれ。何と處置せむ。と思案の打節、倅が手負の注進に慌てて駈附けたる石村五兵衛、丁度來合せ居たる岩永と打連れて、群集を分けて立敵、顏を揃へて出幕なり。

それ〳〵おいで、と皆額附き、床几を建てて請ずれば、岩永武藏石村五兵衛肩を並べて座を構

へ、いで一詮議といふ處へ、權燈寺より急使到來、頑鐵絞殺され黑燒焦に往生致しぬ。蘇りたる小僧申すは、曲者女にござ候。――

重々の不僥倖、一條にても罪は死なる、事件盡く破裂して、身は恥かしき俘なり、目前に二人まで恐るべき當の怨敵あり。如何なる憂目に逢ふやらむと、身も世もあらぬ阿浪が胸、人心地も無く蹈れば、耳を貫く閻魔の大音、何はともあれ第一に、權燈寺に忍び入りて東殿に逢ひたらむ。仔細有體に白狀上げろ。とわなりつけて地板をぴしやり、早破竹を突立てて、獄卒等、すくすくと立列ぶを、見るに目も暮れ心も滅入れど、唇を嚙んで頭を振れば、岩永目玉をぐるり引剝き、澁太い阿魔だ拷問しろ。じたばた悶くと見苦しい押伏せて叩かつし。と五兵衛言葉を添へければ、それといふまゝ(し)の字に寢さして、兩の手足へ四人懸髪を摑んで押へ附け、女應へろ！笞の雨。處嫌はぬ亂打の下に、雪の肌は色附きて、苦痛の聲も枯々に、あら堪がたや、泣く程に、脊骨より臀へ懸け、紫色に腫上りたるが、忽ち皮切れ肉開きて、無花果を破りたる如し。これでもか〳〵、と引起して、さあどうだ。

三十四

聞耳持たぬ汚はし、唯斯る境遇を汝等の身に思遣りて行末が笑止なり、情は知らぬ男なりとも

妾は女の身體なれば、恥かしき思はさせずもあれ。疾此儘に殺して。と首を低るゝを横目にじろり、言うて終了へば責めぬのだ、何も彼も心から。まだ白狀ぬかそれ打て、打て。と小膝を叩いて急込む武藏。やれさて手數の懸る奴と、獄卒ども少殺氣にて、又押伏せて打懸れば、滾々と流るゝ血に、破竹の手應へ薄し。さらばとて、無慙やな、小砂利を掬うてどつと浴せ、したゝかに撲はせば、何とて永く堪ふべき、手足を跪き、身を掙き、目も當られぬ七顚八倒。されども一念愈々固く、紫色の唇嚙んで、亦再び言はず。

石村五兵衞四邊を見廻し、おゝ彼處に好き責道具、岩永殿これならばおちるであらうと、指すは野中の古井戸にて刎釣瓶の仕掛けなり。何樣一段の物にこそ、これには屹度往生せう。やれそれあれへ釣下げて水喰はせい、と武藏のいふに、中村大六心得て、既に氣の遠くなりてうつとりと目を瞑れる、阿浪を抱へて連れて行き、倒にして胴中を、釣瓶竹に縛付、刎棒の端に繩を付け、ぐいと引いてどんと放せば、淘と立ちたる水烟、汝阿魔女奴此間は、此手で己を誑喰はした、鹽水で無い丈に、返報がお手柔かだ。どつこいしよ。と引上ぐれば、びつしより濡れの沖野阿浪、期せずして得たる囘生劑に、はつと正氣の附きたれど、身は倒の此の拷問、又た世に驗があるべきや。餘りといへば非道の責と、濡髮ぶる〳〵蠢めきて、星眼鋭くはつたと睨付け、强惡無賴の汝等が、其處に悠々と見て居るに、沖野阿浪は此喫苦、吁逆樣の世なる哉。されば此が當前、此

眼で見れば汝等が、却て倒に見ゆるぞかし。妾は切なうござんせぬ。さあ、根限り責めて見よ、續く丈忍耐む、と口にはいへど幾度か、泥水を飲む五體は惱亂。上げつ、下ろしつ、責められて、次第々々に弱り果て、井桁を枕に、苦といひつゝ夥多しく水を吐きて、顏さへ手足も色變り、悄れ果たる朝顏の、釣瓶を纏うて惱みしは、千代女が詠まぬ風情なり。

大六女に一息吐かせい、へい。と中村承り、大地へ撞と投下して、一筋繩では行かぬ奴なり。傳聞く大江戸は傳馬町の獄屋にて石を抱かする拷問術あり、切尖鋭き石を敷きて罪人を上に坐らせ、膝へ石を載するとぞ。此には如何なる强情も、堪へ得で實を白狀といふ、と倅を斬られてむか腹立の、石村水を向けたれば、苛酷は持つて生れの武藏。やい、其でもか、と中村大六、阿浪の耳に口を附くれど、聞かぬか聞えぬか應答は無し。いで〳〵といふまゝに侍の持ちたる刀七八本、かち〳〵と打合はして、鋸の如く刃をこぼし、碁盤の目に組合はして、松の木の根方に敷き、傍に恰も石地藏、死出の松は天然の刑柱、と用意全く出來上れば、獄卒阿浪を抱起し、はたと刃の前に据らせ、此だ此だ、と詈り示すを見まじとすれど氣に見れば、刃は空向きたる霜柱。此上に坐らすとや、汝等が最期見ぬ内は、妾執永く宙に迷ひ、何の道地獄は劍の山、足固めに試みむ。馬鹿頤を叩かすな、といらだつ石村、岩永武藏、阿浪流石に悚然して、あれえ！と絶叫しきらぬ間、早くもべつたり押据ゑて、松の木に引廻して、吭を繩に縛り附け、棒を膝に懸渡し、兩端を

兩人して押附くれば、ひいッ、と一聲、流るゝ鮮血。あゝ、苦し堪難し、殺せ〳〵、と煩亂して、なまくら武士の魂は女の臀に敷かれたな。と言うて退けたる一世の秀句。大六頗る腹を立て、やあ吐したりといふまゝに、石地藏に手を懸けて、えいやつと聲の下、阿浪が膝へ横倒し。刹那にきやつと悲鳴を立て、太り肉の股壓に打たれ、敷たる白刃切れ込みたりけん、身は浮くばかりの血の中に、纖々と眼を見開き、此を最期の聲幽かに、あゝ先立たれし我夫樣、阿浪は閨の淋しさに、石の地藏を抱きました。と莞爾り笑うて氣絶えたり。北風時に腥く愁々と呻吟く梢の聲。楊柳ゆら〳〵と動きて、孤雁遠く西す。

此時阿浪が流せる血液、草に塗れ土に染みて雨に洗はれず、風にも消えず、陰々として雨降る夜は、燐火に永き怨を殘せり。されば事件の終りて後、此地藏を建直して末世にお浪を記念のため、地藏の腰に赤き布を纏ひて、義烈の勇婦が死樣に形どれり。月替り星移りて、堂を拵へ賽錢を募るに及び、布にてはとて紅絹に替へたり。俗に裩地藏と稱す。功力廣大無邊にて、癪氣、寸白、髮が濃くなる、皮膚が細になる、戰あか切が癒うて安産に最も好と、見事に藥の効能書に拜まれて、此婦知る者少なし。十月十日が緣日、野良出合の男女手を引き て參詣引きも切らず、聞けば無理な緣も結んで下さる。好事の者次手あらば拜むべし。死出の松、替つて浪木の松といふ。蓋し名に因めるを、後世誤り傳へて、案内者の曰く、寛永年

間海嘯の時、此まで浪が來ましたとさ。今は唯並木の松。

三十五

俯伏に倒れ懸りて阿浪の膝に喰ひ付きたる石地藏血を泳ぎて、飛沫は離々たり、原上の秋の草。中村大六血漿を浴びて後樣に體を退らし眼を睜りて立てば、武藏腰を捻りて頤をぬつと出し、何うだ死去つたか、と問ふ。五兵衞は苦き顏して上唇を舐廻し、さても醜穢形態わいの、やれ氣の毒な。しかし殺したは大早計、此からまだ〳〵生爪を剝ぎてなりとも、白狀すべきこと山々であり し。一應點檢て成らば最一度活返らして、と大六をして石地藏を取退けしめ、見れば眼も當てられぬ慘狀なり。左の足は太股より斬れて血の中に横たはり、右なる白脛は犇と朱に染みて絞るが如し。全身透間も無く、笞の痕に黑ずみて、泥濘に踏附けたる、雪の塊の、消え殘るは雙の乳房のみ。あら胸惡や、と石村ぺッ〳〵と蟲唾を吐き散らしながら、引廻して捻ぢ上げたる荒繩を切れば、はたりと投げ出す柔き腕を握りて、脈を覗へば全く斷えたり。井戸に釣られて水浸になりし黑髮は、縒々に亂れ懸りて、微風徐ろに蠢めき、艶麗き顏眞蒼になりて小鼻尖り、唇を嚙める前齒艶やかに黑く、露出したる鹽鯛の齒朶皓し。怨恨激怒の眦裂けて、最後に見開きたる眼を塞がず、活きて鐵腸を溶解せし黑眼勝の、死しても人を射て動くに似たり。流石の五兵衞此には

吃驚として、未だ死なぬか、と叫びしが、更に瞬をせぬにて、最早彼の世の代物なり。惜きことを、仕方は無しと、多時思慮て、されば死骸を此儘に棄てて置き一同が引取りて二三人居殘り、近接に隱れて覗ひ居るべし。此奴に加擔の者あらば、女の身の斯る醜態を、高見に見物は爲て居るまじ、類を餌にして類を捕ふるは鮎の朋釣といふ術にして、旨く引懸る奴。といふ石村の發言、其最も然るべしと、一齊に吹過ぎたる野分の後には、見張に殘されたる侍唯二人となりぬ。少し離れて木蔭に潛み、來るか來るかと待つ曲者は更に來らず、籌は燃え落ちて爪頭に浸入む、北風の寒いこと。

名にし負ふ星月夜に、松の根方には生白き物件仄かに見えて、虐殺に苦痛の面影、未だ眼前に幻影き、苦しやな苦しやなと何處にやら呻吟く樣な、沖の艪の音、刎釣瓶の雫の滴々。斯して爰に居らねばならぬとは、何たる因果ぞ、と二人は歎つなる。陰氣に壓されて天地の談話途絶え默然として瞬もせざりしに、一人が何ともいはれぬ聲して、何か……何か不知變なことは無しか、といへば、されば無いでも無いやうな。ふむ、というて戰慄つ。襟首悚然と立つ耳に瞿然たる音して濱の方より、磯打浪の寄せ來る如く、のたり〳〵と近づくは、何か這うて來る氣勢なり。

兩人活きたる心地無く念佛一三昧にて恐怖物は猶見たし、ト首を縮めて見れば、凄じき獸一疋、阿浪の胸に乘懸りてふわと横樣に跨りぬ。うつと呼吸を呑む間、喉の繩を嚙切りて仰向に押倒し、

手首を啣へて後退りにじり〻じり〻と曳摺りしが、屍の重量力に餘りてや種々に曳煩ひ、軈て前足を胸に載せ岸破と嚙附きけむ、めき〳〵といふは、慥に肋骨の破る〻音と、腰がつくり拔けてべた〳〵と二人とも、袂を着て平伏には大小は邪魔なものなり。稍ありて如龜と頭を顯し、四邊を見廻せば既に居らざりけり。我に返りてそろ〳〵と足を立て、鯉口を寬げて松の根に近寄れば、堆高くしたる砂の中に首の無き胴ばかりを殘しぬ。あのこ〻な獸めが、此も後から來て食はむと砂に隱して去りたるならむ。噫憐む可し此婦人、と力を合せて刀を鍬に、柔かき畠地を穿ちて彼方に落散りたる左の足をも合せ葬り、瞑目して合掌して、脫苦與樂と念じける、さてもよくよくのことなるべし。

小坪と書きたる提灯提げて、さる處の婚禮に招かれ、高砂や此浦へ、夜を更して歸途。由井ケ濱の砂道をひた〳〵と長谷の我家へ、急ぎて來懸る村名主の六右衞門。夜目には砂原廣漠無邊、海は百里の盡を見ず、轟々と鳴り來る音と伴に一帶の白布ひらりと飜りては、眞砂を捲きて、ざあと退く。身に染む鹽風に醉覺の身震ひして、大きなる嘘一つした後は豆小の人間海陸に我獨の庄屋。濱松風に提灯闇く、流星海原へ消失せたり。三町行けば里あれど萬里の異域に佇む想像、とぼ〳〵と歩みつ〻閻魔川の裾、海に合する所にて、對方より、のたり〳〵と、異樣なる四足の來るを見しが……立竦みになりて足の裏 擽く、氣も心も奈落へ沈みぬ。

六右衛門が留守宅より御迎の作男、同じ所にて物に躓きて怪し飛び、引返して見れば旦那なり。醉倒れになられたさうな、いかいこと飲られた、と肩に掛けて歸宅して梔子を燒いて喰はして閨に舁入れしが、翌日になりても起きて出ぬは宿醉の故にあらず。名主それより大熱を發して氣味の惡き譫言を言ひ續け、五日目の退潮時に家族を枕頭に集め、我地獄へや墮落けむ。小坪の歸途に恐しき物見たり、といひ懸けて顏色變り、後を言ひしが小聲にて聞えず、子供衆合點か、其にて往生。

三十六

四文二合半と迎酒に微醉機嫌の千鳥足、朝歸途に素見て歩行く壯佼一人、口三味線にて生乾の鰹節、與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀差、琴彈松はころりんしやんとさせ與作、あツあ惜い洒落だが、土地落となつて薩張聞えねえ、と獨言して、とある藝者屋の御神燈相模屋歌次とあるを見て、おつと來たりな雪の下の總卷頭、寢起の姿朝櫻どれ鳥渡拜んで呉れむ、と江一格子を覗込めば、長火鉢の向うに一個の婀娜的、今濟ました膳を片寄せ、小楊枝にて奥齒をせゝつて居るは、此家の主婦歌次とて若衆の、と名取の鯨舍。小鼓の樣なる拍手うちて、もう〳〵〳〵好くつて何もなりませぬ、南無俗名お若衆大明神樣と、朝三度、晝三度、寢期に又三度、妙なものを

禮拜癖あり。九度過ぎるが眞實にて、若衆の歌次と通名になりぬ。

朝ツぱらから不景氣なお覗きで無いよ、と言はぬが花。件の壯佼好い氣になり、唯今頤一個見え候が左にもござなく候ッ生憎樣で御氣の毒な。とん〳〵と格子を叩きて、叩く水鷄に誑される、アうはうはッ、と囃し立つるに、歌次誰方え？と顏を上ぐれば、あばあ、己だわ、と舌を出し、人指指に唾を附けて拭込んである格子戸へ、のたくり廻すのしこし山。巫山戯るのは何處の何奴、妾の情夫郎は蒲容柳質、用があるならお這入いと内から劍突。お手隙ならば出て光來。左樣いふ口を叩く人には烏が灸を据ゑまする。と長煙管をとんと杖けば、あゝいふ風にお轉びなさると品川風邪で頭痛が仕ます、按摩上下三百錢垣覗きは見つとも好いね、と澄まして煙を輪に吹けば、目の亡い盲目に唯一錢御繁昌の旦那樣。戸外の方へ通らんせ手が塞がつて居りますよ。煙管を離せば手が明きます。でも矢張又塞がるわ。と盆に伏せたる金彩燦爛の湯呑を取り上げ、鐵瓶に手を懸けて、それ兩手とも此通り。最一つ外に手があらう、口說縛れて茶碗酒、自烈てえよ。と前齒を刮出して、がし〳〵格子戸を嚙り懸けるに、歌次餘りなと腹を立て、氣障な奴樣だ、ぶつかける。と、水差を手許へ引くを、洒落々々懸けて見ろ、と意地になりて、ぬつと突出す鼻柱へ、口に含みてついと吐けば、まさかと思へる不意を喰うて、ホイと逃げぬ。

相方替りて門口より錢湯歸宅の濡手拭ぶらりと這入る抱への新吉、お歸宅か。あい唯今、と差

向を除けて横の方へ、坐るに膝小法師を揃ふる男、此箱奴新參なるに切つて嵌めたる道樂膚、垢抜のしたは怪しけれど、素性の洗立は野暮なことと、歌次はなるほどそれしやなり。不景氣な二才野郎好く水を懸けてお遣りであつた。はいさ惡氣でも仕はせまいが憎らしいから癪病と棒打、妾も一風呂浴びて來よ、女湯は空いてかい。お前樣と總一座で今夜岩永樣の別業へ招かれる連中が五六人、一皮剝かうと洗つて居た、負けずに腕を磨きなせえ。左程に垢を溜ては居やせぬ。ざつと流して參じましよ。と小夜着をするりと脫ぎ落して帶をしゆつと立上り、二階を仰ぎて、美いちやんや、其處ン所は三の絲だよ。あい、あい、しやしやんと根〻の音。さゝんざの歌になり、蛙一疋捕へに行きたる若宮口の田圃より、一文字に取つて返す最前の壯佼、格子戸に打附りて、何で水を懸けやがつた。歌次手拭手に取りて、啊呀又來たの呆れ返る、成程蛙それ蛙、眞實の蛙、と投込めば、ト兩手を突いてひよい〳〵と飛び、疊の上を、あら〳〵、と手拭擴げて立騷げば、二階で溫習ふ三味線に、壯佼愈々囃す。蛙一ひよこ二ひよこ三ひよこ。よい來た。と手拍子拍ち、夢中になりて騷ぐ背後へ潛と廻りて箱屋の新吉、此木人參好い加減に巫山戲て置け。ひえゝ、と喫驚逃げむとするを摑んで引寄せ、もう堪忍がならねえぞ、と振冠りたる握拳を、此時疾く駈寄りたる寺者と見ゆる美少年、ひたと押へて、まあ待て待て。えゝ邪魔するな、と振放せば、つと眞中へ割つて入り、了簡して遣れ對手は醉つてる、はて私が貰ひます、と壯佼を後に圍ふは、二

九い程な色若衆。二階から雛妓が見て、姉樣、姉樣、それ〳〵彼が、彼人が、と段階子を、と、と、とん、と降りて來てくる〳〵舞ひ。若衆の歌次は雪駄片足すたころ、と戸外へ飛出し、や、や、此方、矢張此人、南無俗名お若衆大明神と、一息に三度唱へ、而して後に落着顏。好く止めて遣つて下さいました、此新どんは常不斷氣早な人で困ります、大した喧嘩にならずに僥倖、此方樣何處も撲たれはせぬか、新吉ちとおたしなみ、あの客方人立が致しまする。汚穢いがお入りなされまし、と饒舌續けて、これ美いちやん、早うお茶の支度を、好いかえ。若衆曰く、これは迷惑な。何の迷惑も當惑も客方の身體此方は構はぬ、新どんお手を引張つて、と箱屋の力を初雁や、又後からも斯う押して、直に家內へと引込めば、雛妓ぴたりと戸を鎖して、鷄が鳴かねば明けぬといふ。

占めた！といひ樣駈出して、淋しき横町へ這入りたる素見の彼の壯佼、旨く當つた一狂言、へん親分めえ、箱屋が好いわえ。と眞面目な顏は醉うて居ぬ五郎組の目白の胴六、ちえゝと鼠鳴して飛ぶが如くに失せぬ。

三十七

江の島の歸途、景政の社の境內にて、暴漢の手籠に遭ひ、難儀の處を扶助て下されし、あの時

の難有さ、御禮は口にも言葉にも盡されませぬと、本人の歌次が申しぬ。更めて筆にせむも無益なり。して見れば此若衆は靈山卯之助。混雜の折からお前樣の顏、私は少も存ぜず、さては此方であつたか、何も禮には及ばぬことなり。否々及ぶこと〳〵、及ばぬながら御禮が申し度うて何から申さうやら、餘り〳〵澤山あつて目移が致しまする。おやまあ忘れて居たお蒲團も敷せませずに失禮ばかり、と獨して急がしがるを、手傳はぬが却つて好からむ、畜生め、と箱奴二階へ外す。何はしかれ長いこと、斯樣して居て下さいまし、お介意は申されませぬ、御窮屈で無いのが取柄、お平に其處へ。と長火鉢の對向ひ、妾は女、行儀好く坐ります。一服と吸口をぐいと拭うて、お用る無いとえ、そんなら妾も喫みますまい、したが此ばかりは止められぬ。と煙草吹く環の中の、靈山の顏をぢつと見て、年の內に春は來にけり、何といふ風の吹き樣やら。

詰番の若い者表にて聲を懸け、皆が日の暮れぬ內に參ります、そろ〳〵支度をなされまし、と歸り行くを卯之助聞いて、さては何處へかお出懸か、これは大層お邪魔をした、と腰を浮せば、大事なし。癪というて斷ります、行かねばならぬことも無い石橋亭とて、さる御武家の別業に今夜祝事があるとやら、と思はくの眞唯中へ、持つて來た談話の緒。靈山此處ぞと巧者に取込む。あの別業へ行かるゝとや、數寄を盡した建物と音に聞えて見た事無し、別して立派な侍達が、晴の座敷の催なら定めて世間見ずの目が覺めむ、後學の爲に豫てから石橋亭が見たうて見たうて、

何か姉樣都合をして連れて行つて下され。と甘える調子に乘せ懸くれば、御本尊の仰有ること、好うござんす。お容易こと。と手も無く承知、して終了て、さあ困つた。庭までは箱屋も行けど、座敷へは鼠も這入られまじ、勿論藝妓は多人數にて入込むことゆゑ斯うしましよ、お嫌で無くばあなた樣が女の姿に扮裝給へ。妾等の仲居の態して紛れ込まれたが好からむ、といへば、斯した機會は又と得難ければ女にならるゝなら扮裝ます、といふ。何の俳優さへ綺麗娘になるものを、と此若衆を女にしても見まほしき歌次が、惚氣から割出したる策略なり。

骨細に色白く小造りなる華奢姿の、此上島田に結うて薄化粧したらむには、此方等女の及ぶ處にあらず。但し弱ることは眉毛が凛として男らしい、遠山に臥蠶と剃るべし、箱どん剃刀は持つてるかえ、と問へば、二階から下りて來て、憚りながら米二俵は高足駄で提げる男、餘り輕うて剃刀は持てまい。と笑へば、串戲は廢止て剃ることは何だえ。刃物で毛を剃るならお茶の子だ、もし、お濕しなせえ。と掌で切味を試る熟練加減、女の襟足も造り得べし。さて〳〵好事なればこそと、極の惡相に剃りて貰ふ卯之助の顏を、見るなら此時と穴の穿くほど、長火鉢に凭れて歌次が見て居て、新どん落着て靜におしな、お顏が切ようかと妾は、はあ、はあ、それ危ないよ。と自分の眉を顰め、まあ生際の揃うたこと女でも震ひ附く。といへば、新、月代を手の掌に塗りて、剃刀が獨りで辷る緻密の好さよ。といふ。えゝ其樣な。と膝を叩けば、おつとしよ動くと切

りますぜ。結髪は何にしよ、と歌次が問へば、此容色には何でも似合ひます。さりながら、あゝ止みなむ。何がえ？　さればさ、身體恰好非難は無けれど、これ此喉佛を奈何せむ、と指の先でひよいと突けば、あつと卯之助首を縮める、あれ切れたと歌次ひやりとすれば、悉皆剃れました。と新は掌を拭ひぬ。歌次は、ト見て、かういふ美麗のに魂を奪はれたら、夜のことではあるなり、がさつお武家衆何として、顔より外に氣が注くものか、どれ髪をば妾が。と嬉しげに立働き、自分の指した櫛の齒に、すきてを兼ねて解きかけて洗ひかもじを入髪に、結んで解けなと元結の、なぞ掛けてやる紅鹿子。文殻にて手を拭き〳〵、てもまあ似合うた島田髷。綺麗に拵へ上げたるは、六十四錢の腕前なり。一寸假に此を着て歩行て御覽と、我身の着物着せて見て、立つたり、居たり、好く見れば、雪程黑きものは無し。些少も男らしくは無い、あれさ腹を立てたまふな、女々しいことではないわいな。と歌次は何の他愛なし。

白粉臭き襟の冷たさ、ぐる〳〵卷帶亂次無く頭も變な氣持にて卯之助は怪訝な顏。此上厚板の帶に胸を括らば、何な風をなさるやら、と腹を抱へてくつくと笑ひ、姉様今に日が傾く早く湯に行きなさらぬか、此孃は慥に預つた。ほんに其事忘れて居た、貴郎へ一寸失禮を。と素足に駒下駄引懸けて、とつかは出で行く後影見えずなりて箱奴の新、卯之様。傳次。

三十八

相模屋歌次の箱奴の新、實は猿の傳次、岩永武藏の別業石橋亭に、今夜大酒宴の陪酌に招集れたる姉様の御伴をして來て、お流盃頂戴のぐい飲に醉うたる紛れ、待草臥の退屈晴し漫歩を思立ちて仲間を外し唯一人、内懐に拳固を固め、ぶら〳〵と歩行廻り、押せば開く切戸を開けて中庭へ這入込めば、築山の樹立の前向は、廊下長く續きて縁子張の障子の内は、銀燭輝く酒宴の席、禮に初まりて未だ噪がず、時々哄と笑聲聞えて、女と男の影法師。これより酒の發奮處に、石村の來らぬは何したものぢや、と岩永武藏は物足らぬ心地なり。歡迎に遣りたる使者歸りて、申上げまする石村様の御返事には、折角の御催し御招待に預り參り度は山々ながら一人息子次郎藏こと、此間斬られたる肩先の手疵礎基にて、破傷風と相成り、今晩が病の峠、唯今の容體にては娑婆極樂何方やら、片時も手を離されませねば、御待ち下されますな。とのことなり。傍に聞き居る中村大六、彼程の薄疵に其様な大病やれさて笑止や、といふを岩永睨め附け、太平樂を幷べ立てずと、其方は酒を飲むばかりか肴を抓る消化運動に、一寸見舞に行きて、御大事になされ御光來下されいで武藏殘念に心得る、御醫者は誰方ぢやと、丁寧に言はうぞ。地獄牢へ行つた時の様に、間抜を行るな。と冷評せば、大六額を叩きて、彼事は禁句でござる、何が扨も女といふ者は

恐しいもの、此晩も白粉の香がして大きに嘔吐ます、お氣を注けなされまし。と次室へ退がれば、そりや苦蟲を追拂うた、最早叱言をいふ氣六ケ敷男無し。さあ〳〵飲め飲め、と御大將崩れ出せば、總一座居坐亂して、言葉の角を取り〴〵に、猪口飛で霰の如く、陰氣ぢや其處らを開放せ、と一齊に障子を外せば、固より見晴の高臺なれば、鎌倉一面眼の下なり。時は初冬の月影に、隈は靈山、比企ヶ谷、波光一帶の銀色は、青照山の腰を纏うて渺茫萬里雲に入る眼を、遮る者唯三つあり。鶴ヶ岡の八幡宮、雪の下白銀の瓦屋根、若宮口の死出の松。

ばた〳〵と障子の開きたる音に傳次吃驚として、木蔭に潛めど、此處より大分に離れたれば、一人も氣の注く者無く、其邊疎雜と要害を見て置き、此で好しと引返して、茶畠の間を通る時、ひゆつと北風に何處にやら、女が悲鳴の聲ありて苦しげにひい〳〵心得ぬことかな、人足絶えたる山中ならむには、狒々と山賊がお定りの景物なり。普通の廣庭人の居るべき處に、あゝ泣くのは讀めた〳〵奥女中の難産、と聞捨にして終了へばお談話にならず、何だらう見て呉れむ、と傳次其聲を知導に見附出したる板戸の節穴。指を環にして片目を當てれば、行燈仄かに四隅闇し。中央の柱に繩の片端を結びて鴨居を潛らした片端に織き手首を後背に縛られ、天井からぶらりと下りたる女一人。踵疊を離れ、指先屈曲て、倒に黑髮亂れ、俯向になりたる顏は、見えたら定めしと思はるゝ柳腰、綠や紅の花やかなる衣裳にて、此女處女と知れたり。

斯る殘酷きことを、下から上目に睨む奴は、襷懸にて小紋染の袖を揭げ、干瓢一束皺びたる瘦腕に、破竹をしやに構へた椎蕈髦。大分に責め苛みて、苦しさ切なさに氣の遠くなりたる婦を、澄して見物して酒亞乎たるは、難産に出遇うた產婆に似たり。可哀相に、と猿の傳次、樣子に因らば救うてやらむ。事情止むを得ずんば懷に拳固あり。

お座敷には酒宴酣になりぬ。岩永大に酩酊して、眦を下げ、淫亂らしき眼の寄る處に、素ばらしき美形こそあれ。姿は派手に優らしき動作振舞、燭の蔭に蔭にとなりて、顏を隱したがる初心な形態、斯うした晴がましき座敷は未だ妓勤馴れぬ女なるべし。あれは何者ぢや、と名を問へば、恰もお酌に候ひける、相模屋歌次莞爾と嬌態をして、彼妓は妾の妹にござりまする。左樣か、呼べ呼べ呼べ。承りて、あの……と呼び懸けしが鳥渡名が知れず、漸と思附きて、若や、若や、と招けど、誰にいふのやら解らねば、つッと駈けて行きて、とんと肩を叩けば、振向くを御前の御召と、手を引張る樣に連來りて、下に下にと岩永の前に坐らせ、何かいそ〳〵得色あり。岩永いよ〳〵眼を纖めて、後刻に抱いて寢る、と直入すれば、兩袖を顏へ當てて俯向くを、否か否か、と問へば、頷く。嫌な方へ頷くならば、滿座の中で素裸身になりすてゝこを踊らせるぞ。一つに二つさあ何方だ、と手を取れば、歌次これは餘りな、と絶りて止むるを荒らかに突退け、皆の者共酒の上だ。大目に見て呉れ、とぢつと膝許迄引寄せて、接吻も仕兼ねまじきでれ鹽梅。あゝさ

ても武士の紅葉に懲りず女とは。知らずや靈山の卯之助を。

三十九

（前回の中程から讀續く老女言葉。）東相模守、委敷道へば相模の領主、權燈寺の一間に、籠の俘囚、岩永急に迫りて、一國を領し得たり。今より後は當國の、事々物々盡く岩永主公の隨意なるべし、山と河と草と木と皆掌に握りたる、さる勿體なき御手を合され、これ娘、唯の一度でも、と拜ませ給ふを、振付ては冥加に盡きむ。應とさへいうて呉れれば、手暴な折檻は爲まじきなり。常には性急な殿樣が、今日が日まで慰めたり威したり、氣永に返事を待たるゝは、首ッ丈のことと難有く思ふべし。其を何が無しに嫌ぢやといふゆゑ、それ此通り、とぴつしやり一打。娘は苦と悲鳴を揚げてぶる〳〵と震はす手足を、ちく〳〵と突き廻し、何と、何だ。苦しいか。むゝ、苦しからう。殺して下されの、お志は嬉しいけれども、三年男は斷ちましたの、何の彼のといふ口にて唯、諾とか應とかいふべし、面倒は無くて兩方好しなり。心に隨へばずんとお部屋樣、此婆々始めが三指で侍ります。左樣して見なされ其は其は、と之より翠帳紅閨、偕老同穴、まつた比翼連理といふ蒙求を轉ること雀の如く、何と合點かと椎蕈髢仰向けば、釣り下りたる亂髮颯と左右へ首を振るに、燒摺子になりて、汝死亡れ。と素振を呉れ、乳の下を發矢と撲てば、

苦と息を引きて上げたる顏、傳次見るより、えッ！こいつは。小萩なり。

猿、氣早に躍込み、娑婆塞め、と横撲に頰桁を喰はせば、人齒粉になりて老女顎を外し、あゝ……と口を開いたまゝ塞がらず。遁げむとするを引戻して突轉ばして肋を踏めば、眞白に眼を刮きけり。其醜態には目も懸けず、細曳解く〳〵和に抱下し、娘をと見れば氣絕せり。足の拇指ぐいと折りてとん、と當てれば、はッと生きぬ。緊乎しろ、傳次が來た。と撫で擦りて勦る顏を、纖り眼を開きとみかう見て、まあ好い處へ、親分樣、何にも道はれぬ此斯うぢや。わつと嬉泣に泣き出せば、飛んだ目に逢はしたなあ。可哀相にもう好い。大丈夫だ好く辛抱して居て呉れた、命さへありや何にもなる。埋合せは承合うたぞ。卯之助も阿主が事を大層心配して居たぜ。あゝ其では卯之樣が、と弱々と息の下。むゝよ寢言にまで言うて居つた、あれまあ氣休めばつかり。と濡みたる眼に愛嬌の、笑窪に涙を湛へつゝ新月の眉を開きけり。

奥の酒宴に取紛れて、人目の無きは天の與へ。影をひそめて少しも早く見附からぬやうに逃出よ。見な、それ此處を行切つて、彼處を曲ると外へ出る。若宮口から長谷へ行つて、己が家に隱れて居れ。辛抱ついでに今夜一晩、淋しうても我慢しろ。夜が明ると卯之助を連れて行つて逢はせて遣る。と身繕ろひをも手傳うて、早く早く。と促せば、あい、合點でござんする。而して卯之樣は今何處に。はて、其樣こといふ內に、人が來たら扶からぬ。早く行きねえ。でもあらうけ

れど獨りで行くのは心細い、お前送つて。遣り度いが、些少爰に用がある、えゝ、意氣地の無え、單りで岩永を刺さう程の、度胸を出しなよ。おゝ、嫌々あんなことは一生涯二度とすることでない。そんなら妾は先へ行く、早う歸つて下さいまし。おい、小萩や氣を注けな。

（前回の結句からつゞく。）あれ、御無體な。と藝者は困ずる。歌次は狼狽へ、岩永は莞爾々々して、酒臭き呼吸をほつと掛け、ほとる面を冷々と、夜風の洗ふ心地好さに、欄干に片肱凭れし時、眼の遠からぬ若宮口の、死出の松枝颯と鳴りて、ひら〳〵と火光一閃、中天に冲ると見えし。蹴鞠の如き一個の火團、瞬間に飛行して、光り輝く石村五兵衛が雪の下の屋の棟へ落つると齊しく、千雷萬弩、つるべ打ちたる銃萬挺、見る〳〵濃厚なる黑烟は鎌倉半面を引包みぬ。

炬眼明星を睨め返して手に一條の火繩を提げ、平常着の儘端然と、死出の松の傍に、突立つ冠彌左衞門、して遣つた火藥の爆裂、金殿半ば溶たらむず、玉樓大略碎けたらむな。

空を衝きたる炎は忽ち、烟を捲きて雲を焦し、渦卷上る火龍の聲、風伯を呼んで爆然たり。暗號ぞ後れな驚破鎌倉、と家々直ちに戸を外づして、長谷の百姓一齊に、哄と揚げたる鯨波の聲。響に應じて靈山には、じゃん〳〵打出す梵鐘に、山徒三十の眠を呵して、皆本堂に呼集め、是空和尚呪詛壇に護摩を燒き、飛天夜叉南海龍王八萬四千の修羅羅刹を驚かして、數珠摺潰せとぞ揉だりける。

手ぐすね引きて待懸けたる、數十の老若身輕に扮裝、得物を取りて一散に、若宮口に馳集りて冠を中に擁し、老爺々萬歳々々、と手を打つて躍り舞へば、彌左衞門莞爾として、人數は？併せて百八人。假令命を棄つるとも、祖先の祀の絶えぬ樣、親か子か孫、兄か弟、一人は家に殘しつらむな。罪九族に及ばぬため、妻は？殘らず緣切つた。いでさらば、毒蛇の首、此冠が受取呉れむ。二隊に分れて一隊は、此處より直ちに道を轉じ、石橋亭に馳向ひ、傳次と靈山に斬死さすな。機會も絶好、よし蒐れ。

四十

（どんぢやんの繫ぎで舞臺廻る。）轟砲一發萬籟を破ると齊しく、娜婀たる柳腰風を拂ひて、白面に颯と紅潮を漲らし、綿柔かに取られし手首、玉の如くに固る腕。屹と上げたる威嚴の容貌、少女刹那に變生せる、此好男子脫兎の如く、岩永武藏の右の手を、其儘緊乎と握り返して、鞘走りたる懷裡の短刀、金光ひらりと一躍して、武藏の喉に突懸くるを、啊呀と驚く相模屋歌次、縋り留めんと割つて入る。總て此一瞬間。歌次の肩先ぐざと刺して、貫き出でたる切尖に、無念岩永薄疵なり。血潑颯と迸りて、きやつと立てたる女の絶叫、對手違へる身代は、や、や、こはいかに、と靈山卯之助驚く機會に拳弛めば、武藏透さず捥離して蒼くなりて駈け出し一間ばかり距

りたり。南無三と手裡の短刀、發矢と擲つ蝗飛びて、床柱の眞唯中へあはよく袂縫ひ止むれば、面喰うた折柄とて拔かむとして手間取る岩永。飛鳥の如く飛附く靈山。餘り事の素早さは、踏外してどつさりと落つる間の樣なる氣持。呆氣に取られて見て居たる一座數十の侍輩、主公が危ない救ふが當然、いかにも左樣ぢや氣が注きて、啊呀々々飛んだことと大騷動。どんと、今の一發にて、氣は變なり、膽は潰れた加之に魂酒に奪はれ、刀は何處と一刀に二三人、我のだ、いや我のだ、と不始末千萬。

今や片袖引切りて、逸し去らむとする岩永を、後より搔摑みて、仰向に引摺倒し、畢生の力を極めて喉をぐいと緊め上ぐれば、驚破大變と侍衆ばら〳〵と馳懸るを、寄せてはならじと懷中より、相模の守の御墨附、ために阿浪の死を致せしを、魔佗羅が持て來し切首の黑髮の中より得たりしなる、東の殿の密書を示して、指でも指すが最後だぞ、とあの凄き眼に血走りたる、其勢ひに氣を奪はれ、今殺されてお終ひなされば、此方等は働いても、恩賞の沙汰目的なしなり。どの道おじやんなら敵役とならぬが好いてな。なぞと引込思案をして、默つて仕舞ふ甲斐のなさは、女の尻に敷かるゝ魂膽。

あゝ宿望は遂げたりと、亡父の記念鋭鎌の短刀、床柱より拔いて取り、組伏せたる岩永を、唯一突と急所をば、狙ひ澄ました一刹那、降つて湧きたる人礫、靈山の目の前へ、瀧と轉びて、あ

れえ、といふは、思懸けなき可愛の小萩。投げ出したるは中村大六。石村方より歸り來て、二才殿鳥渡待つし、荒神樣が御目に懸る。と沓踏石にて破鐘聲。躍り上りて荒鷹が、小萩を小脇に引抱へ、向き直らせて髻を摑み、頤に手を懸けて、可愛き顏を仰向かせ、靈山此奴に覺えがあらうな。はツと變へたる顏の色、見て取る大六落着澄まし、遁げる處を摑えた、何と立派な人質でしか、己が主公と取替子だ。それ斯うして。と人形扱ひ。撮むが如く引くり返して、小萩の襟を左右へ發露き、氷の刃するりと拔きて、さあ先へ手本を見せろ、主公を汝が殺す通りに、此小女童もずぶりと遣る。何と一番相談づくで、薩張取替にしてはどうぢやな、否嫌ならば斷つては言はぬ。と弱目に附込む誇大の慢言。其頰桁をと思へども、小萩が哀しき聲立てて、扶助を求むるいぢらしさ。あのまあ綺麗な胸板が我が手を下ろすと諸共に、血に染まるのか、と猶豫ふ卯之助。大六愈々圖に乘りて、小萩の身體を弄べば、靈山は幾度も、思ひ切らむと手を動かせば、同じく中村して見せる。心弱りて手を弛むれば、大六も又其通り。一つの絲に操人形、睨合ひして稍暫時。此時にしも、猿の傳次一散に駈け附けしが、我扶けたる小萩は却つて遁げ損うて敵手に落ち、斷たれぬ輪廻の絆となりて、靈山途方に暮れたる形態に、呼吸を計りて拳を擦り、隙を得たりと躍込み、誇り切りたる大六の、女に目の無き背後より眞二つに斬下しつ。されど大六は斯道の達者、舞臺に熟練たる兵なれば、此太刀風にさしつたり、と小萩を捧げて楯に取りぬ。自家獨

得の手は利きたり、手應慥にばらりずんと、斬下げたるは敵ならで……慌てる傳次。驚く靈山。大六退つて身構へたり。岩永武藏は刎返しぬ。夜半に嵐の――吹き寄する若宮口より加勢の一隊、大庭に哄と鯨波の聲、出口々々を差し固めて、餘すな、洩らすな、わいわと騒ぐ。今眼前に斬倒されたる、終生の友、未來の妻、小萩が無慙の最後を見て、卯之助は狂氣の如く、色蒼褪めて眼血走り、遁げるを遣らじと武藏を追へば、大六透さず喰止めて、丁と結べる鋭鎌と無銘。餘りの事に茫然たりし、傳次漸く我に返りて、當の敵は大六ぞと、焦げ附く如く挾めば、兩人に渡り合ひ、阿容ず、臆せず、斬合うたる、咄嗟の隙に岩永武藏、傍にありたる長持にくはばら〳〵と這込むを、犇と蓋して、侍四五人。這々の體庭口より馬だ馬だと擔ぎ出す。

拾遺（上）

逃口一方開けてあり、早逃げ出でよ一家の從屬。騒立てて怪我をすな、狼狽へ烟に捲かるゝな、と異口同音に呼び立てて、仕手方の面々一同に、煙を突きて亂入しつ。火の懸らぬ處にこそ、石村五兵衛は籠るなれ、風上へ〳〵と、火炎の間を慌てず、騒がず、號泣悲鳴大混雜の、修羅場を割つて一文字に、奥を目指して正々堂々。少兀頭照返す、眼の光、赫燿と八方に目を配りて、冠彌左衛門眞先にあり。

植込の茂に煙を防ぎて泉水に息を吐く、離座敷の男女の影、右往左往に亂を返すは、五兵衛が居處。あれ洩すな、と一卷はらりと押圍みて、推參の者共は、長谷八ケ村の細民窮族、妻を汚されれ、親は倒れ、子供は餓ゑて候わ、再三の歎願御許容無ければ、今はとても此迄なり。冥途に御伴申さむため、打連れ是まで御迎ひに。あれ爆發の聲、火の車、早や御召し候べし、と口を揃へて念佛三遍、さも哀しげに唱ふれば、覺悟をしてか、恐れてか、今まで釜中の鰌の如く、じたばたと騒ぎ居たる障子の中は靜になりぬ。あれ見よあの殊勝さを、鏖殺にせんな不便なり。石村父子妻妾等、肉親の奴等遁げんとせば、女とて容赦すな、いで枕經を讀み遣はさむ、と冠彌左衛門衣紋を正して、單身ゆらりと緣に上り、障子に手を懸けさつと開けば、ぱつと照射たる燈火の光に、面も背けず瞬がず、只見れば幾枚か重ね敷きたる絹布の蒲團に身を沈めて、うん〳〵呻吟くは次郎藏の、枕許には白髪頭、蛙の如く尻を伏せ、蜘蛛の如く平伏りて、手足は縮める龜の如し。之ぞ暴虐例の如き、石村五兵衛が不覺の醜態。肩を並べて戰慄くは、三十二三の色白女、服裝驕奢善美を極めて大名の奥にぞ似たる、惟みるにお妾樣なり。お次は三日衣帶を解かず、看病疲れて頰痩せて、腫ぼつたき目にしく〳〵泣き入る、次郎藏が妻何といふ名やらしをれつゝ、やうやう一月ばかりの乳呑を抱きて、此場合には泣せともなき、乳首を含め、戰々ついでにゆすぶりてあやすは、子を持つた親思ふべし。彼處にがた〳〵一團、此處にびくつく一團、背合せ、鉢合せ、

手足を合せておい〳〵泣く。彌左猶豫はずづいと進み、石村の前にひたりと坐れば、あれとばかりに二人の女三尺退りて又泣きけり。五兵衛殿お手を上げられよ、始めて御意を得た私は、表德といふ材木座の佛師、冠彌左衛門。推參の仔細は言はずとも御覺えあらむ。死ぬる期ゆゑ自殺をしたまへ、御介錯申さむか、と慇懃に言ひ終りて、早御返事、と詰め懸けられ、五兵衛がた〳〵齒の根も合はず、生命はお扶け下されまし、向後ふツつりと心を入替へ、お念佛を申しましよ、平に平に、と額を埋め、鼻の先にて疊を叩けば、無理請願に參りしならば、其お言葉に滿足して、速に退かむ。なれども今日の狀態は、詰り復讐に向へるなれば、假令數十の金庫を開きて、之を分配し給ふとも、或は證文を燒棄てて、八村を返したまふとも、御首級には交替難し。と斷乎と動かぬ千曳の岩、死刑を申し渡すものなる。取縋るべき綱斷えたるに身悶えして泣き叫び、知らぬ〳〵、己は知らぬ。何も彼も次郎藏奴が了簡ばかり、隱居十年家事向に手は出さぬ。倅めをお責なされて、何卒々々々々。と大聲に欷り上ぐれば、頭は上らぬ大病人、怨めしさうな幽靈聲、あの親仁殿が何の囈言、拙者は知らぬお許といへば、汝不孝者奴が、親の命に替らうとはせいで、と齒噛をして拳を掴む。やい、親でなしの老耄奴、末の見えた命を惜んで、若い者を殺さうとな。えゝいふな畜生、何だ、吠えるない犬自物と、喰付さうな劍幕なり。類で集る五兵衛の妾、男の事は仕方が無し。女は何にも辨別まへねば妾ばかりはお扶けなされ、どうぞや〳〵。と不貞腐れる

を、次郎藏の妻はたゞ、赤子を犇と抱緊めて、誰がよ〳〵、と哀なり。冠毛一筋も心動かず、いや誰彼と人は擇ばぬ、御一家四人お命頂戴。え！え！え！　たゞし石村といふ御家名には露更に怨恨無し、幸ひ内儀が抱かるゝは五兵衛御身が孫ならむ。丹精して育て上げ、生立たるれば後見して、誓つて御家は絶すまじ。燒殘るべき財産は、天道此子に與ふるもの、冠自から封印せんに、塵一本も私せむや。申すべきこと此のみなり。自盡せずむば討取らむ、いかに〳〵。と溫顏變じ、殺氣滿ちたる眼光に、早腰拔けて這廻はり、あれ人殺、出合へ出合へ。其下僕等、下婢等、汝等に目は懸けぬ、去らむとならば許すべし。さりとも主人の先途に立たば、敵手にならむ、と冠が、すつくと立ちて睨め廻せば、仰せござなく候ても遁げる目算でをりました。と心懷かぬ者共ゆゑ、今殺さるべき主人を棄てて、哄と庭に飛出せば、開きて、通して、百姓等、又ぴつたりと寄合つたり。彌左衛門聲を懸け、早此迄ぞ石村五兵衛、念佛申せ。と飛蒐り、膝に押へて心靜かに首ふツつと切落して、髻を掴んで立上れば、蒲團を被る次郎藏を、ぐざと刺して呼吸を覗ひ、止めに及ばず向直りて、いで、女一思ひだ。あれ、と叫びてお妾殿、簞笥の上へ飛乘るを、下より潛つて芋刺に刀を拔けば逆とんぼり。顧もせずつと寄せて、内儀を取つて引起し、渡さじと抱緊むる、赤子をぐいと解き離して、片手なぐりに斬下ろせば、あつと後へ倒るゝを、屹と見て、あゝ、お内儀、此子の名は何といふ。三次郎といひまする。三次……とばかり息絶えたり。

刀を杖に一呼吸して、冠愁然と目を瞑り、其れ引揚げろ。と勝閧三度。

拾遺（下）

長持あはよく圍を逸出たり。經營の慘憺其効無く遂に水泡に歸し終らむか。靈山又傳次噫奈何せむ。然れども幸に冠あり。石村方より踵を返して、壯佼の手傳ひに、急ぎて來懸る冠が、長持の行前に立塞りて、いでその中を見せよといふに、落武者今は之迄と、拔連れしが甲斐は無かりき。皆這々に斬散らされ、冠直ちに蓋を開けば、岩永武藏飛出すを、透さず擒獲にして羽交緊、引挾んで衆とともに馳せ附けたる石橋亭の廣間には、靈山と大六しのぎを削り、猿の傳次大童に亂れなりて長脇差に鮮血淋漓、多勢を敵手に迫つ返しつ、戰鬪將に酣にして、金鐵丁々火花を散らせり。

彌左衛門之を見て、其れ卯之助や、爺が土産持つて來た。と岩永を取つて飛ばし、其手で大六を引分くれば、蹌踉き來る岩永を卯之助すかさず一太刀浴せて、傳次來れ。と麾けば、此形容に雀躍して、亂刃を潛り拔け、飛鳥の如く走り來て、爰に俠客と、美少年と相携へて首級を上げぬ。大六も亦冠と、三合にして力窮り、遂に阿浪の怨恨に死せり。されど幾多の侍士は、刀を伏せ、襷を外づし、解く顱卷にて冷汗拭うて、再び卯之助が捧げたる相模守の令書の下に、膝行頓

首再拜して、死罪々々と詫びにける。

二人の敵魁既に滅びて、御贔屓の三個しかも無事なり。讀者恐らくは遺憾なからむ、之にて御免を蒙るべし。恨らくは阿浪をして、阿浪が最後の微笑をして、此時此處に齎らし得ざるを。

小萩と歌次は疵つきたり。されど肺を破らず、心臟を貫かず、惟ふに全快したるべきなり。もし幸に死を回さば、靈山汝を妻とすべし。歌次も棄てた女にあらねば、愛妾の候補者勿論なり。三個互に莞爾として、傳次千秋の壽をなさば、洒落本の口畫に可し、或は彼儘に死せりとせむか、兩娘で卯之助を引張凧の、面倒無くて更に妙なり。

翌朝になると長谷の百姓、又々例の術にてけろりとして、何が何としたか些も知らぬ顏、顏を洗うて、嗽をして、平氣で畠に出て、澄して耕し、昨日濠人足にてありし事をも、素張と夢を忘れた樣にて、好いお天氣、さらりと晴れました、などといふ朝戸出の挨拶。手の附樣のあらざるに、詮議に來たる有司呆れ果て、默許して敢て又罪を問はず。斯うして見せたは古狸、冠が得意憶ふべし。

其晝東領主御歸城なりて、四民萬歲を唱へ、千秋樂を唱ふ。謳歌洋々として小春日和の晝過、國君ぢきにて裁可を賜ふ。靈山卯之助、猿の傳次。此度の恩賞願ひの隨意なり。佛師表德は一揆の巨魁、漫に徒黨を結びて、火を放ち、人を屠る、罪最死なり。行きて速に捕縛すべし、とい

ふは法度の表向、實は氏神として生涯奥殿に祭るべし。彼儘にして置きては一國の政立ち難ければ、假にかういふ事を言うて見たものなり。さて又聞くが如き英物ならむには、他の者の力にて召捕らむこと成難し、仍て汝等を煩はす、捕吏を率るて時を移さず向ふべし、渠もし走りて他領に行かば、追ふことなかれ、許さむといふ。意を領して兩人直ちに出づ。大手先より練出でて、雪の下を通り、西して大町に懸る道にて、老若男女相伴ひ、辻々は人の山、集り見る者堵の如し。

先達に、色淺黑く、頰痩せ鼻高く眉秀で、延びたる月代漆の如く、亂髪を藁束ねにして、手に長刀を取るものあり。群集目送して曰く、之猿の傳次。

列半ばにして一個秀麗の佳人あり、青年正に十八、眉目清洒、黑髪長く背後に垂れて綠翠滴らむと欲す、前髪輕風に戰ぎて後毛頰に煽つ、染模樣派手なる振袖を結びて肩に懸けたり。蓋し女裝の好男子、昨夜のまゝの扮裝なり。衆目を曳く此服裝太だ異なるを以て、頭を低れて少しく嬌羞を帶ぶ、其形容實に可憐なり。楚々として歩を移す柳腰靡くが如く、一見婦女子を惱殺す。道路相顧みて曰く、靈山卯之助之なり。

一隊材木座に入り亂橋を渡りて、左に折れ、青照山の麓に至れば、卽ち見る佛師の隱宅。先に進みたる捕吏狼狽騷ぎて喧しきことはむ方無かりし、走り歸りて告げていふ、戸の傍に恐しき犬あり、猛勢當るべからず、一同辟易仕る、と。傳次卯之助と相見て微笑せり。姉御の愛犬未

だ壯なりといふべし。

靈山眞先に立出、只見れば然り、魔佗羅々々。呼ぶ卯之助を凝視して、吠ゆること三聲、電の如く走り去りぬ。其にて行方知れずとなりけり。

靈山卯之助、猿の傳次、國守の使者として、一揆の頭領召捕に向うたり。但し肖たる人は見て默せむ。誠の冠在宿ならば、神妙に致さるべし、と枝折戸叩きて呼ばはりつゝ、兩人齊しく侵入して、襖を颯と押開けば、寂として人影無し。さては魔佗羅、主人の留守を守りしならむ。

床前に机を据ゑて、線香の煙二條、花瓶に樒を插み、法華八卷の帙を揃へて、宛然人の死したるべき容體、半紙兩截にして墨の色潔く、佛師表德入寂と書きて、傍に辭世を添へたり。

呼びに來た行かざなるまい極樂へ

阿彌陀の修覆頼まれて行く

冠彌左衞門其終る處を知らず。

活人形

急病　系圖　一寸手懸　宵にちらり　妖怪沙汰　亂れ髪

籠の鳥　幻影　破廂　夫婦喧嘩　みるめ、かぐはな　無理

强迫　走馬燈　血の痕　火に入る蟲　啊呀！　同士討

虐殺　二重の壁　赤城様――得三様　旭

一　急病

雲の峰は崩れて遠山の麓に靄薄く、見ゆる限りの野も山も海も夕陽の茜に染みて、遠近の森の梢に並ぶ夥多寺院の甍は眩く輝きぬ。處は相州東鎌倉雪の下村……番地の家は、昔何某とかやいへりし大名邸の舊跡なるを、今は赤城得三が住家とせり。

門札を見て、「フム此家だな。と門前に佇みたるは、倉瀨泰助といふ當時屈指の探偵なり。色白く眼清しく、左の頰に三日月形の古創あり。こは去年の春有名なる大捕物をせし折、鋭き小刀にて傷けられし名殘なり。探偵の身にしては、賞牌ともいひつべき名譽の創痕なれど、衆に知らるる目標となりて、職務上不便を感ずること尠からざる由を喞てども、巧なる化粧にて塗抹すを常とせり。

倉瀨は鋭き眼にて、ずらりと此家を見廻し、「はゝあ、これは大分古い建物だ。宛然畫に描いた相馬の古御所といふ奴だ。なるほど不思議がありさうだ。今に見ろ、一番正體を現して遣るから。

と何やら意味ありげに呟きけり。

さて泰助が東京より此鎌倉に來りたるは、左の如き仔細のありてなり。

今朝東京なる本郷病院へ、呼吸も絶々に駈込みて、玄關に着くとそのまゝ、打倒れて絶息した る男あり。年は二十二三にして、扮装は好からず、容貌太く憔れたり。檢死の醫師の診察せるに、こは全く病氣の爲に死したるにあらで、何にかあるらむ劇しき毒に中りたるなりとありけるにぞ、棄置き難しと警官が不取敢招寄せたる探偵はこの泰助なり。

泰助はまづ卒倒者の身體を檢して、袂の中より一葉の寫眞を探り出だしぬ。手に取り見れば、年の頃二十歳ばかりなる美麗き婦人の半身像にて、其愛々しき口許は、寫眞ながら言葉を出ださむばかりなり。泰助は莞爾として打頷き、「犯罪の原因と探偵の祕密は婦人だといふ格言がある、何、譯はありません。近い内に屹度罪人を出しませう。」と事も無げに謂ふ顏を警部は見遣りて、「君、鰒でも食つて死よつたのかも知れんが。何も毒殺されたといふ證據は無いではないか。泰助は死骸の顏を指さして、「御覽なさい。人品が好くつて、痩つこけて、心配のありさうな、身分のある人が落魄たらしい、かういふ顏色の男には、得て奇妙な履歴があるものです。」と謂ひつゝ手にせる寫眞を打返して、頻りに視めて居たりけり。先刻より死骸の胸に手を載せて、一心に容體を伺ひ居たる醫師は、此時人々を見返りて、「何やら幽に脈が通ふ樣です。此方の者になるかも

知れません。靜にして置かなければ不可せんから、貴下方は他室へお引取下さい。警部は巡査を引連れて、靜に此室を立去りぬ。

泰助は一人殘りて、死人の呼吸を吹返さむとする間際には、祕密を唸り出す事もやあらむと待構ふれば、醫師の見込みは過たず、良ありて死骸は少しづゝの呼吸を始め、やがて幽に眼を開き、絲よりも尙聲細く、「あゝ、此が現世の見納かなあ。得たりと醫師は膝立直して、水藥を猪口に移し、「さあ此をお飲みなさい。と病人の口の端に持行けば、面を背けて飲まむとせず。手を以て力無げに振拂ひ、「汝、毒藥だな。と眼を睜りぬ。之を聞きたる泰助は、(來たな)と腹に思ふなるべし。

醫師は聲を和げて、「毒ぢや無い、私は醫師です。早くお飲みなさい。といふ顏を先づ屹と視て、やがて四邊を見廻しつ、泰助に眼を注ぎて、「彼は誰方。泰助は近く寄りて、「探偵吏です。「えゝ、と病人は力を得たる風情にて、「而して御姓名は。「僕は倉瀨泰助。と名乘るを聞きて病人は嬉しげに倉瀨の手を握り、「貴下が、貴下があの名高い……倉瀨樣。あゝ嬉しや、私は本望が協つた。貴下に逢へば死でも可い。と握りたる手に力を籠めぬ。何やらむ仔細あるべしと、泰助は深切に、「其は何ういふ次第だね。「はい、お聞き下さいまし、と言はむとするを醫師は制して、「物を言つたり、配慮をしては、身體の爲に好く無い。と諭せども病人は頭を掉りて、「惡僕、——八藏奴に

毒を飲まされましたから、私は何しても助りません。「何、八藏が毒を。……と詰寄る泰助の袂を曳きて、醫師は不興氣に、「これさ、物を言はしちや惡いといふのに。「僕は探偵の職掌だ。問はなければならない。「私は醫師の義務だから、止めなければなりませぬ。と爭へば病人は、「御深切は難有う存じますが、到底私は助りませんのですから、何卒思つてることを言はして下さいまし。明日まで生延びて言はずに死ぬよりは、今お話し申して此處で死ぬ方が勝手でございます。と思ひ詰めてはなか〳〵に、動くべくも見えざりければ、探偵は醫師に向ひて、「是非が無い。あいふのですから、病人の意にお任せなさい。病人はまた、「而して他の人に聞かしたうございませんから、恐入りますが先生は何卒彼地へ。……とありければ、醫師は本意無げに室の外に立出でけり。

二　系圖

病人は苦痛を忍びて語り出だしぬ。

我は小田原の生にて本間次三郎といふ者。幼少の折父母を失ひければ、鎌倉なる赤城家に嫁ぎたる叔母の許にて養はれぬ。假の叔父なる赤城の主人は大酒のために身を損ひて、其後病死した

りしかば、一族同姓の得三といへるが、家事萬端の後見せり。

叔母には下枝、藤とて美しき二人の娘あり。我とは從兄妹同士にていづれも年紀は我より少し。多くの腰元に齊眉かれて、荒き風にも當らぬ花なり。我は食客の身なれども、叔母の光を身に受けて何不自由無く暮せしに、叔母はさる頃病氣に懸り、一時に吐血して其夕敢なく逝りぬ。今より想へば得三が毒殺なせしものなるべし。さる惡人とは其頃には少しも思ひ懸けざりき。

されば巨萬の財産を擧げて娘の所有となし、姉の下枝に我を娶はせ後日家を讓るやう、叔母はくれ〴〵遺言せしが、我等の年紀の少かりければ、得三は舊のまゝ一家を支配して、己が隨意にぞ振舞ひける。

叔母死して七七日の忌も果てざるに、得三は忠實の假面を脱ぎて、やうやく虎狼の本性を顯したり。入用る雜用を省くと唱へ、八藏といへる惡僕一人を留め置きて、其餘の奴僕は盡く暇を取らせ、素性も知れざる一人の老婆を、飯炊として雇ひ入れつ。こは後より追々に爲出ださむずる惡計の、人に知られむことを恐れしなりけり。昨日の榮華に引替へて娘は明暮不幸を喞ち、我も手酷く追役はるゝ、勞苦を忍びて末々を樂み、偶會下枝と媾曳して纔に慰め合ひつ、果は二人の中をもせきて、顏を見るさへ許さざれば垂籠めたる室の内に、下枝の泣く聲聞く毎に我は腸を斷つばかりなりし。

數ふれば三年前、一日黄昏の暗紛れ、潛かに下枝に密會ひ、樣子を聞けば得三は、四十を越したる年にも恥ぢず、下枝を捉へて妻にせむ。我心に從へと强迫すれど、聞入れざるを憤り、日に日に手暴き折檻に、無慙や身内の皮は裂け、血に染みて、紫色に腫れたる痕も多かりけり。

下枝は我に取縋りて、得堪へぬ苦痛を訴へつゝ、助けてよ、と歎くになむ。さらば財産も何かせむ。家邸も何かせむ、皆得三に投與へて、斯る惡魔の火宅を遁れ、片田舍にて氣散じに住み給ふ氣は無きか、連れて遁げむと勸めしかど、否、先祖より傳はりたる財産は、國とも城ともいふべきもの、いかに君と添ひ度いとて、人手には渡されず。今得三は國の仇、城を二十重に圍まれたれば、責殺されむ其までも、家は出でずに守るといふ。男勝りの心に恥ぢて、强ひてとも言ひ難く、さればとて此まゝにては得三の手に死ぬばかりぞ、と抱き合ひつゝ泣き居たりしを、得三に認められぬ。言語道斷の淫戯者片時も家に置難しと追出されむとしたりし時、下枝が記念に見給へとて、我に與へし寫眞あり。我は彼惡僕に追立てられて詮方無く、其夜赤城の家を出で、指して行方もあらざれば其日々々の風次第、寄る邊定めぬ捨小舟、津や浦に彷徨うて、身に知る業の無かりしかば、三年越しの流浪にて、乞食の境遇にも、忘れ難きは赤城の娘、姉妹とも嘸得三に、憂い愁い目を見るならむ。助くる術は無きことか、と賴母しき人々に、一つ談話にするなれど、聞くもの誰も信とせず。思ひ詰めて警察へ訴へ出でし事もあれど、狂氣の沙汰とて取上げら

れず。力無く生甲斐無く、漣や滋賀縣に佗年月を過すうち、聞く東京に倉瀨とて、弱きを助くる探偵ありと、雲間に高きお姓名の、雁の便に聞ゆるにぞ、さらば助を乞ひ申して、下枝等を救はむと、行李怱々彼地を旅立ち、一昨日此地に着きましたが、暑氣に中りて昨日一日、旅店に病みて枕もあがらず。今朝はちと快氣なるに、警察を尋ねて見ばやと、宿を出づれば後より一人跟け來る男あり。忘れもせぬ其奴こそ、得三に使はるゝ八藏といふ惡僕なれば、害心もあらむかと、用心に用心して、此病院の裏手まで來りしに、思へば運の盡なりけむ。俄に劇しく腹の痛みて、立つても居られず大地に僵れ、苦しんで居る處へ誰やらむ水を持來りて、呑まして吳るゝ者のあり。眼も眩み夢中にて唯一呼吸に呑干しつ、稍人心地になりたれば、介抱せし人を見るに、別人ならぬ惡僕なり。はつと思ふに毒や利きけむ、心身忽ち惱亂して、腸絞る苦しさにさては毒をば飲まされたり。彼の探偵に逢ふまでは、束の間欲しき玉の緒を、繫ぎ止めたや〳〵と絶入る心を激まして、幸ひ此處が病院なれば、一心に駈け込みし。其後は存ぜずと、呼吸つきあへず物語りぬ。

三　一寸手懸

泰助は目をしばたゝき、「薄命な御方だ、御心配なさるな。請合つて屹度助けて進げます。と眞實面に顯るれば、病人は張詰めたる氣も弛みて、がつくりと弱り行きしが、頻に袂を指さすにぞ、泰助は耳に口、「何です、え、何ぞあるのですか。「下枝の寫眞。「むゝ、其は此でせう。先刻僕が取出しました。と彼の寫眞を病人の眼前に翳せば、熟々と打視め、「私と同じ樣に、嘸今では憔れて、とほろりと涙を泛べつゝ、「此面影はありますまいよ。死顏でも見たい、もう一度逢ひたい。と現心にいひければ、察し遣りて泰助が、彼の心を激まさんと、「氣を丈夫に持つて養生して、ね、翌朝まで眼を塞がずに僕が下枝を連れて來るのを御覽なさい。今夜中に助け出して、財産も他手には渡さないから、必ず御案じなさるな。と言語を盡して慰むれば、頷くやうに眼を閉ぢぬ。

折から外より戸を叩きて、「もう開けましても差支へございませんか。と醫師の尋ぬるに泰助は振返りて、「宜しい、おはひんなさい。と答ふれば、戸を排きて、醫師とともに、見も知らぬ男入り來れり。此男は、扮裝、風俗、田舍漢と見えたるが、日向眩ゆき眼色にて、上眼づかひにきよろつく樣、不良ぬ輩と思はれたり。

泰助屹と眼を着けて、「お前樣は何しに來たのだ。問はれて醜顏き巖丈男の聲ばかり惡優しく。「へい〳〵、お邪魔樣申します。些お見舞に罷出たんで。「知己のお方かね。「いえ、唯通懸つた者でがんすが其の方が强くお鹽梅の惡い樣子、お案じ申して、へい、故意。といふ聲耳に入りたりけむ。其男を見て、病人は何か言ひたげに唇を震はせしが、あはれ口も利けざりければ、指もて其方を指示し、怒り狂ふ風情にて、重き枕を擡げしが、撞と倒れて絕入りけり。

今病人に指さゝれし時、件の男は蒼くなりて恐しげに戰慄きたり。泰助などて見遁すべき。肚の中に。ト思案して、「早く、お退きなさい。お前方の入つて來る處ではありません。と極めつけられて悄氣かへり、「あゝ呼吸を引取ましたかい。可愛や〳〵、袖振合ふも他生の緣とやら、お念佛申しましよ。と殊勝らしく眼を擦り赤めて徐ら病院を退出ぬ。泰助は醫師に向ひ、「下手人がしらばくれて、(死)をたしかめに來たものらしい。態と化されて、怪まぬやうに見せて反對に化かして遣つた。油斷をするに相違無い。「いかさま怪しからん人體でした。あのまゝ見遁して置くお所存ですか、「なあに之から彼奴を突止めるのです。此病人は及ばぬまでも手當を厚くして下さい。誠に可哀相な者ですから。「何か面白い談話がありましたらう。「些少も愉快くはありませんでした、が此から面白くなるだらうと思ふのです。追々お談話申しませう。と帽子を取つて目深に被り、戸外へ出づれば彼男は、何方へ行きけむ影も無し。脫心たりと心急立ち、本鄕の通へ駈出で

て、東西を見渡せば、一町ばかり前に立ちて、日蔭を明神坂の方へ、急ぎ足に歩み行く後姿は其者なれば、遠く離れて見失はじと、裏長屋の近道を潛りて、間近く彼奴の後に出でつ。まづ是で可しと汗を容れて心靜かに後を跟けて、神田小柳町のとある旅店へ、入りたるを突止めたり。

泰助も續いて入込み、突然帳場に坐りたる主人に向ひて、「今の御客は。と問へば、訝かしげに泰助の顏を凝視しが、頰の三日月を見て慇懃に會釋して、二階を敎へ、低聲にて、「三番室。」

四番室の內に忍びて、泰助は壁に耳、隣室の談話聲を聞けば、おのが跟けて來し男の外になほ一人の聲しけり。

「お前、御苦勞であつた。これで家へ歸つても枕を高うして寐られるといふものだ。「旦那もう歸國ますか。此二人は主從と見えたり。「如此して了へば東京に用事は無いのだ。今日の終汽車で歸國としようよ。「其が宜うございませう。而して御約束の御褒美は。「家へ行つてから與る。「間違ませんか。「大丈夫だ。「屹度でせうね。「えゝ、執拗な。「難有え、と無法に大きな聲をするにぞ、主人は叱りて、「馬鹿め、人が聞かあ。後は何を囁くか小聲にて些少聞えず。少時して一人其室を立出で、泰助の潛みたる、四番室の前を通り行くを、戸の隙間より覗き見るに、嚴格き紳士にて、年の頃は四十八九、五十にもならむずらむ。色淺黑く、武者髯濃く、いかさま惡事は仕兼まじき人物にて、扮裝は絹布ぐるみ、時計の金鎖胸にきら〳〵、赤城といふは此者ならむと泰助は帳場

に行きて、宿帳を檢すれば、明かに赤城得三とありけり。（度胸の据つた惡黨だ、）と泰助は心に思ひつ。

四　宵にちらり

三時少し過ぎなれば、終汽車にはまだ時間あり。一度病院へ取つて返して、病人本間の樣子を見舞ひ、身支度して出直さむと本郷に歸りけるに、早警官等は引取りつ。泰助は醫師に逢ひて、豫後の療治を賴み聞え、病室に行きて見るに、この不幸なる病人は氣息奄々として死したる如く、泰助の來れるをも知らざりけるが、時々、「赤城家の祕密……怨めしき得三……戀しき下枝、懷かしき妻、……あゝ見たい、逢ひたい、」と同じ言を幾度も譫言に謂ふを聞きて、よく〳〵思ひ詰めたる物と見ゆ。遙々我を賴みて來し、其心さへ淺からぬに、蝦夷、松前はともかくも、箱根以東に其樣なる怪物を棲せ置きては、我が職務の恥辱なり。いで夏の日の眠氣覺しに、泰助が片膚脫ぎて、惡人儕の毒手の裡より、下枝姉妹を救うて取らせむ。證據を探り得ての上ならでは、渠等を捕縛は成り難し。まづ鎌倉に立越えてと、やがて時刻になりしかば、終汽車に乘り込みて、日影やう〳〵傾く頃、相州鎌倉に到着なし、滑川の邊なる八橋樓に投宿して、他所ながら赤城の樣

子を聞くに、「妖物屋敷、」「不思議の家、」或は「幽霊の棲家、」などと怪しからぬ名を附して、誰ありて知らざる者無し。

病人が雪の下なる家を出でしは、三年前の事とぞ聞く。或は救助の遲くして、下枝等は得三の爲めに既に殺されしにあらざるか、遠くもあらぬ東京に住む身にて、かくまでの大事を知らず、今まで棄置きたる不念さよ。もし下枝等の死したらむには、悔いても及ばぬ一世の不覺、我三日月の名折なり。少しも早く探索せむずと雪の下に赴きて、赤城家の門前に佇みつゝ云々と呟きたるが、第一回の始まりなり。

此時赤城得三も泰助と同じ終汽車にて、下男を從へて家に歸りつ。表二階にて下男を對手に、晩酌を傾け居りしが、得三何心無く外を眺め、門前に佇む泰助を、遠目に見附けて太く驚き、「あッ、飛んだ奴が舞込んだ。と微醉も醒めて蒼くなれば、下男は何事やらむと外を望み、泰助を見ると齊しく反り返りて、「日那々々、彼は先刻病院に居た男だ。と聞いて益々蒼くなり、「えゝ！其では何だな。お前を疑ふ樣な擧動があつたといふのは彼奴か。「へい、左樣でござい。恐怖え眼をして我をじろりと見た。「こりや飛んだ事になつて來た。と一方ならず恐るゝ樣子、「何も左樣、顏色を變へて恐怖がる事もありますめえ。病氣で苦しんでる處を介抱してやつたといへば其迄のことだ。「でもお前が病院へ行つた時には、あの本間の青二才が、まだ呼吸があつたといふでは無

いか。「ひく〳〵動いて居ましたッけ。「だから、二才の口から當家の祕密を、いひつけたに違ひない。「だつて何程のこともあるめえ。と落着く八藏。得三は頭を振り、否、他の奴と違ふ。ありやお前、倉瀨泰助というて有名な探偵だ。見ろ、あの頰桁の創の痕を。な、三日月形だらう、此界隈で些でも後暗いことのある者は、彼を知らぬは無いくらゐだ。といへば八藏はしたり顏にて、「我れも、あの創を目標にして這ッ面を覺えて居りますのだ。「むゝ、汝はな、是れから直ぐに彼奴の後を跟けて何をするか眼を着けろ。「飲込ました。「實に容易ならぬ檻襤が出た。少しでも脫心が最後、諸共に笠の臺が危ないぞ。と警戒れば、八藏は高慢なる顏色にて、「たかが生ッ白い瘦せた野郎、鬼神ではあるめえ。一思ひに捻り潰してくれう。と力瘤を叩けば、得三は夥度頭を振り、「うんや、汝には對手が過ぎるわ。敏捷い事ア狐の樣で、何して喰へる代物ぢや無え。しかし隙があつたら殺害ッちまへ。」

洵や泰助が一期の失策、平常の如く化粧して頰の三日月は塗抹居たれど、極暑の時節なりければ、繪具汗のために流れ落ちて、創の露れしに心着かず、大事の前に運惡くも惡人の眼に止まりたるなり。

さりとも知らず泰助は、略此家の要害を認めたれば、日の暮れて後忍び入りて内の樣子を探らむものをと、踵を返して立去りけり。

表二階より之を見て、八藏は手早く身支度整へ、「どれ後を跟けませう。「くれ〳〵も脫心なよ。「合點だ。と鐵の棒の長さ一尺ばかりにて握太きを小脇に隱し、勝手口より立出しが、此家は用心嚴重にて、つい近所への出入にも、鎖を下す掟とかや。心急きたる折ながら、八藏は腰なる鍵を取り出して、勝手の戸に外より鎖を下し、急ぎ門前に立出でて、滑川の方へ行く泰助の後より、跫音ひそかに跟け行けども、日は傾きて影も射映ねば、少しも心着かざりけり。

五　妖怪沙汰

泰助は旅店に歸りて、晩餐の前に湯に行きつ。湯殿に懸けたる姿見に、不圖我顏の映るを見れば、頰の三日月露れ居たるにぞ、心潛かに驚かれぬ。ざつと流して座敷に歸り、手早く旅行鞄を開きて、小瓶の中より繪具を取出し、好く顏に彩りて、懷中鏡に映し見れば、我ながら其巧妙なるに感ずるばかり旨々と一皮被りたり。

今夜を過さず赤城家に入込みて、大祕密を發きくれむ。まづ其樣子を聞置かむと、手を叩きて亭主を呼べば、氣輕さうな天保男、とつかは前に出來りぬ。「御主人外でも無いが、あの雪の下の赤城といふ家。と皆まで言はぬに早合點、「へい、なるほど妖物邸。「其妖物屋敷といふのは何い

ふ理窟だい。「さればお聞きなさいまし。まづ御免被つて、と座を進み、「種々不思議があります ので、第一あゝいふ大な家に、棲んで居る者がございません。「空屋かね、「否、其處んところが不思議でごすて。ちやんと門札も出て居りますが何者が住んで居るのか、其が解りません。「ふゝむ、餘り人が出入をしないのか。「時々、あの邊で今まで見た事の無い婆樣に逢ふものがございますが、何でも安達が原の一ツ家の婆々といふ、それは〳〵凄い人體ださうで。これは多分山猫の妖精だらうといふ風說でな。「それぢやあ風の吹く晩には、絲を繰る音が聞えるだらうか。「そこまでは存じませんが、折節女の、ひい、ひい、と悲鳴を上げる聲が聞えたり、男がげら〳〵と笑ふ聲がしたり、や、も、散々な妖原だといひますで。ところこれを聞きて泰助は乘出して、「眞個なら奇怪な話だ。まづお茶でも一ツ……といふ一眼小僧は出ないかね。とさも聞惚れたる風を裝ほひ、愉快げに問ひ懸れば、こは怪談の御意に叶ひしことと亭主は頻に乘地となり、「否世が此通り開けましたで、左樣いふ甘口な妖方はいたしません。東京の何とやら館の壯士が、大勢で此前の寺へ避暑に來てでございますが、其風說を聞いて、一番妖物退治をしてやらうといふので、小雨の降る夜二人連で出掛けました。草蓬々と茂つた庭へ入り込んで、がさ〳〵騷いだと思し召せ。ずどんずどんと何處かで短銃の音がしたので、眞蒼になつて遁げて歸ると、朋輩のお方が。そりや大方天狗が嘘をしたのか、さうでなければ三ツ目入道が屁を放つた音だらう。誰某は屁玉を喰つて凹

んだと大きに笑はれたさうで、もう懲々して、誰も手出しは致しません、何と、短銃では、岩見重太郎宮本の武藏でも叶ひますまい。と澁茶を一杯。舌を濡して言を繼ぎ、「串戲は偖置き、まだまだ氣味の惡いのは。と聲を低くし、「幽靈が出ますので。こは聞處と泰助は、「人、まさか幽靈が。と態といへば亭主は至極眞面目になり、「否、人から聞いたのではございません。私が慥に見ました。「はてな。「思ひ出すと戰慄といたします。と薄氣味惡げに後を見返り、「部室の外が直ぐ森なので、風通しは宜うございますが、こんな時には、些何うも、と座敷の四隅に目を配りぬ。

泰助は思ひ當る事あれば、尙も聞かむと亭主に向ひ、「談してお聞かせなさい、實に怪談が好物だ。「餘り陰氣な談をしますと是非魔が魅すといひますから。と逡巡すれば、「馬鹿なことを、と笑はれて、「それでは燈を點して懸りませう。暗くなりました。「怪談は暗がりに限るよ。「えゝ！仕方がありません。先月の半ば頃一日晩方の事……」

此時座敷寂として由井が濱風陰々たり。障子の棧も見えずなり、天井は墨の如く四隅は暗く物凄く、人の顏のみやう〳〵仄めさ、逢魔が時とぞなりにける。亭主は愈々心臆し、團扇にてはたはたと、腰の邊を煽ぎ立て、景氣を附けて語りけるは、「丁度此時分用事あつて、雪の下を通り懸り、豫て評判が高いので、怯氣々々もので歩いて行くと、甲走つた婦人の悲鳴が、青照山の谺に響いて……きい——きいつ。「あゝ、嫌否な聲だ。「は——我ながら何ともいへぬ異變な聲でございます。と泰助と顏を見合せ、亭主は膝下までひたと摺寄り、「えゝ其が私は襟許から、氷を浴びたやうな氣が致して、釘附にされたやうに立止つて見ました。有樣は腰ががくついて歩行けませなんだので。すると貴客、赤城の高樓の北の方の小さな窓から、ぬうと出たのは婦人の顏、色眞蒼で頰面は消えて無いといふほど瘠つこけて、髮の毛が此から此へ(ト仕方をして)かういふ風、ぱつちり開いた眼が、ぴかりしたかと思ふと、魂消つた聲で、助けて——助けて——と叫びました。」

語るを聞いて泰助は心の中に思ふやう、いかさま得三に苛責されて、下枝か或は妹か、さることもあらむかし。活命てだにあるならば、追着救ひ得させむずと、漫に憐を催しぬ。談話途切れて宿の亭主は、一服吸はむと暗中を、手探りに、煙管を搜して、「おや、變だ。爰に置いた煙管が見えぬ。あれ、魔隱、氣味の惡い。と尙其處此處を見廻せしが、何者をか見たりけむ。わつと叫ぶに泰助も驚きて、見遣る座敷の入口に、煙の如き物體あつて、朦朧として漂へり。彼はと認むる隙も無く、電？ふつと暗中に消え、やがて泰助の面前に白き女の顏顯れ、拭ひたらむ樣に又消えて、障子にさばく亂髮のさら〳〵といふ音あり。

六　亂れ髪

亭主の叫びし聲を怪しみ、慌しく來る旅店の內儀、「まあ何事でござんすの、と洋燈を點けて据ゑ置きながら、床の間の方を見るや否や、「ン、と反返るを抱き止めて、泰助屹と振返れば、柱隱しの姿繪といふ風情にて、床柱に凭れて立つ、あら怪しき婦人ありけり。

熟々其婦人を見るに、年は二十二三なるべし。しを〳〵とある白地の浴衣の、處々裂け破れて肩や腰の邊には、見るもいぶせき血の汚點たるを、亂次無く打纏ひ、衣紋開きて帶も占めず、紅のくけ紐を胸高に結びなし、脛も顯はに取亂せり。露垂るばかりの黑髮は、ふさ〳〵と肩に溢れて、柳の腰に纏ひたり。膚の色眞白く、透通るほど淸らかにて、顏は太く蒼みて見ゆ。但屹とした品格ありて眼の光凄まじく、頰の肉落ち頤細りて薄衣の上より肩の骨の、いた〳〵しげに顯はれたるは世に在る人とは思はれず。强き光に打たれなば、消えもやせむと見えけるが、今泰助等を見たりし時、物をも言はで莞爾と白齒を見せて笑める樣は、身の毛も彌立つばかりなり。

人々ものを言ひ懸くれど、答は無くて、唯にこ〳〵と笑ふを見て、始め泰助は近隣の狂女ならむと見て取りつ、問へばさるものは無しといふ。今も猶懷中せる今朝の寫眞に心附けば、憔れ果

てて其面影は無けれども、氣ばかり肖たる處あり。さては下枝の如何にしてか脫け出でて來しものにはあらずや。日夜折檻をせらるゝと聞けば、責苦にや疲れけむ、呼吸も苦しげに見ゆるぞかし。之は此儘に去し難しと、泰助は亭主に打向ひ、「何處か閑靜な處へ寢さして、まあ〳〵氣を落着かして遣るが可い。當家へ入つて來たのも、何かの緣であらうからと、勸むれば、亭主は氣の好き男にて、一議も無く承引なし、「向側の行當の部屋は、窓の外がすぐ墓原なので、お客がございませんから、幽靈でさへ無けりや、其へ連れて行つて介抱して遣はしませう。といひつゝ女房を見返りて、「おい、御女中をお連れ申して進ぜなさいと、命つけられて內儀は恐々手を曳いて導けば、怪しき婦人は逆らはず、素直に夫婦に從ひて、さも其情を謝するが如く秋波斜めに泰助を見返り〳〵、蹌踉として出行きぬ。

面にべつたり蜘蛛の巢を撫拂ひて、緣の下より這出づるは、九太夫には些男が好過ぎる赤城の下男八藏なり。彼れ先刻泰助の後を跟け來りて、此座敷の緣の下に潛みて居り、散々藪蚊に責められながら、疼痛を堪ふる天晴豪傑、斯くてあるうち黃昏れて、森の中暗うなりつる頃、白衣を着けたる一人の婦人、樹の下蔭に顯れ出でつ、徐ら步を運ばして、雨戶は繰らぬ緣側へ、忍びやかに上りけるを、八藏朧氣に見てもしや其、はて好く肖た婦人もあるものだ、下枝は一室に閉込めあれば、出て來らるべき道理は無きが、と尙も樣子を聞き居るに、頭の上なる座敷には、人の

立騷ぐ氣勢あり。幽靈などと動搖きしが漸くに靜まりて、彼方へ連れ行き介抱せむと、誘ひ行きしを聞澄まし、緣の下よりぬつと出で蚊を拂ひつゝ澁面つくり、下枝ならむには一大事、熟と見屆けて爲む樣あり、と裏手の方の墓原へ潛に忍び行きたりける。

座敷には泰助が、怪しき婦人を見送りて、下枝の寫眞を取出し、洋燈に照して彼と此と見競べて居る處へ、亭主は再び入來りて、「お客樣、寢床を敷いて遣りますと、僵れる樣に臥りました。何だか不便な婦人でございます。「其は深切に好くしてお遣んなすつた。而して何とか言ひましたかい。「彼は啞ぢやないかと思はれます。何を言つても聞えぬやうすでございます。「何しろ談話の種になりさうだね。「いかさまな。「で、私は之から鳥渡行つて來る處がある。御當家へ迷惑は懸ないから、歸るまで如彼して藏匿て置いて下さらないか、衣服に血が附てたり、おど〳〵して居る處を見ると、邪慳な姑にいびられる嫁か。「なるほど。「或は繼母に苦しめられる娘か。「勾引された女で、女郎にでもなれと責められるのか。こりや、もし好くある奴でございますぜ。「うむ其邊だらう。何でも曰附に違ひないから、御亭主、一番俠客氣を出しなさい。「はあて、ようごぜえさあ、ほい、直ぐと其氣になる。はゝゝゝはゝ。かゝらむには後に懸念無し。亭主もし二の足ふまば我が職掌をいふべきなれど、藏匿ふことを承知したれば其にも及ばず都合可し。人情なれば此婦人を勦りてやる筈なれど、大犯罪人前にあり、これ忽にすべからずと、泰助は急ぎ身支度し

て、雪の下へと出行きぬ。赤城の下男八藏は、墓原に來て突當の部屋の前に、呼吸を殺して居たりしが、他の者は皆立去りて、怪しと思ふ婦人のみ居殘りたる樣子なれば、倒れたる墓石を押し寄せて、其上に乘りて伸び上り、窓の戸を細う開きて差覗けば、彼の婦人は此方を向きて横樣に枕したれば、顏も姿も能く見えたり。「やあ！と驚きの餘り八藏は、思はず聲を立てけるにぞ、婦人は少し枕を上げて、窓をあふぎ見たる時、八藏ぬつと顏差出し、拳に婦人を摑む眞似して、「汝、これだぞ、と睨めつくれば、連理引きに引かれたらむやうに、婦人は跳ね起きて打戰き、諸袖に顏を隱し、俯伏になりて、「あれえ。」

七　籠の囮

倉瀨泰助は旅店を出でて、雪の下への道すがら、一叢樹立の茂りたる林の中へ行懸りぬ。月いと清うさしいでて、葉裏を透して照らすにぞ、偶然思ひ付く頰の三日月、又露れはせざるかと、懷中鏡を取出せば、きらりと輝く照魔鏡に怪しき人影映りけるにぞ、はつと鏡を取落せり。

とたんに鐵棒空に躍つて頭を目懸けて曳！と下す。さしつたりと身を交せば、狙ひ外れて發奮を打ち路傍の岩を眞二つ。石鐵戛然火花を散らしぬ。こは彼の惡僕八藏が、泰助に尾し來りて、

十分油斷したるを計り、狙撃したりしなり。僥倖に鏡を見る時、後に近接曲者映りて、さてはと用心したればこそ身を全うし得たるなれ。

「了つた。と叫びて八藏が、鐵棒を押取直すを、泰助ははつたと睨め付け、「御用だ。と大喝一聲、怯む處を附け入つて、拳の電手錬のあてに、八藏は急所を撲たれ、蹈反りて、大地は揺と響きけり。

「月夜に暗殺、馬鹿々々しい、と打笑ひつゝ、泰助は曲者の顏を視めて、「おや、此奴は病院へ來た奴だ。赤城の手下に違ひないが、ふむ敵はもう我が來たことを知つてるな。こりや油斷がならぬ哩。危險々々、ほんの一機で此石の通りになる處、馬鹿力の强い奴だ。と舌を卷きしが、「待て、何ぞ手懸りになる樣な、掘出し物があらうかも知れぬ。と斯る折にも油斷無く八藏の身體を檢して腰に附けたる鍵を奪ひぬ。時に取りては千金にも勝りたる獲物ぞかし。之あらば赤城家へ入込むに便あり造化至造妙と莞爾と頷き、袂に納めて後をも見ず比企が谷の森を過ぎ、大町通つて小町を越し、坐禪川を打渡つて——急ぎ候ほどに、雪の下にぞ着きにける。

（談話前にもどる。）

却說赤城得三は探偵の樣子を窺へとて八藏を出し遣りたる後、穩かならぬ顏色にて急がはしく座を立ちて、二室三室通り拔けて一室の內へ入り行きぬ。こは六疊ばかりの座敷にて一方に日蔽

の幕を垂れたり。三方に壁を塗りて、六尺の開戸あり。床の間は一間の板敷なるが懸軸も無く花瓶も無し。但床の中央に他に類無き置物ありけり。鎌倉時代の上薦にや、小袿しやんと着こなして、練衣の被を深く被りたる、人の大きさの立姿。溢るゝ黑髮小袖の褄、色も香もある人形なり。言はぬ高峰の花なれば、手折るべくもあらざれど、被の雲を押分けて月の面影洩出でなば、薦長けたらむといと床し。

得三は人形の前に衝と進みて、どれ、鳥渡。上薦の被を引き上げて、手燭を翳して打見遣り、「む、可々。と獨言。舊の如く被を下して、「後刻に高田が來る筈だから、此の方は彼にくれて遣つて、金にするとしてまづ可しと。ところで下枝の方は、我れが女房にして、公債や鐵道株、ありたけの財產を、我れが名に書き替へてト大分旨い仕事だな。しかし、下枝めがまた惡く强情で始末にをへねえ。手を替へ、品を替へ、撫つ抓りつして口說いても應と言はないが、東京へ行懸けに、梁に釣して死ぬ樣な目に逢はせて置いたから、些は應へたらう。其に本間の死んだことも聞かして遣つたら、十に九つは此方の物だ。何うやら探偵が嗅ぎ附けたらしい。何も彼も今夜中に仕上げざなるめえ。其代り翌日ッから御大盡だ。どれ、ちよびと隱妾の顏を見て慰まうか。と豫てより下枝を幽閉せる、座敷牢へ赴くとて、廻廊に廻り出でて、欄干に凭り懸れば、此處はこれ赤城家第一の高樓にて、屈曲縱橫の往來を由井が濱まで見通しの、鎌倉半面は眼下にあり。

山の端に月の出汐見るとも無く、比企が谷の森の方を眺むれば、目も遙かなる畦道に、朦朧として婦人あり。黒髪颯と夜風に亂して白き衣服を着けたるが、月明りにて畫ける如く、南をさして歩むが如し。

得三は啊呀と驚き、「彼は慥に下枝の姿だ……否、否、三年以來、あの堅固な牢の内へぶちこんであるものを、まさか魔術を使ひはしめえし、戸外へ脱けて出る道理が無い。こりや心の迷ひだ。脱がしてはならぬ〳〵と思つてるからだ。此ばかりの事に神經を惱すとは、えゝ、意氣地の無い事だ。いかさまな、五十の坂へ踏懸けちやあ、ちと縒が戻らうかい。だが油斷はならない、早く行つて見て安心しよう。何、居るに違ひ無いが……まゝよ念の爲だと、急がはしく、馳せ行きて北の臺と名づけたる高樓の、怪しげなる戸口に到り、合鍵にて戸を開けば、雷の如き音ありて、鐵張の戸は左右に開きぬ。室内に籠りたる生暖き風むんむと面を撲ちて不快きこといはむ方無し。

手燭に照して見廻はせば、地に歸しけむ天に朝しけむ、よもや〳〵と思ひたる下枝は消えてあらざりけり。得三は顚倒して血眼になりぬ。

八　幻影

先刻に赤城得三が、人形室を出行きたる少時後に、不思議なることこそ起りたれ。風も無きに人形の被搖めき落ちて、妖麗なる顏の洩れ出でぬ。瑠璃の如き眼も動くやうなりしが、怪しい哉影法師の如き美人靜々と室の中に歩み出でたり。此幻影譬へば月夜に水を這ふ煙に似て、手にも取られぬ風情なりき。

折から疊障りの荒らかなる、跫音彼方に起りぬれば、黑き髪と白き顏はふつと消え失せ、人形は又舊の通り被を被りぬ。

途端にがたひしと戸を開けて、得三は血眼に、此室に駈け込み、「此の方は奈何だらう。あの樣子では同じく翼が生えて飛出したかも知れぬ。さあ事だ、事だ、飛んだ事だ。もう一度見ねばならない。と小洋燈の心を繰上げて、荒々しく人形の被をめくり、熟と覗きて舊のやうに被を下ろし、「うむ、此の方は何も別條は無い。やれ此で少しは安堵た。其にしても下枝めは何して失せた知らん。婆々が裏切をしたのではあるまいか。むゝ、何しろ一番糺明て見ようと、掌を高く打鳴らせば、稍ありて得三の面前に平伏したるは、當家に飼殺しの飯炊にて、お錄といへる老婆なり。

得三は聲鋭く、「お錄、下枝を何處へ遁した。と睨附くれば、老婆は驚きたる顏を上げ、「へい、下枝樣が何かなさいましたか、「しらばくれるない。屹度汝が遁したんだ。「否、一向に存じません。「汝、言ッちまへ。「些も存じません。「ようし、白狀しなけりや斯うするぞ。と懷中より裝彈

したる短銃を取出し、「打殺すが可いか。とお錄の心前に突附くれば、足下に踞りて、「何で其樣な事をいたしませう。旦那樣が東京へ行らつしやつてお留守の間も私はちやんと下枝樣の番をしてをりました。繩は解いて遣りましたけれども。「それ見ろ。さういふ糞慈悲を垂れやあがる。我が歸るまで應といはなけりや、決して下して遣ることはならないと、あれほど言置いて行つたぢや無いか。「でもひい〳〵泣きまして耳の遠い私でも寢られませんし、其上主公、二日もあゝして梁に釣上げて置いちやあ死んで了ふぢやございませんか。「えゝ！そんなことは何うでも可い。何處へ遁したか、其を言へッてんだ。「つい今の前も北の臺へ見廻りに參りましたら、下枝樣は平常の通り、牢の内に僵れて居ましたのに、俄に居無くなつたとおつしやるが、實とは思はれません。と言解樣の我を欺くとも思はれねば、得三は疑ひ惑ひ、さあらむには今しがた畦道を走りし婦人こそ、籠を脱けたる小鳥ならめ、下枝一たび世に出なば惡事の露顯は瞬く間と、おのが罪に責められて、得三の氣味の惡さ。慘たらしう殺したる、蛇の鎌首ばかり、飛失せたらむ心地しつ立つても居ても落着かねば、いざうれ後を追懸けて、草を分けて探し出し、引摺つて歸らむとお錄に後を賴み置き、勝手口より出でむとして、押せども、引けども戸は開かず。「八藏の馬鹿！外から鎖を下して行く奴があるもんか。とむかばらたちの八ッ當り。

折から玄關の戸を叩きて、「賴む、賴む。と音訪ふ者あり。聞覺えある聲は其、とお錄内より戸

を開けば、外よりずつと入るは下男を連れたる紳士なりけり。之は高田駄平とて、横濱に住める高利貸にて、得三とは同氣相集る別懇の間柄なれば、非義非道を以て有名く、人の活血を火吸器と渾名のある男なり。召連れたる下男は銀平といふ、高田が氣に入りの人非人。いづれも法衣を絡ひたる狼ぞかし。

高田は得三を見て聲をかけ、「赤城樣、今晩は。得三は出迎へて、「これは高田樣でございますか。まあ、此方へ。と二階なる密室に導きて主客三人の座は定まりぬ。高田は笑ましげに卷莨を吹して、「早速ながら、何は、令孃は息災かね。「えゝ、お藤の事でございますか、「左樣さ、私の情婦、はゝゝゝはゝ。と溶解けむばかりの顏色を、銀平は覗きて追從笑ひ、「ひゝゝゝ。得三は苦笑ひして、「藤は變つた事はございません。御約束通り、今夜貴下に差進げるが。……實は下枝ね。「はゝあ。「彼が飛んだことになりました。「ふむ、死にましたらう。だから言はないことか、あんなに慘いことをさなるなと。到々責殺したね。非道ことをしなすつた。「否、死んだのならまだしも可いが、何してか逃げました。「なに！遁げたえ？「其で今搜しに出ようといふところですて。「むゝ、其は飛だ事だ。猶豫をしちや不可ません。彼孃が饒舌と一切の事が發覺つちまふ。宜しい銀平にお任せなさい。喃、銀平や、お前はさういふことには馴れて居るから、取急いで探してお進げ申しな。と命くれば得三も、探偵に窺はるゝことを知りたれば、家を出でんは氣懸りなり

しに、これ幸と銀平に、「ぢや御苦勞だが、願ひます。私どもは後に些と用事があるから。といへば、原來同穴の貉にて、總てのことを知るものなれば、銀平は頷きて、「へい宜しうございます。下枝樣が如彼いふ扮裝のまゝ飛出したのなら、今頃は鎌倉中の評判になつてるに違ひありません。何をいはうと狂氣にして引張つて參ります。血だらけのあの姿ぢや誰だつて狂氣といふことを疑ひません。旦那、左樣なら、此から直ぐに。と立上るを得三は少時と押止め、「例のな、承知でもあらうが、三日月探偵が此地へ來て居るから、油斷のないやうに。と念を入るれば、「其は重々容易ならぬことだ。銀平しつかりやつてくんな。と高田も言を添へにける。銀平とんと胸を叩きて、「御配慮なされますな。と氣輕に飛出し、表門の前を足早に行懸れば、前途より年少き好男子の此方に來懸るにはたと行逢ひけり。擦違うて兩人齊しく振返り、月明に顏を見合ひしが、見も知らぬ男なれば、銀平は其儘歩を移しぬ。これぞ倉瀨泰助が、惡僕八藏を打倒して、今しも此處に來れるなりき。

九　破廂

泰助は晝來て要害を見知りたれば、其足にて直ぐと赤城家の裏手に行き、垣の破目を潛りて庭

に入りぬ。

目も及ばざる廣庭の荒たき儘に荒果てて、老松古杉蔭暗く、花無き草ども生茂りて踏むべき路も分難し、崩れたる築山あり。水の涸れたる泉水あり。倒れ懸けたる祠には狐や宿を藉りぬらむ、耳許近き木の枝にのりすれ〳〵梟の鳴き連るゝ聲いと凄まじ、木の葉を渡る風はあれど、塵を清むる等無ければ、蜘蛛の巣計り時を得顏に、霞を織る樣哀なり。妖物屋敷と言合へるも、道理なりと泰助が、腕拱きて彳みたる、頭上の松の茂を潛りて天より颯と射下す物あり、足許にはたと落ちぬ、何やらんと拾ひ見るに、白き衣切やうのものに、礫を一つ包みてありけり。押開きて月に翳せば、鮮々しき血汐にて左の文字を認めたり。

虐殺にされようとする女が書きました。何卒、此家の内から助け出して下さいまし。……書樣の亂れたる字の形の崩れたる、筆にて運びし物にはあらじ。思ふに指など喰ひ切りて其血を其手ににじり書き、句の終りには夥しく血のぬら〳〵と流れたるを見て、泰助はほろりと落涙せり。

之を投げたるは、下枝か、藤か。目も當てられぬことどもかな。いで我來れり、泰助あり、今夜の中に地獄より救ひ取りて、明日は此世に出し參らせむ。そも何處より擲ちたらむと高樓を打仰げど、其かと見ゆる影も無く、森々と松吹く風も、助けを呼びて悲しげなり。屹と心を取直し、丈に伸びたる夏草を露けき袖にて押分け〳〵尙奥深く踏入りて忍び込むべき處もやと、彼方此方

を經歷るに、驚くばかり廣大なる建物の内に、住む人少なければ、燈の影も外へ洩れず。破廂より照射入る月は、崩れし壁の骨を照して、家内寂寞として墓に似たり。稍ありて泰助は、表門の方に出で、玄關に立向ひ、戸を推して試むれば、固く内より鎖して開かず。勝手口と覺しき處に行きて、もしやと引けども同じく開かず。如何せむと思ひしが、不圖錠前に眼を着くれば、こは外より鎖せしなり。試みに袂を探りて、惡僕より奪ひ置きたる鍵を嵌むれば、きしと合ひたる天の賜物、「占めた。」と捻ぢれば開くにぞ、得たりと内へ忍び入りぬ。

暗闇を歩むに馴れたれば、爪先探りに跫音を立てず。やがて壇階子を探り當て、「此で、まづ、仕事に一足踏懸けた。と耳を澄まして窺へど、人の氣附たる樣子も無ければ、心安しと二階に上りて、壁を洩れ來る月影に四邊を屹と見渡せば、長き廊下の兩側に比々として部屋並べり。大方は雨漏に朽ち腐れて、柱ばかり參差と立ち、疊は破れ天井裂け、戸障子も無き部屋どもの、昔はさこそと偲ばるゝが一い二ウ三いと數ふるに勝へず。遙か彼方に戸を閉ぢたる一室ありて、燈火の灯影幽かに見ゆるにぞ、要こそあれと近附きて、ひたと耳をあてて聞くに、人のあるべき氣勢もなければ、潛かに戸を推して入込みたる、此室ぞ彼の人形を置ける室なる。

垂れ下したる日蔽は、これ究竟の隱所と、泰助は雨戸と其幕の間に、電の如く身を隱しつ。と見れば正面の板床に、世に希有しき人形あり。人形の前に坐りたる、十七八の美人ありけり。

泰助は呼吸を殺して其樣を窺へば、美人は何やらむ深く思ひ沈みたる風情にて、頭を低れて傍目もふらず、今泰助の入りたることは少しも心附かざりき。額襟許淸らに見え、色いと白く肉置き好く、髪房やかに結ひたるが、妖艶なることいはむ方無し。美人は正坐に堪へざりけん、居坐亂して泣きくづほれ啜り上げつゝ獨言やう、「あゝ惡人の手に落ちて、遁げて出ることは出來ず、助けて下さる人は無し。あの高田に汚されぬ先に、一層此儘死にたいなあ、お姉樣は何う遊ばした知ら、定めし私と同じ樣に。と横に倒れて唯泣に泣きけるが、力無げに起直り赤めたる眼を袖にて押拭ひて、件の人形に打向ひ、「人形や、好くお聞き。お前はね、死亡遊ばした母樣に、よく顔が肖てお在だから、平常姉樣と二人して、可愛がつてあげたのに、今こんな身になつて居るのを、見て居ながら、助けてくれないのは情ないねえ、怨めしいよ。御覽な、誰も世話をしないから、此暑いのに綿の入つた衣服を着てお在だよ。私を舊のやうにしてお呉れだつたら、甘味い御膳も進げようし、衣服も着換へさせますよ。お前のに綺麗な衣服を、姉樣と二人で縫ひ上げて、翌日は着せてあげようと樂みにして寢た晩から、あの邪慳な得三に、かうされたのはよく御存じでないかい。今夜は高田に恥かしめられるからさあ、何かして下さいてばよう。えゝ、これほどいふのに返事もしないかねえ。と犇と上薦の腰に縋りて、口説きたるには、泰助も涙ぐみぬ。

美人は又た、「あれ堪忍して下さいましよ。貴女は假にも母樣、恨みがましいことを申して濟み

ませんでした。でももう神様も、佛様も、妾を助けて下さらないから、母様何卒助けて下さい。さうでなくば、私を殺して早うお傍に連れて行つて下さいまし、よ、よ。と力一杯抱緊めて、身を震はせば人形もともにわなゝく如くなり。

泰助は見るに忍びず。いでまづ此孃を救ひ出さむ、家の案内は心得たれば背負うて遁げむに雜作は無しと幕を揭げて衝と出でたり。不意に驚き、「あれ。」と叫びて、泰助聲をも懸けざるに、身を飜して、人形の被を潛つて入るよと見えし、美人は消えて見えずなりぬ。あまりの不思議に呆氣に取られ、茫然として眼をぱち〳〵、「不思議だ。不思議と泰助は、潛かに人形の被の端へ片手を懸けたる折こそあれ。部室の外にどや〳〵と跫音して、二三人が來れる樣子に、南無三寶飛び退りて再び日蔽の影に潛みぬ。

十　夫婦喧嘩

高田の下男銀平は、下枝を搜し出さむとて、西へ東へ彷徨つ。巷の風說に耳を聳て、道行く人にも其とは無く問試むれど手懸り無し。南を指して走りしと得三の言ひたれば、長谷の方に行きて見むと覺束なうは思へども、此金が谷より滑川へ道を取つて行懸り、森の中を通るとき、木の

根を枕に叢に打倒れたる者を見たり。

時すがら惡き病疾に罹れるやらむ、近寄りては面倒、と慈悲心無き男なれば遠くより素通りしつ。まてしばし人を尋ぬる身にしあれば、人の形をなしたる物は、何まれ心を注くべきなり。と思ひ返して傍に寄り、倒れし男の面體を月影にて熟く見れば、豫て知己なる八藏の齒を喰切りて呼吸絕えたるなり。銀平これはと打驚き、脈を押へて候へば遙かに通ふ蟲の呼吸、呼び活けむと聲を張上げ、「八藏、やい八藏、何した〳〵、え、八藏ッ、と力任せに二つ三つ摑拳を撲はせたるが、死活の法にや協ひけむ。うむと唸くに力を得て「やい、緊乎しろ。と勵ませば、八藏はやうやうに、脾腹を抱へて起上り、「あ痛、あ痛。……おゝ痛え、痛え、畜生非道いことをしやあがる。と澁面つくりて銀平の顏を視め、「銀平、遲かつたわやい。「おらあ既での事で俗名八藏と拜まうとした。「えゝ、緣起でも無え廢止て呉れ。物をいふたびに腹へこたへて、こてえられ無え。「全體何うしたんだ。八藏は頭を搔き〳〵ありし事ども物語れば、銀平は、驚きつ又便を得つ、「ふむ、其では下枝は滑川の八橋樓に居るんだな。「あゝ、何してか紛れ込んだ。おらあ、窓から覗いて慥に見た。何とか工夫をして引摺り出さうと思つてる內に、泰助めが出懸ける樣だから、早速跡を跟けて、まんまと首尾よくぶつちめる處を、さん〴〵にぶつちめられたのだ。忌々しい。「可し一所に歩べ。行つて下枝を連れて歸らう。「おつと心得た。「さあ行かうぜ。「參りまする〳〵。何か

と申すうちに、はやこゝは滑川にぞ着きにける。

八橋樓の亭主得右衛門は、黄昏時の混雑に紛れ込みたる怪しき婦人を、一室の内に寢ませ置き、心を静めさせむため、傍へは人を近附けず。時經たば素性履歴を聞き糺し、身に叶ふべきほどならば、力となりて得させむず、と性質たる好事心。かうしてあゝしてかうして、と獨りほく〳〵頷きて、帳場に坐りて脂下り、婦人を窺ふ曲者などの、萬一入り來ることもやあらむと、内外に心を配り居る。

勝手を働く女房が、用事了うて襷を外し、前垂にて手を拭き〳〵、得衛の前へ丁と坐り、「お前様何なさる氣だえ。「何するつて何を何する。」と空とぼければ擦寄つて、「何をもないもんだよ。分別盛りの好い年をして、といふ顔色の尋常ならぬに得右衛門は打笑ひ、「其方もいけ年を仕つてやくな。といへば赫となり、「氣樂な事をおつしやいますな。お前様見たやうな人を怪我にも妬く奴があるものか。「おや恐ろしい。何を左様がみ〳〵いふのだ。「あゝいふ婦人を宅へ置いて何な懸合にならうも知れませぬ。「其事なら放棄ときな、おれが方寸にある事だ。ちやんと飲込んでるよ。「だツてお前様、御主筋の落人ではあるまいし、世話を焼く事はござりませぬ。「お前こそ世話を焼きなさんな。「否、あゝして置くと屹度庄屋様からお前を呼びに來て、手詰の應對、寅刻を合圖に首討つて渡せとなります。「其時は例の贋首さ。「人を馬鹿にしていらつしやるよ。「而して

娘は居ず、さしづめ身代にお前さね。「飛でもない。「うんや喜こばつし。「何故喜ぶの。「はて、あの綺麗首の代りにたてば、お前死んでも浮ばれるぜ。「えゝ悔しい。「悔しい事があるものか。首實檢に入れ奉る。死相變じてまツそのとほり、はゝゝゝゝ。「お前はなあ。「これ、古風なことをするな。呼吸が詰る、これさ。「鷄が鳴いても放しはしねえ。早く追ひ出してお了ひなさい。「水を打懸けるぞ。「啖ひ附くぞ。「苦、痛、眞個に啖ついたな。此狂女め、と振拂ふ、むしやぶりつくを突飛ばす。がたぴしといふ物音は皿鉢飛んだ騒動なり。

外に窺ふ、八藏、銀平、時分はよしとぬつと入り、「あい、御免なさいまし。」

十一　みるめ、かぐはな

「はい、光來なさいまし、何ぞ御用。と得右衛門居住ひ直して挨拶すれば、女房も鬢のほつれ毛搔き上げつゝ静まりて控へたり。銀平は八藏に屹と目注せして己はつか〳〵と入込めば、「それお客様御案内と、得衛の知らせに女房は、「此方へ。と先に立ち、奥の空室へ銀平を導き行きぬ。道々手筈を定めけむ、八藏は銀平と知らざる人の如くに見せ、其身は上口に腰打懸け、四邊をきよろ〳〵見廻すは、もしや婦人を尋ねにかと得右衛門も油斷せず、顔打守りて、「貴方は御泊では

ございませんか。と問へばちよつとは答せず、煙草一服思はせぶり、とんとはたきて煙管を杖、「親方、逢はしてお呉ねえ。と異にからんで言懸くれば、其と察して轟く胸を、押鎭めてぐつと落着き、「逢はせとはそりや誰に。亭主ならば私ぢや、さあお目に懸りましよ。と此方も負けずに煙草をすぱ〳〵。八藏は肩を動つてせゝら笑ひ、「おいらが媽々が來て居る筈、一寸逢はうと思つて來た。「ふむ、して何な御婦人だね。「些氣が狂れて血相變り、取亂しては居るけれど、すらつとして中肉中脊、戰慄とするほど美い女さ。と空嘯いて毛脛の蚊をびしやりと叩く憎體面。斯くては愈々彼の婦人の身の上思ひ遣られたり、と得衞は屹と思案して、「其は大方門違ひ、私の代になつてから福の神は這入つても狂人などいふ者は、門端へも寄り附きません。と思ひの外の骨の强さ。八藏は本音を吐き、「おい、可加減に巫山戯て置け。これ知るまいと思うても、先刻ちやんと睨んで置いた、此處を這入つて右側の突當の部室の中に匿藏てあらうがな。と正面より斬つて懸れば、ぎよつとはしたれど受流して、「居たら又何とする。「やい、やい、馬鹿落着に落着ない。亭主の許さぬ女房を藏して置けば姦通だ。足許の明るい内に、さらけ出してお謝罪をしろと、居丈高に詰寄れば、「こりや可笑い、お政府に税を差上げて、天下晴れての宿屋なら、他人の妻でも妾でも、泊めてはならぬ道理は無い。其とも其方の女房ばかりは、泊めるなといふ掟があるか、さあ其を聞うかい。と言はれて八藏受身になり、むゝ、と詰りて頬眼らし、「何さ、そりや此方の

商賣ぢや、泊めたが惡いといふでは無い。用があるから亭主の我が連れて歸るに故障はあるまい。といはれて否とは言はれねば、得衞もぐつと行詰りぬ。八藏得たりと疊み懸けて、「さあ、出して渡してくれ、否と言ふが最後だ。と揑乎と坐して大胡坐。得右衞門思ひ切つて、「居さへすれば渡して進ぜる、居らぬが實ぢやで斷念さつし。と言はせも果てず眼を怒らし、「まだ〳〵吐すか面倒だ。踏み込んで連れて行く、と突立上れば、大手を擴げ、「どつこい遣らぬは、誰でも來い、家の亭主此處に控へた。「何をと、八藏は隱し持つたる鐵棒を振翳して飛懸れば、非力の得衞仰天して、蒼くなつて押隔つれど、腰はわな〳〵氣はあぷ〳〵、困じ果てたる其處へ女房を前に銀平が一室を出でて駈け來りぬ。

銀平は何思ひけむ、勢に乘る八藏を取つて突除けづいと立ち、「勾引の罪人、御用だッ。と呼ばはれば、八藏もまた何とかしけむ、「えゝ、と吃驚身を飜がへして、外へ遁出し雲を霞、遁がすものかと銀平は門口まで追懸け出で、前途を見渡し獨言、「素早い、野郎だ。取遁がした、殘念々々、と引返せば、得右衞門は興覺顏にて、「つい混雜に紛れまして、未だ御挨拶も申しません。貴下は今しがた御着になつた御客樣、さては其筋の。と敬へば、銀平したり顏に打頷き、「應、僕は横須賀の探偵だ。」

遁げると見せ懸け八藏は遠くも走らず取つて返し、裏手へ廻つて墓所に入り、下枝が臥したる

部室の前に、忍んで様子を窺へり。

横須賀の探偵に早替りせる銀平は、亭主に向ひて聲低く、「實は、横須賀のさる海軍士官の令嬢が、江の島へ參詣に出懸けたまゝ、今以つて、歸つて來ない。と口より出任せの嘘を吐けど、今の本事を見受けたる、得右衛門は少しも疑はず。眞に受けて、「なるほど〳〵。と感じ入りたる體なり。銀平いよ〳〵圖に乘り、「えゝ、其で必定誘拐されたといふ見込でな。僕が探偵の御用を帶びて、所々方々と搜して居る處だ。「御道理。「先刻からの樣子では、お前の處に誰か婦人を藏匿つてある。其をば惡者が嗅ぎ出して、奪返しに來た樣子だが。……と言ひつゝ亭主の顏を屹と見れば、鈍や探偵と信じて得右衛門は有體に、「左樣、其通り。實はこれ〳〵の始末にて。と宵よりありし事柄を落も無くいうて退くれば、銀平はしてやつたりと肚に笑みて、表面に益々容體を節り、「はゝあ、御奇特の事ぢや、聞く處では年齡と言ひ、風體と言ひ、全く僕が尋ねる令嬢に違ひ無い。いや、追つて其許に、恩賞の御沙汰これあるやう、僕から上申を致さう、慥かに其が見度いものぢやが、といふに亭主はほく〳〵喜び、見事善根をしたる所存、傍聞する女房を流眄に懸けて、乃公の功名まツこのとほり、それ見たかといはぬばかり。あはれ銀平が惡智慧に欺むかれて、いそ〳〵と先達して、婦人を寢ませ置きたる室へ、手燭を取つて案內せり。

前には八藏驚破といはばと、手ぐすね引きて待懸けたり。後には銀平が手も無く得右衛門に一

杯くはして、奪ひ行かむと謀りたり。纔かに虎口を遁れ來て、仁者の懷に潛みながら、毒蛇の尾にて卷かれたる、下枝が不運憐むべし。

十二　無理强迫

赤城家にては泰助が、日蔽に隱れし處へ、人形室の戸を開きて、得三、高田、老婆お錄、三人の者入來りぬ、程好き處に座を占めて、お錄は携へ來りたる酒と肴を置排べ、大洋燈に取替へたれば、室內照りて眞晝の如し。得三其時膝押向け、「高田樣、おあ、お約束通り證文をまいて下さい。高田は懷中より證書を出して、金一千圓也と、書きたる處を見せびらかし、「いかにも承知は致したが、未だ不可ません。なにして了つたら、綺麗薩張とお返し申さうまづそれまでは、と又懷へ納め、頤を撫でて居る。「お錄、それ〳〵。と得三が促し立つれば、老婆は心得、莞爾やかに高田に向ひて、「お芽出度存じます。唯今花嫁御を。……と立上り、件の人形の被を揭げて潛り入りしが、「じたばたせずにお來でなさい、といふ聲しつ。今しがた見えずなりたる、美人の小腕を邪慳に摑みて、身を脫れむと悶えあせるを容赦なく引出しぬ。美人は兩手に顏を押へて身を縮まして戰き居たり。

得三之を打見遣り、「お藤、豫て言ひ聞かした通り、今夜は婿を授けて遣るぞ。嘸待遠であつたらうの。と空嘯きて打笑へば、美人はわつと泣伏しぬ。高田はお藤をじろりと見て、「だが千圓は頗る高直だ。「考へて御覽なさい。此程の玉なら、潰に賣つたつて三年の年期にして四五百圓がものはあります。其を貴下は、初物をせしめるばかりか、生涯のなぐさみにするのだもの、此方は見切つて大安賣だ。千圓は安價いものだね。「其も左樣ぢやな。どれ、一つ杯を獻さう。此處一寸お儀式だ。と獨り喜悅の助平顏、老婆は齒朶を露き出して、「直と屛風を廻しませうよ。「其が可い。と得三は頷きけり。虎狼や梟に取圍まれたる犧牲の、生きたる心地は無き娘も、酷薄無道の此談話を聞きたる心はいかならむ。絕えも入るべき風情を見て、得三は叱るやうに、「おい、藤。高田樣がお盃を下さる、頂戴しろ。これッ、人が物を言ふに返事もしないか。と聲荒らかに呼はりて、掴み挫がむ有樣に、お藤は霜枯の蟲の音にて、「あれ、御堪忍なさいまし。「何も謝罪る事ア無え。機嫌よくお盃を受けろといふのだ。えゝ、忌々しい、めそ〳〵泣いてばかり居やあがる。これお錄、媒妁人役だ。些、言聞かして遣んな。老婆は聲を繕ひて、「お嬢樣、何したものでございますね。御婚禮のお目出度に、泣いて在らしつちやあ濟ません。まあ、涙を拭いて、婿樣を見上げ遊ばせ。如何に優しいお顏でございませう。其は〳〵可愛がつて下さいますよ、ねえ旦那樣、と苦笑ひ、得三は「さうとも〳〵。「眞個に深切な御方つちやアありません。不足をおつしや

つては女冥利が盡きますよ。貴女お恥かしいのかえ、と舐めるが如く撫廻せば、お藤は身體を固うして、頭を掉るのみ答へは無し。高田は故意と怒り出し、「へむ、好い面の皮だ。嫌否なものなら貰ひますまい。女旱はしはしまいし。工手間が懸るんなら破談にするぜ。と不興の體に得三は苛立ちて、「汝、澁太い阿魔だな。といひさまお藤の手を捉ふれば、「あれえ。「喧しいやい。と白き頸を鷲掴み、「此阿魔、生意氣に人好をしやあがる。汝何しても肯かれないか。と睨附くれば、お藤は聲を震はして、「そればつかりは、どうぞ堪忍して下さいまし。と諸手を合すいぢらしさ。「應、肯かれないな。よし、肯かれなきあ無理に肯かすまでのことだ。仕て見せる事がある哩。といふは平常の折檻ぞとお藤は手足を縮めける。得三は腕まくりして老婆を見返り、「お錄、一番責めなきや埒が明くめえ。お客の前で掙き廻ると見苦しい、ちよいと手を貸してくれ。老婆はチヨッと舌打して、「ても强情なお嬢だねえ。といひさま二人は立上りぬ。高田は高見に見物して、「これ〳〵臺無しにしては惡いぜ。「なあに、賣物だ。面に疵はつけません。

泰助は、幕の蔭より之を見て、躍り出むと思へども、敵は多し身は單つ、湍るは血氣の不得策、今いふ如き情實なれば、よしや毆打をなすとても、死に致す憂はあらじ。捕縛して其後に、渠等の罪を數ふるには、娘を打たすも方便ならむか、さはさりながらいたましし、と出るにも出られずとつおいつ、拳に思案を握りけり。

得三は豫て斯くあらむと用意したる、弓の折を振上ぐれば老婆はお藤の手を扼りぬ。はつしと撲たれて悲鳴を上げ、「あゝれ御免なさいまし、御免なさいまし。と後へ反り前へ俯し、悶え苦しみのりあがり、紅蹴返す白脛ばたはけき心を亂すになむ、高田駄平は醉へるが如く、酒打ち飲みて居たりけり。

十三　走馬燈

無慙やなお藤は呼吸も絶々に、紅顏蒼白く變りつゝ、苛責の苦痛に堪へざりけむ、「ひい、殺して下さい殺して。と、死を決したる處女の心。よしや此儘撲殺すとも、隨ふべくも見えざれば、得三殆ど責倦みて、腕を擦りて笞を休めつ。老婆はお藤を突放せば、身を支ふべき氣力も失せて、はたと僵れて正體無し。

得三は、といきを吐きて高田に向ひ、「御覽の通りで仕様がありません。式作法には無いことだが、お藤の手足をふん縛つて、さうして貴下に差上げませう、喃、お錄、其が可いぢや無いか。「其が好うございます。其後は活すとも殺すとも、高田様の御存分になさいましたら、ねえ旦那。といへば得三引取つて、「ねえ高田様。駄平は舌舐ずりして、「慾にも得にもう迚もぢや哩。左

様して貰ひませうよ。「では證文をな。「うゝ、承知、承知。爰に恐しき相談一決して、得三は猶豫無く、お藤の帶に手を懸けぬ。娘は無念さ、恥かしさ。あれ、と前褄引合して、蹌踉ながら遁げむとあせる、裳をお錄が押ふれば、得三は帶際取つて屹と見え。高田は扇を颯と開き、骨の間から覗いて見る。知らせにつき道具廻る。

さても得右衛門は銀平を下枝の部屋に誘引つ、「此室に寢さして置きました。と部屋の戸を曳開くれば、銀平の後に續きて、女房も入つて見れば、こはいかに下枝の寢床は藻脱の殼、主の姿は無かりけり。「呀。「おや。「これは、と三人が呆れ果てて言葉も出でず。

銀平は驚きながら思ふやう、亭主は飽迄探偵と、我を信じて疑はねば、下枝を別の部屋に藏して、我を欺くべうも無し。之は必ず八藏が何とかして便を得て、前に奪ひ出だせるならむ。さすれば我は此家に用無し。長居は無益と何氣無く、「これは、怪しからん。不圖すると先刻遁失せた惡漢が小戻して、奪ひ取つたかも知れぬ、猶豫する處で無い。僕は直ぐに搜しに出るといはれて亭主は極惡げに、「飛んだことになりました、申譯がございません。「なあに貴下の落度ぢや無い、僕が職務の脫心であつた。いや然らば。と言ひ棄ててとつかは外へ立出でて雪の下へと引返せば、とある小路の小暗き處に八藏は隱れ居つ、銀平の來懸るを、小手で招いて、「おい、此處だよ。「お藤は得三の手籠にされて、遂には帶も解け廣がりぬ。こは悲しやと半狂亂、犇と人形に抱き

附きて、「おつかさん！と血を絞る聲。世に無き母に救を呼びて、取り絶る手を得三がもぎ離して捻ぢ上ぐれば、お錄は落散る腰帶を手繰つてお藤を縛り附け、座敷の眞中にずる〳〵と、髷を掴んで引出し、押しつけぬ。形怪しき火取蟲いと大きやかなるが、今ほど此室に翔り來て、赫々たる洋燈の周圍を、飛び廻り、飛び狂ひ、火にあくがれて居たりしが、ぱつと羽たゝき火屋の中へ逆さまに飛び入りつ、煽動に消える火とともに身を焦してぞ失せにけり。

颯と照射入る月影に、お藤の顏は蒼うなり、人形の形は朦朧と、煙の如く仄見えつ。靈山に撞く寺の鐘、丑滿時を報げ來して、天地寂然として、室内陰々たり。

斯りし時、何處ともなく聲ありて、「お待ち！と一言呼ばはり叫びぬ。

思ひ懸けねば、得三等、誰そやと見廻す座敷の中に、我々と人形の外には人に肖たらむ者も無し。三人奇異の思ひを爲すうち、誰が手を觸れしといふこと無きに人形の被すらりと脫け落ちて、上蔕の顏顯はれぬ。啊呀と顏を見合す處に、いと物凄き女の聲あり。「無法を働く惡人等、天の御罰を知らないか。左樣いふ婚姻は決してなりません。」

幕の内なる泰助さへ、此聲を怪しみぬ。前にも既に說ふ如く、此人形は亡き母として姉妹が慕ひ齊眉物なれば、宇宙の鬼神感動して、假に上蔕の口を藉りかゝる怪語を放つらむと覺えず全身粟生てり。況して得三高田等は、驚き恐れつ怪しみて、一人立ち、二人立ち、次第に床の前へ進

み、熟と人形を凝視つゝ三人は少時茫然たり。

機こそ來たれ。と泰助が、幕を絞つて顯はれたり。名にし負ふ三日月の姿をちらと見せるとおもへば、早くもお藤を小脇に抱き、身を飜へして部屋を出でぬ。洵に分秒電火の働き、一散に下階へ駈下りて、先刻忍びし勝手口より、衝と門内に遁れ出づれば、米利堅產種の巨犬一頭、泰助の姿を見て、凄まじく吠え出せり。

南無三、同時に轟然一發、頭を覗つて打出す短銃。

幸ひ狙ひは外れたれど泰助は稍狼狽して、内より門を開けむとすれば、跫然たる足音門前に起りて、外よりも又内に入らむとするものありけり。

泰助蒼くなりて一足退れば、轟然たり、短銃の第二發。

いとも危ふく身を遁れて、泰助は振返り、屹と高樓を見上ぐれば、得三、高田相並んで、窓より半身を乘出し、逆落しに狙ふ短銃の彈丸は續いて飛來らむ。爾時門の扉を開きて、つッと入るは銀平、八藏、連立ちて今歸れるなり。

流石の泰助も度を失ひぬ。

短銃の第三發轟然。

十四　血の痕

質探偵の銀平が出去りたる後、得右衛門は尙不審晴れ遣らねば、室の内を見廻るに、疊に附たる血の痕あり。一箇處のみか二三箇處。此處彼處にぽた〳〵と溢れたるが、敷居を越して緣側より裏庭の飛石に續き、石燈籠の邊には斷えて垣根の外に又續けり。こは怪やと不氣味ながら、其血の痕を拾ひ行くに、墓原を通りて竹藪を潛り、裏手の田圃の畦道より、南を指して印されたり。

一旦助けむと思ひ込みたる婦人なれば、此儘にて寐入らむは口惜し。この血の跡を慕ひ行かば其行先を突留め得べきが、單身にては氣味惡しと、一まづ家に立歸りて、近隣の壯佼の究竟なるを四人ばかり語らひぬ。

各々興ある事と勇み立ち、讀本でこそ見たれ、婦人といへば土蜘蛛に緣あり。さしづめ我等は綱、金時、得右衛門の賴光を中央にして、殿に貞光季武、それ押出せと五人にて、棍棒、鎌など得物を携へ、鉢卷しめて動搖めくは、田舍茶番と見えにけり。

女房は獨り機嫌惡く、由緒なき婦人を引入れて、蒲團は汚れ疊は臺無し。鷄卵の氷のと喰べさせて、一言の禮も聞かず。流れ渡つた洋犬でさへ骨一つでちん〳〵お預はするものを。加之横須

賀の探偵とかいふ人は、茶菓子を無錢でせしめて去んだ。と苦々しげに呟きて、あら寢たや、と夜着引被ぎ、亭主を見送りもせざりける。

得右衛門を始めとして四人の壯佼は、茶碗酒にて元氣を養ひ一杯機嫌で立出でつ。惜しや暗夜なら松明を、點して威勢は好からむなど、語り合ひつゝ畦傳ひ、血の痕を踏んで行く程に、雪の下に近づきぬ。金時眞先に二の足踏み、「得右衛門もう歸らうぜ。と聲の調子も變になり、進み兼ねて立止まれば、「是さお主は何うしたものだ。と言ひ勵す得右衛門。綱は上意を承り、「親方、大人氣無い、廢止にしませう。餘所なら可いが、雪の下はちと、なあ、おい。と見返れば貞光が、「左樣だとも〳〵、もう彼是十二時だらう。といふ後につき季武は、「今しがた靈山の子刻を打つた、此から先が妖物の夜世界よ。と一同に逡巡すれば、「えゝ、弱蟲めら何のこれたかが幽靈だ。腰の無い物なら相撲を取ると人間の方が二本足だけ强身だぜ。と口にはいへど己さへ腰より下は震へけり。金時は頭を掉り、「なに鬼や土蜘蛛なら、糸瓜とも思はねえ。「己もさ、狒々や巨蛇なら、片腕で退治て見せらあ。「我だつて天狗の片翼を斬つて落すくらゐなら、朝飯前だ。「此處にも狼の百疋は立處に裂いて棄てる强者が控へて居ると、口から出任せ吹き立つるに、得右衛門はあてられて、「豪氣々々〳〵、其口で歩行いたら足よりは達者なものだ。さあ行かうかい。といへばどんじりの季武が、「處が、幽靈は大嫌否さ。「辨慶も女は嫌否かッ。「宮本無三四は雷に恐れて震へ